

# 山形城三の丸跡

## 第10次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第206集



2013

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



やまがたじょうさんのまるあと

# 山形城三の丸跡

## 第10次発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第206集

平成25年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター







SD1完掘状況（北から）



調査区からみた三の丸遷の推定方向

# 序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、山形城三の丸跡の調査成果をまとめたものです。

山形城三の丸跡は、山形盆地中央に位置する山形市の市街地に所在し、現在の霞城公園（本丸・二の丸跡）の周辺を取り囲むように形成されています。山形市は、中世から近世初頭までは、最上氏の城下町として栄えました。とくに近世初頭には最上義光によって山形城が本格的に整備され大規模なものになりました。現在は、山形県の県庁所在地として、県の政治・経済の中心的都市として発展しています。

この度、福祉相談センター機能強化推進事業にかかわり、山形城三の丸跡の発掘調査を実施しました。調査では、山形城三の丸に伴う堀跡を発見し、陶磁器や木製品など多くの遺物も出土しました。これらの調査成果は、これからの三の丸跡の史実を究明していく上で、貴重な資料になることでしょう。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 25 年 3 月



公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 相馬周一郎

# 凡 例

- 1 本書は、平成24年度福祉相談センター機能強化推進事業に係る「山形城三の丸跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は山形県の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は、天本昌希、齋藤和機が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、齋藤敏行、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SD…溝跡                      SE…井戸跡  
RP…登録陶磁器              RQ…登録石製品              RM…登録金属製品              RW…登録木製品

- 7 遺構・遺物実測図の縮尺は各図に示した。
- 8 遺物実測図の網点の用法は下記のとおりである。また下記と異なる場合の用法のみ各実測図下に説明を付した。  
遺物実測図  …黒色塗  …赤色塗
- 9 基本順序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」によった。
- 10 本文・観察表で記した遺物の分類基準と表記方法は下記のとおりである。  
(材質分類) 出土した遺物は材質ごとに磁器、陶器、石器、土器、木製品、金属製品に大分類をおこない、各図・観察表に示した。磁器・陶器の区別については、波佐見等の有色胎土を使用した半磁半陶も磁器として分類し、白化粧土を用いた陶胎染付等は陶器と分類した。

(器種分類) 材質分類した遺物は、器種・器形をもとに小分類し、各器種の形状については東京都新宿区『内藤町遺跡—放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』（1992）第Ⅱ分冊の器種・器形分類表および、東京都新宿区『南山伏町遺跡—警視庁牛込警察署改築に伴う緊急発掘調査報告書—』（1997）附図2の器種・器形分類一覧の名称を主に使用した。山形城三の丸跡第10次出土遺物の分類、および観察表・本文中にてそれらを示す。

(文様・装飾・釉薬表記) 文様・釉薬表記については、生産地が判断できる資料は生産地で使用されている文様・釉薬表記を使用し、それ以外については出土している他の消費地遺跡で記載されている表記を使用した。また判別・特定が困難なものについては特定の記載をしていない。染付碗・皿・蓋等の見込および高台裏銘款は、観察表において「一重團線—」、「二重方形枠—」等の記載はせず、実測図のみで表した。磁器碗・皿類の装飾技法における表記では、呉須を用いているものについては、生産地により国内産を「染付」、中国産を「青花」、その他ヨーロッパ産等を「白地藍彩」と表記した。

(生産地表記) 本報告書においての遺物の生産地表記は、生産地および他の消費地遺跡出土資料と比較して明確に産地判別できる遺物には、「肥前」「瀬戸美濃」等の地域特定表記をした。それ以外の遺物で、各生産地資料との胎土・釉薬・絵付け等が類似するものについては、「肥前系」「瀬戸美濃系」等の表記をした。また、本調査区出土遺物には平清水焼（山形市）など在地系遺物が混在していると考えられるが、明確な生産地の基準資料が乏

しい現在、文献・伝世資料等で確認できる遺物を除き、肥前・瀬戸美濃・大塚相馬などの広域流通品との特徴を区別したうえで分類し、「在地」「在地系」と表記した。

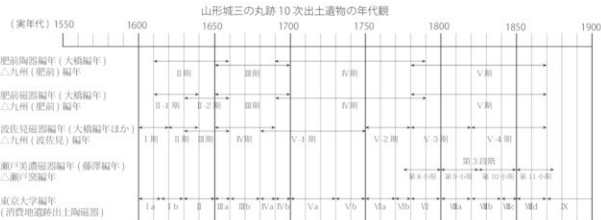
(年代表記) 遺物の年代観については、それぞれの生産地遺跡の年代観を使用し、備考欄に対応する生産地遺跡の編年を併記した。また消費地遺跡の年代観の参考として、継続的に近世遺跡出土遺物の編年研究を行っている東京大学埋蔵文化財調査室の示す編年を併記した。特に、本調査区から出土した主要な陶磁器の年代観については、肥前産陶磁器は、九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会 10 周年記念』(2000)、瀬戸美濃産陶磁器は瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史編 六』(1998)に記載されている編年を参考にした。その他の生産地の遺物については、各生産地の調査研究成果を参考にして記載した。

(木製品) 木製品は、各遺物の使用用途を基に出土量を踏まえて分類し、記載した。漆器椀の形状は、江戸遺跡研究会『江戸考古学事典』(2001)の「江戸遺跡出土椀の形態」を参考として分類した。下駄については、東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡Ⅳ-旧汐留貨物駅跡地内の調査』(2006)の第4分冊に記載されている木製品下駄形態分類図を参考に分類した。

(石製品) 石製品は、各遺物の使用用途を基に分類し記載した。

(金属製品) 銭貨・煙管は、江戸遺跡研究会『江戸考古学事典』(2001)を参考に分類し、記載した。鉄製品は腐食劣化が激しく、原形を留めていないものが多いが、図版では腐食劣化した状態を示し、想定される原形を破線で示した。

- 11 観察表に表記した各遺物の法量計測箇所は、近世遺物計測位置模式図に主要なものを示した。また図示していない遺物の法量については、実測図で示した向きより縦・横を長軸・短軸として計測し、全ての遺物の法量単位は(mm)及び、重量については(g)で表した。数値前の記号については( )が推定値、< >が残存値を表す。
- 12 同型品の個体数は、口縁部と底部で5/8以上残存しているものを1個体とし、そのどちらか多い方を個体数として計上した。



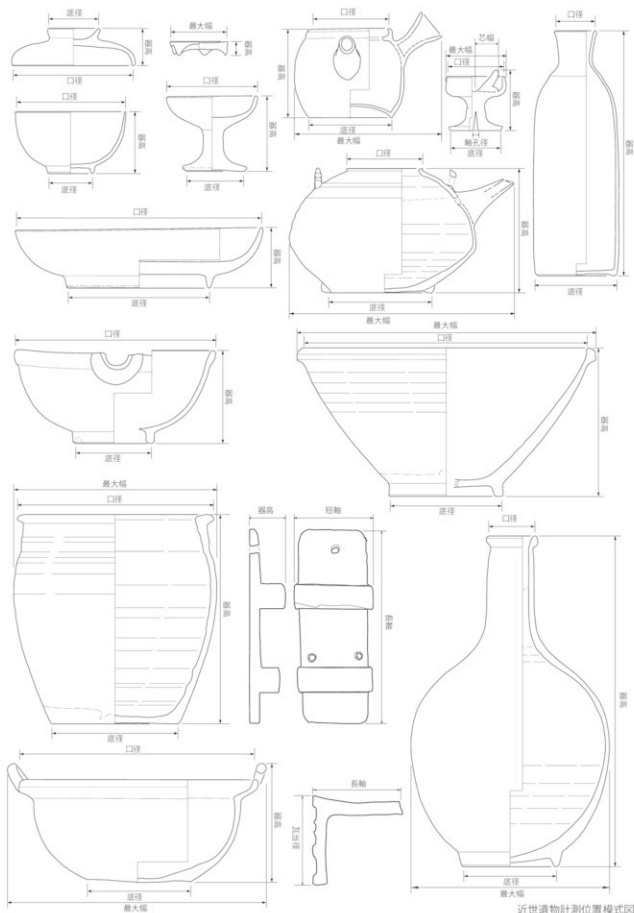
※ △は観察表中の記載名を示す。

※ 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会 10 周年記念』(2000)、瀬戸市史編纂委員会『瀬戸市史 陶磁史編 六』(1998)、東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡調査研究年報1 1996年度』(1997)および『同年報7 2007-2008年度』(2011)を基に、山形城三の丸跡第10次出土遺物の対象年代に絞り作成した。



## 山形城三の丸跡第10次出土遺物の分類

材質分類	器種分類	観察表表記		
やきもの	磁器	碗類	碗・紅猪口・猪口・段重・薄手酒杯・仏飯器	
		皿類	皿・手皿皿	
		鉢類	鉢・火入・乳鉢・蕎麦猪口	
		瓶類	燗德利・髪油壺・仏花瓶・小瓶・神酒德利	
		水注類	急須・水滴	
		蓋類	蓋	
		壺類	壺	
		その他	戸車・散蓮華・合子・御入・乳棒・梅皿・筆洗	
		陶器	碗類	碗・猪口・环
			皿類	皿
			鉢類	鉢・灰吹・香炉・捏鉢
	瓶類		燗德利・仏花瓶・大瓶・インク瓶・小瓶	
	壺・甕類		壺・甕・湯通し	
	銅類		土鍋・行平銅	
	蓋類		蓋	
	播鉢類		播鉢	
	灯火具類		秉燭	
	水注類		土瓶・小水注	
	植木鉢類		植木鉢	
	片口類		片口鉢	
	その他		仏飯器・御猪口	
	妬器		皿類	皿
		播鉢類	播鉢	
		水注類	急須	
		土器	皿類	土師質カワラケ
			鉢類	土師質火消壺・瓦質火鉢・土師質風炉
			銅類	瓦質焙烙
	灯火具類		土器秉燭	
	その他	土人形・土鍾・ミニチュア土器		
	木製品	瓦	軒丸瓦・軒平瓦・軒棧瓦	
			食用具	漆器類 漆器桶・漆器蓋・天目台 調理具類 大鉢・杓文字・まな板・箸・杓子・籠・杵
		生活雑貨	下駄類	連南下駄・差南下駄
			容器類	曲物・桶
蓋類			木蓋	
工具類			刷毛・横槌・鎌	
調度類			御膳・櫛・盆	
その他		部材類	部材・加工木片	
		その他	荷札・板状木製品	
金属製品		古銭 (寛永通宝)・硬貨 (五十銭)		
		煙管 (吸口・雁首)		
	包丁・急須			
	鍔・刀子・和釘・手違鉾			
	刀装具 (切羽)・刀装具 (石突)			
	櫛・馬具 (蹄鉄)・馬具 (轡)			
	硯・石板・石筆			
石製品	門み石・砥石			
	珠子			
	円盤状石製品・石鉢			



近世遺物計測位置模式圖

# 調査要項

遺跡名	山形城三の丸跡					
遺跡番号	山形県中世城館遺跡調査報告書番号 201-002					
所在地	山形県山形市十日町一丁目					
調査委託者	山形県					
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター					
受託期間	平成24年4月27日～平成25年3月31日					
現地調査	平成24年5月14日～平成24年7月27日					
調査担当者	平成24年度	調査課長	齊藤敏行			
		整理課長	黒坂雅人			
		考古主幹	伊藤邦弘			
		調査研究員	天本昌希（調査・整理主任）			
		調査員	齋藤和機			
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課					
調査協力	山形県県土整備部建築住宅課営繕室					
	山形県村山総合支庁保健福祉環境部（村山保健所）保健企画課					
業務委託	基準点測量業務	株式会社	大洋測量設計社			
発掘作業員	安久津千賀子	阿部健一	石沢隆志	磯邊こずえ	市川光行	
	岡崎四郎	奥山研二	河合誠一	長南勝哉	富塚博利	
	中野俊夫	長岡忠	長岡伸恭	仁藤勝子	早川洋二	
	深瀬進	万年芳雄	山川博	吉田久悦		（五十音順）
整理作業員	安孫子道子	江口好弘	黒坂孝一	嶋田真奈美	高木孝純	
	中嶋美恵子	三原朋子	持留陽子			（五十音順）

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理・歴史的環境	3
2 山形城周辺の発掘調査	3
3 調査区周辺の土地利用	4
III 調査の成果	
1 調査の概要	7
2 出土遺物の概要	7
3 S D 1 出土遺物	8
IV 調査のまとめ	
1 出土磁器碗の法量分布	125
2 三の丸堀の発掘調査事例の比較	126
3 S D 1 の埋没過程について	126
参考文献	128
報告書抄録	巻末

## 表

表1 S D 1 出土磁器製品観察表	100	表12 S D 1 出土木製品 台所用品観察表	120
表2 S D 1 出土陶器製品観察表	109	表13 S D 1 出土木製品 工具観察表	121
表3 S D 1 出土陶器垂燭観察表	115	表14 S D 1 出土木製品 調度品観察表	121
表4 S D 1 出土土器・妬器製品観察表	115	表15 S D 1 出土木製品 下駄観察表	121
表5 S D 1 出土陶器・土器焼台観察表	116	表16 S D 1 出土木製品 墨書木製品観察表	122
表6 S D 1 出土瓦観察表	117	表17 S D 1 出土金属製品 銭貨観察表	123
表7 S D 1 出土土器・妬器製品 (その他) 観察表	117	表18 S D 1 出土金属製品 煙管観察表	123
表8 S D 1 出土瓦集計表	117	表19 S D 1 出土金属製品 その他観察表	123
表9 S D 1 出土木製品 漆器柄観察表	118	表20 S D 1 出土石製品観察表	124
表10 S D 1 出土木製品 曲物観察表	119	表21 S E 2 出土遺物観察表	124
表11 S D 1 出土木製品 木蓋観察表	119	表22 S D 1 出土実測外遺物観察表	133

# 図 版

巻頭写真1	S D 1 完掘状況				
巻頭写真2	調査区からみた三の丸堀の推定方向				
第 1 図	グリッド・遺構配置図	2	第 50~68 図	S D 1 出土遺物実測図 (磁器類)	25
第 2 図	地形分類図	5	第 69~87 図	S D 1 出土遺物実測図 (陶器類)	44
第 3 図	遺跡位置図	5	第 88~92 図	S D 1 出土遺物実測図 (石器・土器)	63
第 4 図	山形城三の丸堀発掘調査範囲	6	第 93~94 図	S D 1 出土遺物 (石器・土器)	68
第 5 図	S D 1 平面図	13	第 95~97 図	S D 1 出土遺物実測図 (漆器)	70
第 6 図	S D 1 断面図 (1)	14	第 98~99 図	S D 1 出土遺物 (漆器)	73
第 7 図	S D 1 断面図 (2)	15	第 100 図	S D 1 出土遺物実測図 (曲物類)	75
第 8 図	S D 1 完掘状況	16	第 101~103 図	S D 1 出土遺物実測図 (木蓋)	76
第 9 図	S D 1 断面 d-d'	16	第 104 図	S D 1 出土遺物 (曲物・木蓋)	79
第 10~13 図	S D 1 断面 a-a' ~ c-c'	17	第 105~106 図	S D 1 出土遺物実測図 (台所用具類)	80
第 14 図	S D 1 検出状況	18	第 107 図	S D 1 出土遺物実測図 (工具類)	82
第 15 図	S D 1 a 区 5 層検出状況	18	第 108 図	S D 1 出土遺物実測図 (調度類)	83
第 16 図	S D 1 西壁木杭列検出状況	18	第 109 図	S D 1 出土遺物 (調度・台所・工具)	84
第 17 図	S D 1 底面検出状況	19	第 110 図	S D 1 出土遺物 (調度・台所・工具)	85
第 18 図	S D 1 断面 d-d'・地山検出状況	19	第 111~114 図	S D 1 出土遺物実測図 (下駄)	86
第 19 図	S D 1 完掘状況	19	第 115~116 図	S D 1 出土遺物 (下駄)	90
第 20 図	S D 1 完掘状況	19	第 117~118 図	S D 1 出土遺物実測図 (墨書木製品)	92
第 21 図	S D 1 断面 d-d'・地山検出状況	20	第 119 図	S D 1 出土遺物実測図 (金属製品)	94
第 22 図	S D 1 西壁・底面検出状況	20	第 120 図	S D 1 出土遺物 (金属製品)	95
第 23 図	S D 1 10 層調査状況	20	第 121~123 図	S D 1 出土遺物実測図 (石製品)	96
第 24~31 図	S D 1 遺物出土状況	21	第 124 図	S E 2 遺構・遺物実測図	98
第 32~36 図	S D 1 遺物出土状況	22	第 125 図	S D 1 出土遺物 (石製品)	99
第 37 図	調査前風景	23	第 126 図	磁器碗指数グラフ (生産地別)	129
第 38 図	調査区地山	23	第 127 図	磁器碗指数グラフ (時期別)	129
第 39~44 図	調査風景	23	第 128 図	S D 1 出土遺物 各層出土陶磁器集合	130
第 45 図	S D 1 調査風景	24	第 129 図	S D 1 出土遺物 同型品集合	131
第 46~48 図	S E 2	24	第 130 図	S D 1 出土遺物 高台裏路款集成	132
第 49 図	調査説明会風景	24	第 131 図	S D 1 出土実測外遺物	133

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

山形城跡は、現在、国指定史跡となっている本丸・二の丸と、その周辺を取り囲む三の丸を含め、東西 1.480 m、南北 1.881 m の範囲が遺跡として登録されている。

今回の調査は、2012 年度の山形県子育て推進部子ども家庭課による福祉相談センター機能強化推進事業として、保健福祉センター東棟（仮称）の建設に伴う発掘調査である。調査に先立ち、2011 年 12 月に、山形県教育委員会（以後、県教委）によって試掘調査が行われ、三の丸の外堀跡と推測される遺構を検出し、大量の陶磁器の出土を得た。これを受け、子ども家庭課、県教委らで協議が進められ、記録保存を目的とした調査を行うこととなり、子ども家庭課を事業主として、県教委の指導の下、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（以後、埋蔵文化財センター）が調査の委託を受けた。埋蔵文化財センターでは、受託した山形城三の丸跡発掘調査の調査回数、年度ごと、調査原因となった事業別に順次振り分けており、今回の調査で第 10 次を数える。

## 2 調査の方法

### A 発掘調査

調査は村山保健所の敷地内に建設予定の保健福祉センター東棟の建物範囲 816 m<sup>2</sup>を対象に実施した。埋蔵文化財センターで実施した第 1～9 次までの山形城三の丸の調査は、共通のグリッドを設定して実施されているため、今回の調査もそれにならう（第 1 図）。山形城の全域を囲むように南から北へ A～H、西から東へ A～G と、300 m 四方の大グリッドを設定する。この大グリッドのひとつを南から北へ 00～99、西から東へ 00～99 と、3 m 四方の小グリッドに分割する。このグリッドを「大の南北・大の東西・小の南北・小の東西」の順で示すため、「AA0000」と表記する。本調査区は大グリッド C F、小グリッド南北 55～66、東西 34～42 にあたる。

調査区の現状は、舗装された駐車場と車庫であり、事

業主側で更地にした状況で調査側へ引渡された。まず、重機により表土除去を行い、その後、ジョレンで表土を削り、遺構検出を行う。検出した遺構は、三の丸堀跡である S D 1 と、それに重複する S E 2 のふたつのみ。調査区内は全面に擾乱が激しく、堀跡と並行して南北方向に建てられていた建物の基礎が複数重複していた。遺構覆土は黒褐色のシルト質土を基本とし、地山は砂礫層を基本とする。調査区地山部分にトレンチを 2 つ入れ（T 1、T 2）、基本層序を確認したところ、一般的な地山としての褐色土壌は検出されず、砂礫層のみであった。調査区は周辺に比べ 1 m 以上の段差があり、土地造成時に褐色地山層ごと削平されているのかもしれない。

遺構精査は、S D 1 を横断するベルトを設定し、a～d の 4 区に分け調査を実施した。まず、深掘り範囲を設け、堀の状態や層位を把握することからはじめ、底面、壁面には礫層が広がることを確認し、遺物取り上げの基準として、上層、中層、下層、最下層の 4 層に分けた。底面の幅は当初の想定よりも広く、人力では予定期間内の終了が困難なことが予想されたため、6 月 11 日～22 日まで重機を導入し、期間の短縮を図った。重機により a～d の各地区の上層～最下層の各層位ごとに掘削を行い、掘削した土の中から遺物を回収する方法をとった。そのため各地区各層位ごとに遺物を取り上げているが、相応のずれが生じていることを考慮せねばならない。

土層観察のため、ベルトを、堀の中心部、調査区東端から 5 m 程度のみを残し、堀底と堀壁の礫層にあたる手前までは重機により掘削した。土層断面の記録は、すべて北側からとっている。記録後、人力でベルトを掘削し、堀底、堀壁の検出を行った。人力掘削部の遺物の取り上げは、遺物の状態や出土層位を拘束して出土位置を記録した。遺物分布をみると（第 5 図）、堀の中央部に遺物ドットが集中しているのは、位置記録をとれたのが堀の中央に残したベルト部のみのためである。また、木製品に関しては、埋蔵文化財センターの収容能力を考慮し、原形のわからない破損品や部材品は、取り上げていない。

7 月 21 日に調査説明会を行い、約 80 人の市民の参

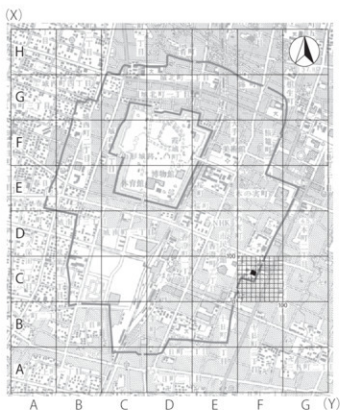
加を得た。調査は当初の予定通り7月27日に終了し、現場器材を撤収後、即日埋戻し工事を始め、8月6日に終了した。同日、子育て推進部子ども家庭課へ引渡し、すべての調査を完了した。

## B 整理作業

報告書の作成のための整理作業は、調査終了直後の7月30日から、2012年度内に実施し、すべて終了した。

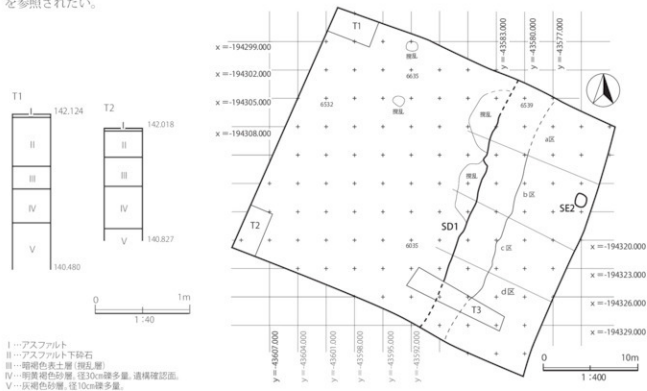
出土遺物の洗浄後、注記作業を行う。注記方法は、遺跡名を「三ノ丸10」とし、それに続けて遺構名を記入した。SD1のものは、さらにa~dの各地区と、各層位を上~下、最下層は丸囲いに下として、記入した。

本調査の出土遺物の分類は、東京都新宿区の内藤町遺跡と同区南山伏町遺跡の分類を基準とし、状況に合わせて適宜統合追加した。実測遺物の抽出は、全体の出土量と個体の状態を勘案し決定した。陶磁器類の実測は、外形線と断面のみ作製し、外面の文様や軸調は、はめ込み写真により表現する。内面や見込みの文様は、俯瞰写真または鉛筆トレースにより表現した。縮尺などは凡例や各図面に記したものを参照されたい。



※国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形北部」「山形南部」(平成12年7月1日発行)を使用。

0 1000m  
1:25000



- I...アスファルト  
II...アスファルト下基石  
III...暗褐色粘土層(埋戻し)  
IV...明栗褐色砂層、径30cm疎多量、遺構確認層。  
V...灰褐色砂層、径10cm疎多量。

第1図 グリッド・遺構配置図

## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理・歴史的環境

山形城の立地する現在の山形市中心部は、蔵王山系を源に、山形市北部を西流し最上川へと注ぐ馬見ヶ崎川によって形成された扇状地に立地している。この土地一帯は、出羽国を縦断する羽州街道と、仙台へ向かう笹谷街道が交差する交通の要衝であり、1356年に羽州探題として入部した斯波兼頼によって山形城が築かれたとされる。その後、斯波一族は、最上氏を名乗りこの地を代々統治し、11代義光のころ(1546～1614年)に最盛期を迎える。57万石の領地を有した義光の統治下で、三重の堀を備えた大規模な城郭構造が整備された。その後、1622年に最上氏が跡目をめぐる御家騒動で改易となり、替わって譜代大名の烏居忠政が入部する。この代には、城郭の部分的な改修や、城北を流れる馬見ヶ崎川の流路を城から離すなど、城内外の改修を行なっている。

烏居忠政の子、忠恒に後継ぎがなく、改易となると、以降の山形藩は、藩主が短期間で次々と替わる土地となり、代々減石縮小してゆくこととなる。最上氏時代には57万石を誇ったものが、最後の藩主水野忠弘のころには5万石にまで縮小している。そのため、山形城の大規模な改修は、江戸初期からほとんど行われず、往時の城郭構造をそのまま存続させることとなった。最上氏時代は、城郭内は三の丸まで家臣の屋敷地で固められていたものの、石高が大きく縮小した状況では、城内の広大な屋敷地を維持できずに代々荒廃して行く。ついに1764-67年の幕府直轄領期には、二の丸、三の丸の屋敷地が売却され、田畑とされるまでになる。

幕領期後に入部した秋元氏の代(1767-1845)に城内の再建が行われ、荒れ果てた城門や櫓を修復、撤去し、屋敷地を三の丸の東側に集中させている。また、本丸に代わり、城主の居住空間を三の丸大手門前に造営した新御殿に移すなど、城内を石高規模に合わせたものに変えていったことがうかがえる。その後は、幕政で失脚した水野氏が5万石で2代にわたり治め、明治を迎えた。

18世紀末～19世紀前半は、陶磁器の需要の増大と、

各藩の殖産興業政策により、各地で陶磁器窯が開かれた時期である。山形においても例外ではなく、山形城から南東3kmほどの下総国佐倉藩の飛地領、平清水地区には、文化年間に窯場が開かれたと伝えられる。以後、平清水焼として各地の技法を取り入れながら操業し、1844(弘化1)年には磁器製産に成功している。その後、明治に入り隆盛を迎え、数十軒の窯が創業されるに至った。しかし、奥羽線鉄道の開通に伴い、他地域からの陶磁器が大量に流通するようになると、平清水焼は日用品としての座を追われ衰退の道をたどる。大正、昭和年間には、土管や便器などを生産しながら操業を続け、現在は民芸品を中心に数軒の窯が操業を続けている。

明治に入り山形藩から山形県となり、山形城は廃城とされ、城内の土地建物は、すべて売却される。旧城内は地名を「香澄町」とされ、三の丸の東側は、学校、病院などが建設され市街地化が進む。そのため、東側の堀と土塁は、明治期の比較的早い段階でほとんど整地されたものと考えられている。東側以外の三の丸は、大正、昭和に入ってから造成が進み、一部に残っていた堀や土塁跡も徐々に埋め立てられ市街地に組み込まれていった。二の丸と本丸には、1896年に陸軍歩兵第三十二連隊が置かれ、本丸の堀はそれに伴い埋め立てられた。

戦後、陸軍施設が撤去された旧二の丸と本丸跡地は、山形市に払い下げられた後、1948年、霞城公園として市民に開放された。敷地内には、運動公園や博物館が建設され、都市公園としての整備が進む一方、三の丸跡は、山形市の中心地として更なる都市化が進む。1984年に山形城は、近世初期の面影を残す全国屈指の平城として国指定史跡となり、翌年、十日町地区の一部に残っていた三の丸土塁も追加で指定された。現在は、史跡公園として、二の丸大手門や本丸大手門の石垣などの復元整備事業が行われている。

### 2 山形城周辺の発掘調査

これまで山形城跡は、市街地の開発に伴うものや、史跡整備のためなどの理由で複数回の発掘調査が実施され



ている。三の丸跡の調査は、三の丸南側で工場地となっていた山形駅西口の土地画整理関連の事業により合計で94,000㎡を超える大規模な発掘調査が行われており、それ以外の場所では、市街地内の道路の拡幅や建物の増改築などに伴い小規模な調査を行なっている（第4図）。三の丸西側は、県道東原村木沢線の拡幅工事に伴うもの、三の丸北側は、山形市立第七小学校の改築や、国道112号線の拡幅工事などに伴う調査が行われている。今回の調査区を含む三の丸東側の調査事例は、第一小学校の改築に伴うものや、二の丸追手門外の新御殿跡地付近の法務局庁舎建築工事に伴うものがある。二の丸と本丸は、史跡整備に伴う調査が主な調査要因であり、山形市教育委員会が年々調査を進めている。

これまでの調査によって、山形城跡周辺には、近世以前の遺跡広がっていることが明らかになった。古い痕跡のものでは、縄文時代中期から後期の深鉢が双葉町遺跡など三の丸南側から一定量のまとまりをもって出土している。遺構は検出されていないものの、後世の遺構に破壊されたか、調査区外側に集落跡が展開していたことが予想できる。縄文から時代を下ると、4世紀代を中心とする古墳時代前期の集落が展開し、その後は少し間を置き、6世紀後半から9世紀代まで連続とつづく集落が展開する。県内唯一の出土事例である石製印章や、大型の掘立柱建物跡などの存在は、古代最上郡において中心的な集落の存在が予想される。中世においても12～14世紀代の貿易陶磁が多数出土しており、双葉町遺跡からは、方形区画の溝に囲まれた居館跡を検出している。

発掘成果として遺構、遺物が充実するのは、最上義光の山形城の拡大期と重なる16世紀末から17世紀前半代のものである。これまでの発掘調査区は、城の南西側が多く、これらの地区は、山形城の縮小とともに、屋敷地から畑に変えられたまま近代を迎えたため、山形城初期の状態が良好に保存されている地区ともいえる。今回の調査と同じ三の丸跡の調査事例として、山形一小敷地内、埋蔵文化財センターの三の丸跡第6次調査で三の丸東側の調査を実施している。

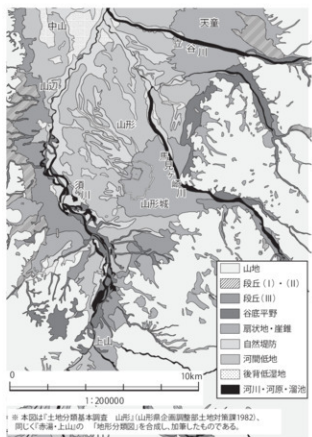
### 3 調査区周辺の土地利用

近世以後は絵図など多くの文献資料がのこされており、より詳細な情報を得ることができる。最上氏時代の

絵図を見ると、調査区は三の丸東側の「横町口」と「十日町口」の2つの虎口に挟まれた地区の堀と土塁部分にあたる。虎口付近には重臣が配されたようで、横町口の北には17,000石の重臣鮎延秀綱の名がみえる。その南側には小篠某なる人物の名が記されている。その後の領主の変遷を経ても調査区周辺は、中、下級武士の屋敷地として利用が続くが、18世紀半ばに山形藩が幕府直轄領期になると、城内屋敷地は田畑にされたと伝えられる。その後、城内の屋敷地は、三の丸東側にまとめられ、19世紀の水野時代の絵図にみる調査区周辺は、横町口からの通り沿いに侍長屋が並ぶのみで、その周辺は畑と記されているのみである。

明治に入り、1872（明治2）年、城内の土地建物が売りに出されると、三の丸の堀や土塁は埋め立てられたと考えられる。1877（明治10）年に描かれた絵図では、まだ堀や土塁は描かれているものの、その後、県令の三島通庸による都市計画の中で造成が進み、城内には公共施設を中心に様々なものが建てられるようになる。

調査区の北側にある山形市立第一小学校は、同じ場所に1887（明治20）年、横町尋常小学校として開校したものであり、調査区の東側に隣接している中央郵便局は、1888年から現在の場所で開業している。また、この郵便局の隣の市村本店は、1887年に開業した陶器店である。同店は、明治末に斜陽にあった平清水窯で工場を開き、東京の会社へ専用のインク瓶を制作販売している。調査区の西側、現在の市民会館の位置には、1902（明治35）年に山形県女子師範学校・県立山形高等女学校が建てられている。その後、女学校は東側に校地を拡大して行き、寄宿舎、附属小学校、附属幼稚園が建てられている。調査区は、この附属幼稚園の校舎下にあたり、この幼稚園校舎が建てられる1927（昭和2）年まで、調査区内に主だった建物は作られていないようである。女学校敷地内も堀跡推定ライン上は、校舎ではなく、校庭として利用されている。戦後、1969（昭和44）年、附属小学校・幼稚園が移転し、跡地は村山保健所となると、堀跡上に庁舎が建てられ現在までに至る。



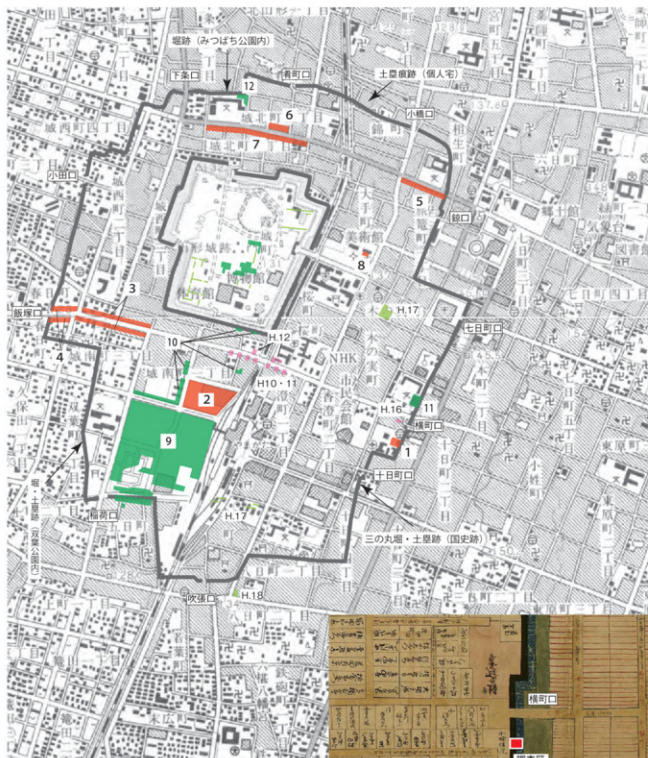
第2図 地形分類図

番号	遺跡名	種別	備考
1	山形城三の丸跡	城館	201-002
2	山形城跡(本丸・二の丸)	城館	201-001
3	城南一丁目遺跡	集落・城館	
4	双葉町遺跡	集落・城館	
5	城北遺跡	集落・城館	
6	山形西高敷地内遺跡	集落	
7	南館跡	館	201-003
8	飯塚橋跡	橋	201-004
9	落合館跡	館	201-008
10	山家城跡	城跡	201-018
11	三浦屋敷跡	館	201-022
12	荒橋跡	橋	201-023
13	西堀小但馬屋敷跡	館	201-031
14	金谷館跡	館	201-035
15	内城跡	不明	201-040
16	平清水館跡	館	201-042

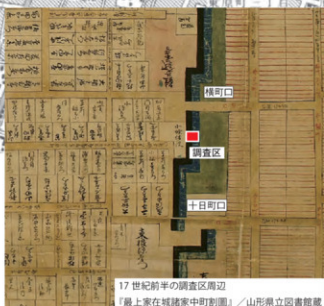
備考欄：201が付く番号(例201-002)は、山形県中世城館遺跡番号。



第3図 遺跡位置図



- |                |              |
|----------------|--------------|
| ■ 埋蔵文化財センター調査区 | ■ 山形市教委調査区   |
| 1 三の丸第10次調査    | 9 双葉町道跡      |
| 2 城南一丁目道跡      | 10 城南町道跡     |
| 3 三の丸第1～3次調査   | 11 山形一小敷地内道跡 |
| 4 三の丸第5、7、8次調査 | 12 城北道跡      |
| 5 三の丸第4、6次調査   |              |
| 6 三の丸第9次調査     |              |
| 7 三の丸第11次調査    | ■ 山形県教委分布調査区 |
| 8 三の丸第12次調査    | ■ 山形市教委分布調査区 |



第4図 山形城三の丸跡発掘調査範囲

## III 調査の成果

### 1 調査の概要

山形城三の丸跡第10次の調査は、山形市十日町一丁目において、2012年5月14日より開始し、同年7月27日まで実施した。調査面積は、816㎡で、SD1とSE2の2つの遺構を検出した。

#### A SD1

調査区東側を縦断して検出する山形城三の丸の東堀跡である。検出できた範囲は、長さ30m、幅は上端で12m、底面まで検出できたものでは8mを測り、軸は南北、東25°の方向に走る。壁面は西側のみを検出し、東側は調査区外へ伸びるため、東壁面は検出していない。深さは最深部で現地表面から5.3m、確認面から4mを測る。壁面は底面から35～40度の斜度で立ち上がり、西側斜面は、そのまま土累につながっていたものと推測される。護岸のためか、西壁斜面に木杭列が確認できた(第16図)。これらはすべて覆土中に打たれており、堀がある程度埋まった段階で施工されたものである。底面は検出できた幅で3.6m程度あり、堀全体の断面形状は、逆台形の箱堀になる。堀底面および壁面には、20～50cm大の川原石が不規則ながらも一定の密度をもって面的に存在しており、この上面をもって床面、壁面とした。床面下の調査は、重機を用いてセクションラインd-d'ライン上にトレンチを入れ(T3)、拳大の円礫と砂からなる地山が出るまで掘り下げた。他は大きい石を避け、可能な範囲で掘削を進めた。

覆土は、全体的に黒褐色を基調とし、色調や土質、含有物などから1層～10層に分層した。1層は、粘土質のシルト層で、堀の埋め立てにより堆積した層と考えられる。擾乱の影響を大きく受け、境界が曖昧なところも多い。一部に円礫が多数出土しているが、擾乱によるものと思われる。4層は、砂質層で粗粒砂層と細粒砂層が互層状に堆積しており、場所によっては数回の互層堆積が確認できる。水成堆積と考えられ、これだけの大量の砂が堆積する理由として、洪水による土砂の運搬が想定

される。5層と6層は、両者の色調はほとんど変わらないが、炭化材を大量に含む上層を5層として分層した。火災による廃材を廃棄した層と考えられ、大量の木製品のほか、焼けた樹木なども出土している。9層は、粘土質のシルト層に灰白粘土層が何層にも薄く堆積し縞状になっている。水成堆積によるものと考えられ、滞水と乾燥を繰り返しながら少しずつ堆積していったことがうかがえる。調査区全体を見ても、この土層中の縞模様が途中で崩れることがないため、溝渡えなどの掘り直しは行われていないと判断できる。

一括遺物の取り上げは、セクションラインに沿ってa～dの4区に分けたものを平面上の位置とした。出土層位の基準としては、4層が特に判断しやすく、調査区全面に確認できる砂層であるため、これを境に出土遺物を上層と下層に分け、4層を中心とする砂層は中層とした。下層の更に下、9層から出土したものは最下層とした。上層出土したのものには、擾乱部分との判断のつかないものも多い。擾乱と判断のつかないものは、遺跡一括として扱った。各遺物の解説については、次節にまとめる。

#### B SE2

調査区東端のCF6140～6141に位置し、埋没したSD1に重複する石組みの井戸跡を検出した。上面は擾乱により失われている。検出できた範囲では、長軸122cm、短軸108cmの方形で、深さは42cm。床面からほぼ垂直に立ち上がる。床・壁面には、15cm程度の円礫、角礫を積み上げている。出土遺物には大正年間の一銭硬貨があり、それ以降に埋没したのと考えられる。

### 2 出土遺物の概要

今回の調査では、SD1から大量の遺物を得ている。文化財登録数でタバコ70箱の遺物が出土し、内69箱がSD1とそれに重複する擾乱部分からの出土遺物であり、残り1箱がSE2とSD1以外からの調査区表土中からのものである。SD1の出土遺物は、碗や皿などの食膳具から糞や下駄などの日用雑器である。遺物の出

土量は層位によって差があり、火事や三の丸跡の埋め立ての際に不要品を廃棄したと考えられる。出土遺物のうち、古いものでは、17世紀前半段階のものが存在しているが、大半を占めるのは19世紀代の遺物である。また、上層出土とした遺物には、視乱からの出土遺物も含まれており、明治末～昭和前期のものも含まれている。なお、これまで10次にわたる三の丸の調査において、縄文～古代にかけての遺物が相当数含まれていることが多いが、今回の調査で近世以前の遺物は、一片も含まれていない。

### 3 SD1出土遺物

SD1からの出土遺物は、A磁器、B陶器、C炆器・土器（瓦、土製品を含む）、D木製品、E金属製品、F石製品の6種に大別し、器種ごとにまとめている。各種分類は東京都新宿区内藤町遺跡等に準拠し、適宜統合追加している。法量など個別の記述は観察表で行い、ここでは分類基準を中心にまとめておく。

#### A 磁器（第45～63図）

碗、皿、鉢、瓶、水注、壺などが出土しており、遺物全体の大勢を占める。産地は肥前、瀬戸美濃のほか、清水水を含めた在地系の磁器製品も相当数含まれているものと思われる。碗、皿、燗德利などを中心に、出土同一形状、同一文様の同型品が多い。

##### i 碗類

口径を中心に、小碗、中碗、大碗と分類し、それぞれの蓋、加えて薄手酒盃と仏飯器、紅猪口を碗類として分類した。合計167点を実測し、各器種の内訳は、小碗62点、中碗68点、大碗2点、蓋21点、薄手酒盃9点、仏飯器3点、紅猪口2点となっている。

小碗は口径91mm未満、中碗は口径91～119mm、大碗は口径120mm以上のものと分類した。薄手酒盃は小碗と同じサイズだが、清酒用の猪口として、薄手で見込みに上絵を施すものを別器種としてまとめたものである。また、小碗に脚のつくものは仏飯器とした。36は脚がつくものの、器形から仏飯器には含まなかった。紅猪口は菊花形に型打でつくられているものを分類した。

##### ii 皿類

口径を中心に136mm未満の皿を小皿、136～257mm

のものを中皿、258mm以上を大皿と3器種に分類した。合計59点を実測し、各器種の内訳は、小皿41点、中皿16点、大皿2点となる。

##### iii 鉢類

碗や皿との区分において、口径/器高比などで厳密な基準を設けず、周辺遺跡での同形品の扱いにならない分類する。鉢、蓋物、猪口、段重、合子、火鉢、倒入を鉢類としてまとめた。小鉢1点、中鉢7点、猪口3点、合子4点、蓋物2点、段重3点、倒入1点、火鉢2点の合計23点を図化している。

口径150mm以下を小鉢、151～141mmを中鉢とし、蓋付きのものは蓋物として分けた。猪口は口径151mm未満で、見込みが深い桶形で「蕎麦猪口」を指標とし、これに類するものを分けた。段重は浅いらい形の鉢が2段以上重なるもので漆器重箱の模倣品である。合子は小型の蓋物で、身と蓋の大きさがほとんどきれいに合わさるもの。倒入は鳥などの倒入れにしたもの。火鉢は煙草の火種や暖をとるための炭をいれるための鉢である。

##### iv 瓶類

袋状に口が閉塞するか、見込みの深い筒状の容器を瓶類とする。容量を基準に、小瓶、中瓶、大瓶と分類し、用途から神酒德利、髪油壺、燗德利、仏花瓶と分類した。小瓶8点、中瓶1点、神酒德利1点、髪油壺2点、燗德利7点、仏花瓶1点を図化した。

1合未満の容量の瓶を小瓶とし、1合以上8合未満を中瓶、8合以上のものを大瓶とする。神酒德利は神前に供える酒を入れる容器で、体部がくびれ、丸く肩を張る瓶子形のものを出出した。髪油壺は胴径に対して器高が低く、頸が非常に短い小瓶をまとめた。燗德利は薄手で縦に細長い瓶類。出土した瓶類の多くは燗德利である。口がラッパ状に開く器形のものには仏花瓶とした。

##### v 水注類

液体を注ぐための注口がついたもの。磁器では急須と水滴をまとめた。急須は蓋と合わせて7点、水滴は4点を図化した。

急須は現代のものと同じく茶を煎じるためのもので、注口を正面に、横に取手がつく。蓋は空気を出すための穴が開くもの。水滴は硯の水入れとして用いる文房具。

##### vi 壺・甕類

貯蔵用の容器で口縁部がすぼまり袋状になるものを

壺、広がるものを糞としてまとめ、器高を中心に大、中、小に分ける。磁器では図化できるものは少なく、器高120mm～299mmの中壺1点のみを図化した。

#### vii 磁器製品

容器以外のもの。戸車、散蓮華に加え、近代以降の磁器製品をまとめた。戸車は2点、散蓮華1点、ミニチュア1点、近代磁器製品として梅皿、筆洗、乳鉢をそれぞれ1点ずつ図化している。

戸車は円盤形で中央に丸い穴の開けられたもの。引き戸の車輪として用いる。散蓮華は手の付いた匙形の器具。用途、器形ともに現代のレンジと変わらない。近代磁器製品は、明確に明治以降のものとして判断できるものをまとめた。梅皿と筆洗は両者とも絵画用品であり、287の裏には「高等一年 本郷きん」の墨書があり、県立山形高等女学校の生徒のものと思われる。

### B 陶器 (第64～82図)

碗、皿、鉢、瓶、水注、糞・壺、鍋、乗轡類がある。産地は瀬戸美濃系、肥前系、京・信楽系、大塚相馬系などがあり、磁器製品に比べると判別困難なものが多い。

#### i 碗類

小碗15点、中碗17点、大碗2点、仏飯器3点の合計37点を図化した。分類基準は磁器のものと同じである。大塚相馬産のものも多く、他の推定産地のものも大塚相馬での模倣品の可能性がある。セットものとして流通していたと思われる中碗の出土が多いが、磁器碗と違い同型品の出土はほとんどない。300は増埴に転用したもので、内外面が被熱により発泡する。

#### ii 皿類

小皿15点、中皿2点、大皿3点の計20点を図化した。分類基準は磁器のものと同じ。小皿には肥前唐津の溝緑皿が多くみられる。330と331のように、赤褐色の胎土のものは特徴的に兜巾高台となる。332は2枚の溝緑皿が融着したものである。全体で肥前唐津産のものが多いが、337～339のような在産地のものも含まれる。

#### iii 鉢類

中鉢5点、大鉢2点、片口7点、捏鉢1点、合子1点、灰吹3点、御猪口1点、香炉1点、火鉢2点、植木鉢6点、搦鉢9点の計38点をまとめた。

中鉢は口径151mm～241mmで、大鉢は口径242mm以

上のもの。片口は口縁の1カ所に注口がついた鉢。出土したものは、すべて口縁を切り込んで口をつけるものである。352～356は、浅黄～淡緑色の灰釉が施され、見込みで5点の長方形の目跡を残すもので在産地と思われる。器形復元には至らないものの同一片が多数存在する。捏鉢は口径200mm前後の丸形の鉢で、装飾が簡素なもの。359は淡い青紫色の海鼠釉が内外面に施される。灰吹は煙草の灰を捨てるための細身の筒形容器で、図化したものはいずれも口縁部に煙管の敲打痕を残す。御猪口は鳥類飼育用の餌皿として用いられる、握みのついた小さな容器。香炉は浅めの筒形で内面無釉に加え三足のつくもの。火鉢は暖をとるための炭を入れる鉢。366、367に図化した。いずれも瓶掛形のもので、366は獅子頭のかみ部片。獅子の口には針金が入っていた。植木鉢は底部に穿孔された桶形の鉢をまとめた。搦鉢は内面に柳目が削り込まれた鉢である。いずれも内外が鉄釉で施釉されており、玉緑色のものが多く、上層から下層まで出土している。379は口縁部に窪みがある。針目は375が見込みで1回転させているが、そのほかの針目は口縁部から直線で見込みまでつなげている。

#### iv 瓶類

中瓶1点、大瓶6点、燗徳利2点、髪油壺1点、仏花瓶1点の計11点を図化した。中瓶は383に図化した鉄釉のべこかん徳利があり、8合以上容量をもつ大瓶は、すべて鶴首逆瓶形のものである。387～389は、同じ場所から出土した3個体の笹絵徳利である。燗徳利の391は、鷹口のもので、胴部が底部付近まで接合するが、残存率は胴径の1/16以下しかない。392に図化した髪油壺は、大塚相馬の脱胴で、19世紀後半のものと考えられる。仏花瓶は393に図化した会津本郷の碎石手のもので出土している。インク瓶は平清水産の万年筆用のインクを入れる容器。明治末～大正初頭に東京の丸善などに出荷された。各種メーカーのマークが刻印されている。赤紫の錆釉が施され、上層、覆乱層より出土する。

#### v 水注類

土瓶5点、小水注・蓋3点、急須蓋3点の計11点を図化した。土瓶は丸い胴の一方に注口が付き、上方に把手をかけるための耳が胴の高側につくもの。大塚相馬系の青土瓶や色絵土瓶の破片を多く得ているが、一個体に復元できるものは少ない。403は注口が上向きのもので、

型打により方形に整形される。小注水は醤油などを注ぐための小型の水注で、405に図化したのは、灰軸が施される半月口形のもの。404、406は小壺形状の小注水につく蓋か。蓋に空気穴が開くものは急須蓋とした。

#### vi 壺・甕類

器高を中心に大、中、小に分類し、陶器では、小壺3点、中壺4点、小甕6点、中甕7点、湯通し1点を含めた計21点をまとめる。湯通しは冷えた食品を温める寒冷地独特の器種であり、内外施釉で見込みにいくつも穿孔されているもの。山形庄内地方の大宝寺焼などでつくられている。小壺は器高120mm未満のもので、412のようにミニチュアとすべきか判断に悩むものも含む。411は堀の床層から出土した唯一の遺物で、壺か甕の胴部片と思われる。414は口唇部の軸が禿げ、内面に橙褐色の付着物が全面に確認できる。中壺は器高120～299mmのもので、300mm以上の大壺は四耳壺を指標とするが、今回の調査で大壺に該当するものは出土していない。小甕は器高が250mm未満のもの、中甕は器高が250～500mmのもの。中甕の427、428は、口縁部がT字形になるもので、見込みに径3mm程度の小礎が付着する。実測外で同様の個体が複数点確認できる。

#### vii 銅類

土鍋10点、行平鍋3点、蓋2点の計14点を図化した。土鍋は碗形で口縁二方向に耳のついた鍋で、行平鍋は注口と把手のつく鍋である。銅類は、同一破片は多いものの、復元率が低く実測個体とならないものが多数ある。

#### viii 乗燭類

乗燭計12点を図化した。乗燭は灯火具として油を貯める部分と火を灯す部分を有するもの。いずれも中央に芯立てを有するたんころ形で、447～450のようには無脚のものは軸穴がなく、451～458のように有脚のものは底部に軸孔をもつ。

### C 柘器・土器 (第83～89図)

無軸焼締めの柘器と素焼きの土器。両者とも点数は多くはないため、まとめて扱う。碗、皿、鉢、水注、甕、鍋、乗燭、土製品、焼台、瓦がある。柘器の産地は、近世においては備前や肥前など西日本のもの、近代以降においては在地産と思われるものが多い。

#### i 碗・皿類

小碗1点、小皿2点の計3点を実測した。459は刻印で「萬古」の字がみえる端反碗。内面に透明釉がかかるが、ここに分類しておく。小皿は460に図化した柘器の輪花皿と、手捏ねのカワラケ461がある。

#### ii 鉢類

火鉢2点、風炉1点、五徳1点、播鉢2点の計6点を図化した。火鉢と分類したものには、用途として焔炉や七厘としてのものも含まれる。風炉は茶道具のひとつで釜、土瓶をかけて湯を沸かすための加熱器。646に図化し、円筒形で窓の部分から上部を欠くもの。「乾」の刻印がみられる。五徳は瓦質のもので、円形の透かしが入られる。過去の三の丸調査においてもいくつか出土している。播鉢は柘器のものが2点出土し、466は備前産、467は肥前産のもの。

#### iii 水注類

柘器の急須と蓋を3点ずつ、計6点図化した。468は取手部を欠き、469は注口部を欠く。蓋はすべて紫褐色のもので、形状の異なる3種を掲載した。

#### iv 乗燭類・土製品

土製の灯火具1点を図化した。474と同一のものはミニチュア土製品とされることも多いが、中央の芯立てに煤が付着することから実用品と判断する。土製品として人形1点、不明土製品2点を図化した。476は手捏ねの容器状のもので、外面に「福田(相田か)～」と墨書される。477～479は釜のミニチュア、481は不明土製品。腰が「く」の字に括れる円筒状のもの。

#### v 鍋・甕類

焙烙1点、中甕2点、大甕1点を図化したものをまとめる。482は瓦質の焙烙で、豆などを炒るための底の浅い素焼きの土器。同一個体片を含め側面に孔が3カ所確認できる。器高500mm以上の甕を大甕とした。埋裏など固定して使用するものを指標とする。485は、底板部は残存するものの、そこから体部に接合するものはわずかであり、体部口縁部ともに残存率1/8以下である。

#### vi 焼台

窯道具としての焼台は、五足の檜梗台、円形または方形の台に四つの脚をつけた焼台が出土している。大きさには規格性があり、裏面の刻書は大きさに関するものと思われる。片口等の見込みに類似した5個の目跡があることから、これら中・大型の陶器を重ね焼きする際に

使用されたことが伺える。桔梗台はすべてロクロ、上部回転切で成形されており、中央に穿孔しているものもある。脚間は時計回りに1回切ったもの、反時計回りに1回切ったもの、両側から2回切ったものに分けられる。四脚の焼台は、脚部先端に磁器滓が付着し、4つの目跡を持つ陶碗・皿類が出土していることから、これらの重ね焼きに使用したものと思われる。脚部と体部は異なる粘土を使用し、上部は布目圧痕が認められる。近隣地方窯の諸事例から、女型の脚部に一度粘土を押し込み、その上から別の粘土を入れて布を当てて型打成形していると考えられる。

#### vii 瓦

調査区全体で60kgを超える瓦が出土している。調査区は横町口近くに、櫓門に簀かれた瓦と考えられ、より横町口の近くで行った県教育委員会の試掘調査でも多くの瓦が出土している。瓦は、黒瓦、赤瓦に加え、施軸平瓦、椀瓦も出土している。今回の調査も含めて付近で出土した軒丸瓦は、すべて連珠三巴文で、家紋瓦などは出土していない。頁数の都合上、軒瓦のみ掲載する。

### D 木製品 (第90～113図)

すべて中層以下で出土し、下層を中心に大量に出土している。埋蔵文化財センターの保存、収納方法に限界があるため、全体形状が把握できるもののみ回収し、大型の建築部材品や不明品などは取り上げていない。

#### i 漆器

漆器碗と天目台、蓋をまとめ、漆器碗は23点、天目台2点、蓋19点の44点を図化する。取り上げ時にばらばらになってしまったものも多いが、整理期間上、保存処理を実施できないため、接合は行えない。現在の状態で実測し耐えうるものを選んで図化している。513は最下層の初期伊万里などがまとまって出土した地点からのもの。底部の厚い三重丸椀はより下の層から出土する傾向がある。542蓋は裏面被熱し炭化している。穿孔されているものも多く、514、516、525、550、554などにみられる。516に関しては、高台をつくらない分厚い底部に大きな孔が開けられており、他のものとは異質な印象をうける。

#### ii 曲物類

側板と底板からなるもので、わっぱ、柄杓、桶、提灯

の4器種を曲物類としてまとめた。17個体を取り上げ、全部で9点を図化した。破損しやすいため、図化できるものは少ない。取り上げなかった部材のみのものを含めれば、個体数は更に多かっただと考えられる。

わっぱは薄く断ち割った板を丸めたものを樹皮などで綴じ合わせた容器で4点を図化した。555と556は、蓋と身でセットになるもので、556の外面には「戊寅九月廿八日 山藤屋」と墨書される。これらには、口縁に小型の銅製丸釘が2本セットで4カ所打たれ、側板を貫通した釘は、内側で折り曲げられる。釘の間には、目の細かい銅製織金網が残存しており、補強か装飾かは定かではないが、明治以降のものだと判断できよう。558～560は柄杓で、いずれも柄の部分が破損している。560は内側の土ごとに取り上げたところ、土の中から柄の当て具が出てきた。柄の当て具は、いくつか出土しており、図化したものとは別の形状のものを561として第104図に掲載しておく。562は提灯の枠で木釘が打たれている。563は桶の取手部分で、組み合わせた状態で出土した。取手の部材は多く見られたが、桶として全体を認識できるものはない。

#### iii 木蓋類

曲物や甕、裏の蓋、あるいは底板として用いたと考えられる円形の板をまとめる。大量に出土しており、44点を取り上げ、うち20点を図化し、18点をここにまとめる。墨書が見られる残り2点は、墨書木製品にまとめた。径120mm未満のものを小型蓋、120～210mmのもの中型、211mm以上のものを大型とする。破損したものは取り上げなかったものが多いので小型の点数が多い。大型の582は複数の板を接ぎ合わせて一枚の蓋にしており、埋釘跡が2ヶ所確認できる。

#### iv 台所用具類

甕、箸、杓子、木皿、杵、大鉢をまとめる。甕は583に飯甕、584に味噌甕を図化する。箸は状態の良いもののみ取り上げた。585は先端が尖る片口形のもの、586は赤漆の塗箸である。杓子は2点確認でき、1点588に図化した。取手部がホゾ溝を切った差し込み式のものであり、根元のみ残存する。木皿は13点出土しており、3点を589～591に図化した。どれも見込みが浅く、漆の塗布の痕跡は確認できない。底部は高台を削り出そうとした途中の未製品なのか、これで完成なのか判断と



しないものが多い。杵と大鉢は下層出土で、近接した位置で出土している。大鉢の底部には線条痕が見られる。

#### v 工具類

刷毛、横槌、鎌の3器種を工具類としてまとめた。刷毛は一枚の板に切れ目を入れて、間に毛を挟むように作られている。5点確認でき、3点を図化した。596は切れ目から裂けて片面のみ残存している。横槌は柄のついた丸木で藁打ちなどに用いるもの。一木造りのもので、柄を欠く。鎌は風呂鎌の刃床部。

#### vi 調度類

様々な日用品を調度類としてまとめる。599は蒔絵の施される小箱の部材。600と601は柳で、601は同型品がもうひとつ出土している。602は盆で口径370mmを超える大型のもの。603～606は折敷の部材である。多数出土しているが、完形品になるものはない。607は不明木製品である。縁辺に複数の孔が開けられる。用途は不明だが、複数点出土しているため図化しておく。

#### vii 下駄類

総数で54個体確認でき、下駄の歯のみのものも含めれば、更にその数を増すことが予想される。一木造りの連歯下駄は32点あり、608～619まで12点を実測した。差歯造りのものは、下駄の台にホゾ溝のみで歯を差し込む陰甲下駄が7点あり、620～625の6点を実測した。同じ差歯下駄でも、台にホゾ溝と穴を貫通させて歯を差し込む露甲下駄は15点あり、626～631まで6点を図化した。差歯造りのものの方が壊れやすいため、取り上げた数は少なくなっていることを考慮する必要がある。形状は、長方形と隅丸長方形のものに分けられ、608や628、629のような小型品もみられる。漆はすべて差歯下駄に施されている。612や615は焼印が押されているもの。616は歯に直行方向から穿孔されている。626は前歯が露甲形、後歯が陰甲形となるもの。

#### viii 墨書木製品

蓋や荷札に墨書のあるものをまとめる。632と633は蓋で、633は「大神宮 御洗米」と記される小蓋。荷札等のいくつかには、山形城下の商人たちの商標と思われる記号が記されているものがいくつかみられる。1939年に発行された『山形商店史』には山形市内の老舗の商標や屋号、由来が記されており、出土品と合致するものもある。634は正方形の札の裏面に  $\times$  とし

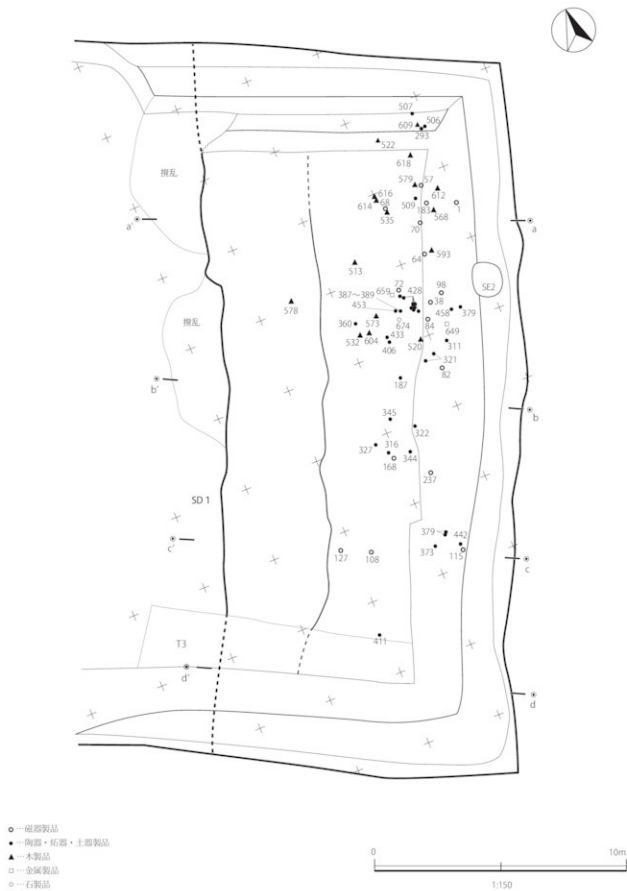
されており、これは寛文年間に創業したとされる六日町「リュウゴイチ」をはじめ、市村家の一族で用いられるものである。638は  $\square$  と西川孫七なる人物の名も見られる荷札で、 $\square$  の商標は、八日町の「六澤屋」をはじめ、多くの店舗で用いられていたようだ。644の  $\square$  は十日町の「大阪屋」の商標で、寛永3年に薬種業を創始し、明治27年に紙箱販売に転業したとある。紀年銘資料としては、640の建築部材に「明和九年壬辰六月」とあり、1772年を指すものである。

#### E 金属製品 (第114、115図)

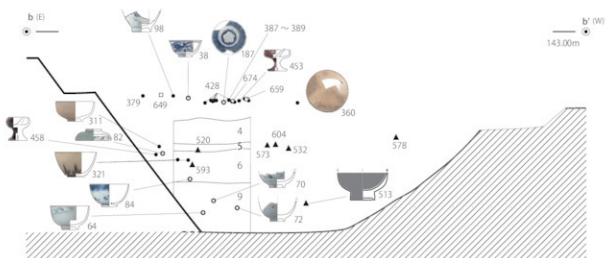
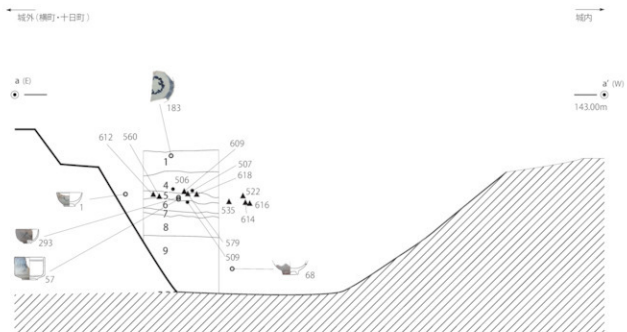
出土した金属製品は総じて多くはない。648～653は銭で、寛永通宝と五十銭硬貨を図化した。654～659は煙管の吸口と雁首。660は銅製の櫛、661は急須で、胴部は一枚の金属板を丸めて作っている。662と663は刀装具で切羽と石突。664は和釘で、665は先端方向が90度異なる手違いの鑿。666と667は鉄。668は包丁で669は刀子。666と669は最下層から出土したものである。670と671は馬具で、轡と蹄鉄である。

#### F 石製品 (第116～118図)

硯は19個体確認でき、7点を実測した。672は表裏に刻書があり、「明和五年戊子四月十日 福田  $\square$   $\square$  福田  $\square$   $\square$   $\square$ 」と記される。673の裏には「上々高嶋石」と記されており、滋賀県で採れる高島石に由来するものである。679～681は石筆、682は石板でいずれも近代学校教育における手習い用具である。石板片は数多く出土しているが、完形になるものはない。縁辺部は木枠にはめるための加工が施される。683は中央に穿孔された円盤形の不明石製品で裏面に欠く。684と685は砥石。686と687は凹石で、拳大の凝灰岩の円盤の中心に小さく深い凹みをもつ686と、幅広く凹む687がある。具体的な用途は不明だが、いずれも全面に敲打痕がある。同様のものは、三の丸第6次調査をはじめ、近世遺跡で多く見られる。688は卵大の自然石に「八万四千畫猶如印文一一畫有八万四千色一一色」と全周に墨書される。観無量寿経に同じ一節があり、この一節を記したものであろう。689～691は数珠。692は脚つきの方形鉢。全面が煨けており、火鉢と思われる。



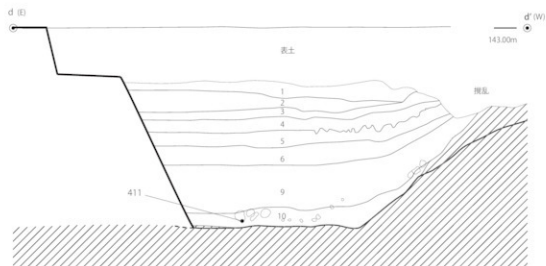
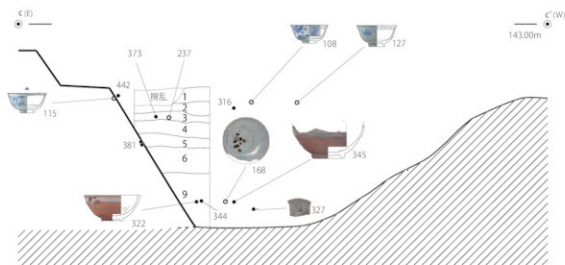
第5図 SD1平面図



- …磁器製品
- …陶器・石器・土器製品
- ▲ …木製品
- …金属製品
- …石製品



第6図 SD1断面図 (1)



## SD1

## 出土遺物区分

- | 層   | 説明   | 区分  |
|-----|--|-----|
| 1層  | 7.5YR2/2 黒褐色 粘土質シルト層 しまりやや強い。炭化物含む。遺物多量。攪乱を大きく受ける。   | 上層  |
| 2層  | 7.5YR3/3 暗褐色 砂質シルト層 しまり普通。炭化粒含む。   | 中層  |
| 3層  | 10Y4/1 灰色 粘土層 しまりやや強い。一部互層状に砂質シルト層が入る。調査区南側のみで確認できる。   |     |
| 4層  | 10YR5/1～10YR6/6 褐灰色～明黄褐色 砂層 しまり弱い。細粒砂層と粗粒砂層が互層状に堆積。細粒砂層は、空気にふれると褐灰色から明黄褐色に変わる。前後の層に比べ、遺物量は少ない。 |     |
| 5層  | 10YR2/1 黒色 粘土質シルト層 しまり普通～やや弱い。炭化材多量。残った腐材の一括廃棄層。木製品を中心に出土遺物多量。                                 | 下層  |
| 6層  | 10YR3/1 黒色 粘土質シルト層 しまりやや強い。色調は5層とほとんど変わらない。5層に比べると遺物量は減る。                                      |     |
| 7層  | 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト層 しまりやや弱い。色調は上、下層とほとんど変わらない。調査区北側のみで確認できる。                                    | 層下層 |
| 8層  | 10YR3/1 黒色 粘土質シルト層 しまりやや強い。色調、質感は6層と同じ。7層を挟むことで区分され、調査区北側のみで確認できる。                             |     |
| 9層  | 7.5YR4/1 黒褐色 粘土質シルト層 しまり強い。灰白粘土層が薄く、互層状に堆積し、水平に縞模様をなす。遺物はほとんど出土しない。                            |     |
| 10層 | 7.5YR4/1 黒褐色 粘土質シルト層 しまり強い。堀の床層で30～50cm大の川原石を含む。遺物はほとんど出土しない。                                  |     |



第7図 SD1断面図(2)



第8図 SD1完掘状況 (北から)



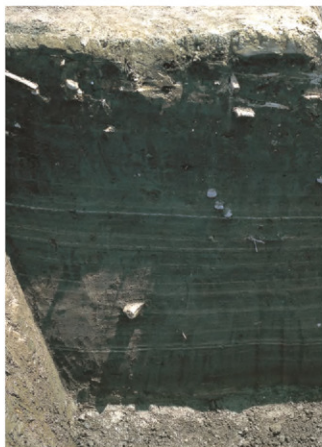
第9図 SD1断面d-d' (北から)



第10図 SD1断面a-a'上～下層（北から）



第12図 SD1断面b-b'（北から）



第11図 SD1断面a-a'下～最下層（北から）



第13図 SD1断面c-c'（北から）



第14図 SD1 検出状況  
(北から)



第15図 SD1 a区5  
層検出状況  
(西から)



第16図 SD1 西壁木杭列  
検出状況  
(北から)



第17図 SD1底面検出状況（北から）



第18図 SD1断面d-d'地山検出状況（北から）



第19図 SD1完掘状況（南東から）左上の樹木は三の丸土塁の残存部と思われる。



第20図 SD1完掘状況（南西から）





第21図 SD1 断面d-d'  
地山検出状況  
(北から)



第22図 SD1 西壁・  
底面検出状況  
(北から)



第23図 SD1 10層  
調査状況  
(北から)



第24図 SD1 38出土状況



第25図 SD1 226出土状況



第26図 SD1 104出土状況



第27図 SD1 b区上層遺物出土状況 (453、674)



第28図 SD1 b区上層遺物出土状況 (428)



第29図 SD1 593出土状況



第30図 SD1 560出土状況



第31図 SD1 535出土状況



第32図 SD1 5層出土炭化物



第33図 SD1出土木材 (現場廃棄)



第34図 SD1 最下層出土 (アワビ)



第35図 SD1下層～最下層出土堅果類 (クルミ、クリ)



第36図 SD1 最下層遺物出土状況 (345、322、344、168)



第37図 調査前風景 (南西から)



第38図 調査区地山 (T1) (南東から)



第39図 重機による表土掘削状況 (北から)



第40図 深掘状況 (東から)



第41図 重機によるSD1覆土掘削状況 (南西から)



第42図 重機による掘削覆土からの遺物回収状況 (西から)



第43図 SD1中層調査風景 (東から)



第44図 SD1最下層調査風景 (北西から)



第45図 SD1調査風景（南から）



第46図 SE2検出状況（東から）



第47図 SE2断面状況（南から）

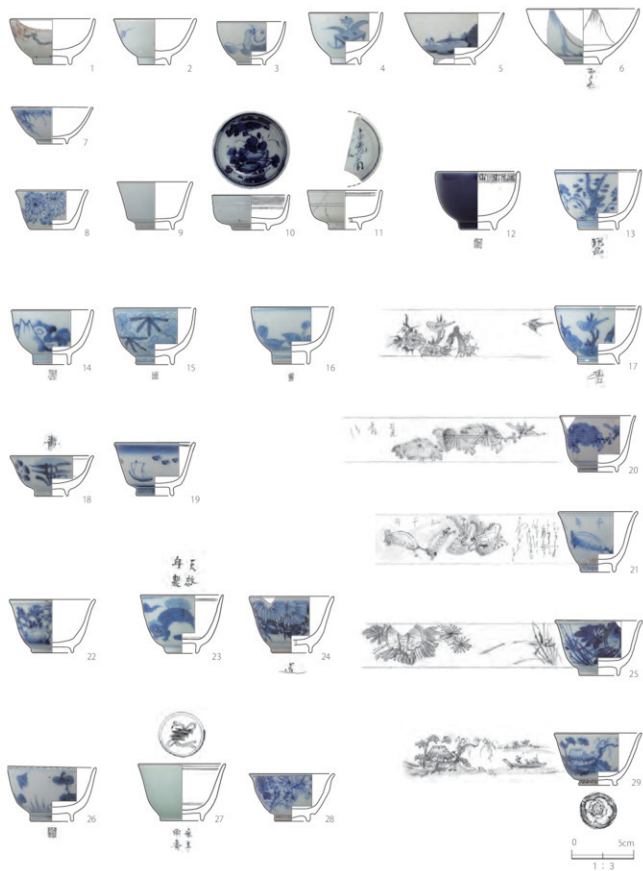


第48図 SE2完掘状況（南から）



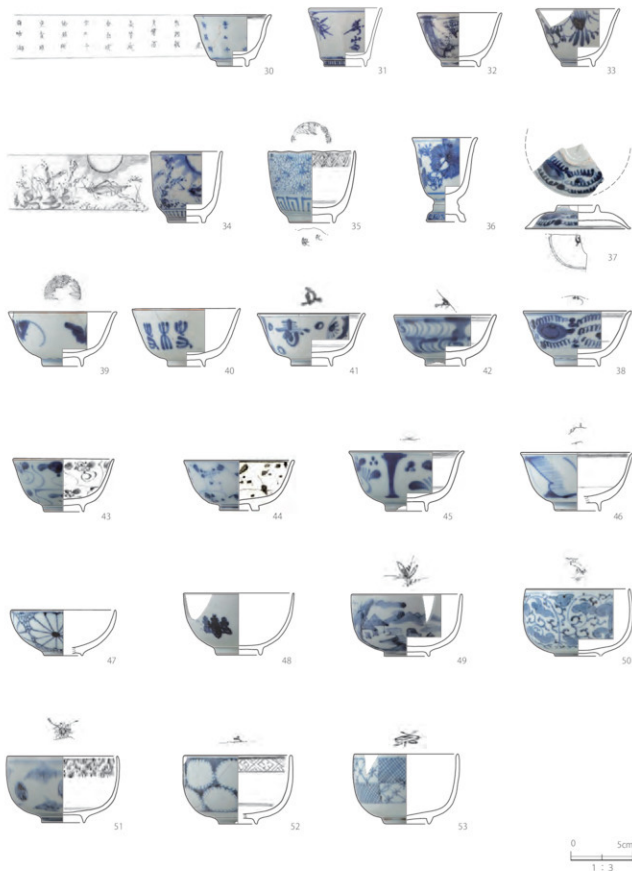
第49図 調査説明会風景（南西から）

## 小碗



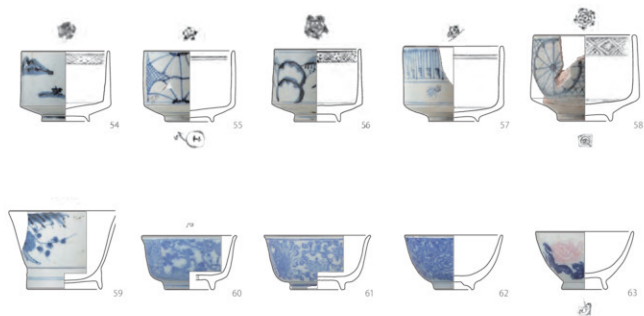
第50図 S D 1出土遺物実測図 磁器碗類 1

小碗

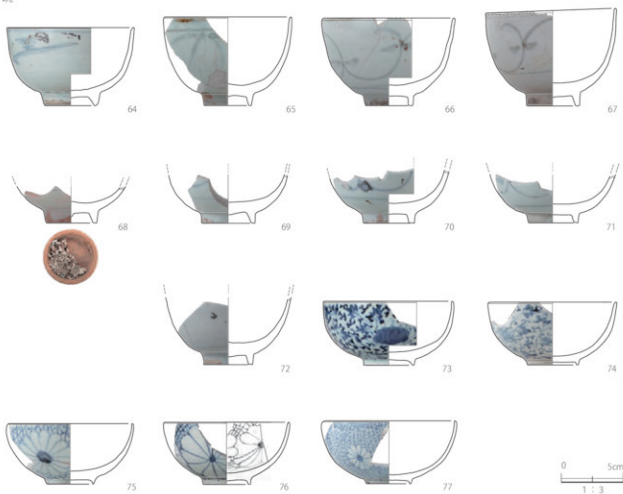


第51図 SD1出土遺物実測図 磁器碗類2

## 小碗



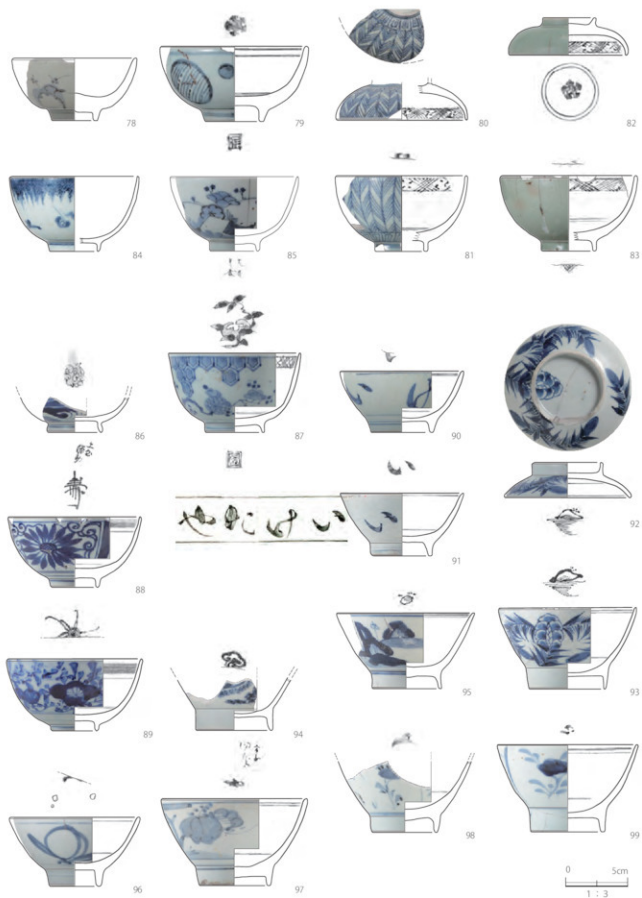
## 中碗



第52図 S D 1出土遺物実測図 磁器碗類 3



中碗



第53図 SD1出土遺物実測図 磁器碗類4

## 中碗



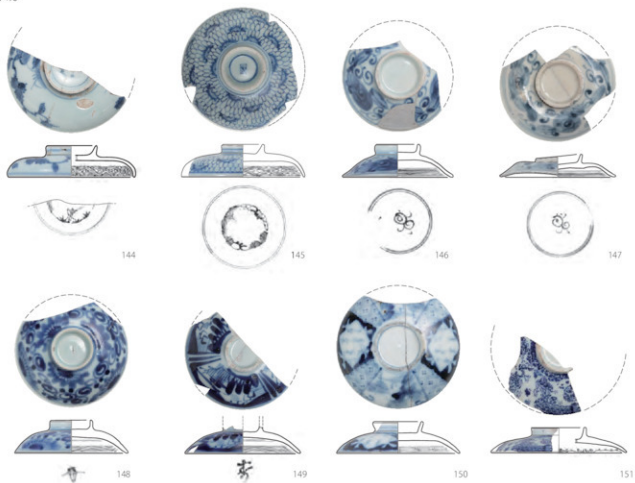
第54図 S D 1出土遺物実測図 磁器碗類 5

中碗



第55図 S D 1 出土遺物実測図 磁器碗類6

## 中碗



## 大碗

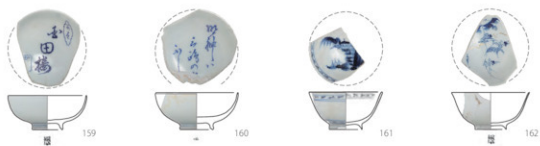


## 薄手酒盃



第56図 S D 1出土遺物実測図 磁器碗類7

薄手酒盃



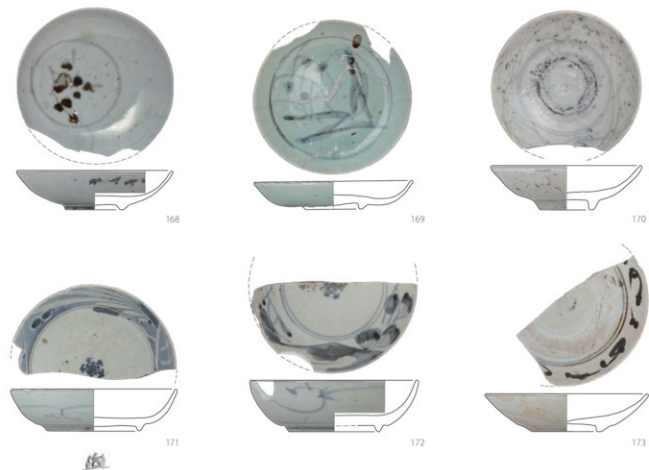
仏飯器



紅猪口



小皿



第57図 SD1出土遺物実測図 磁器碗類8、磁器皿類1

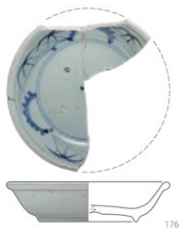
小皿



174



175



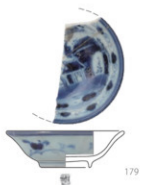
176



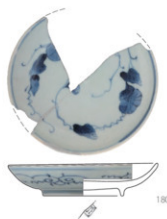
177



178



179



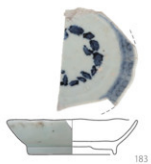
180



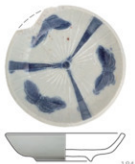
181



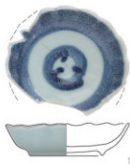
182



183



184



185



第58図 S D 1 出土遺物実測図 磁器皿類 2

小皿

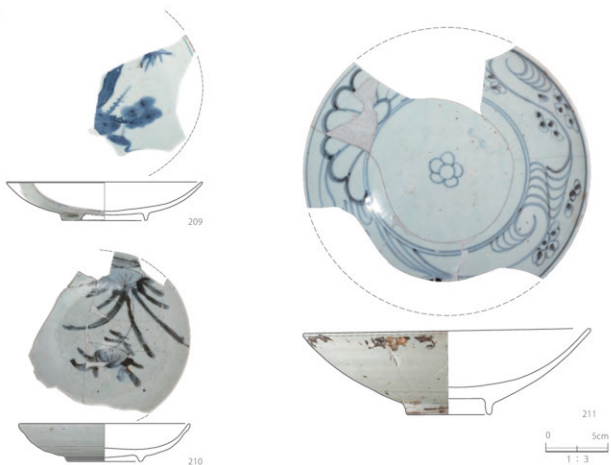


第59図 SD 1 出土遺物実測図 磁器皿類 3

## 小皿



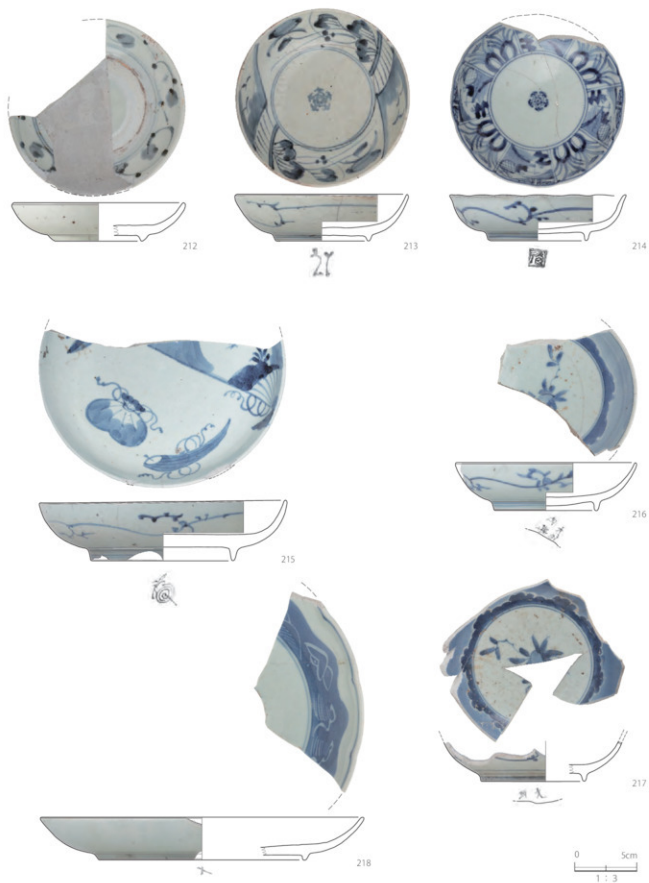
## 中皿



第60図 S D 1出土遺物実測図 磁器皿類4

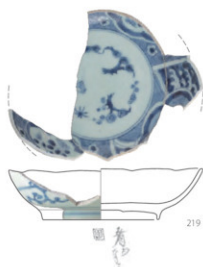


中皿



第61図 SD1出土遺物実測図 磁器皿類5

中皿

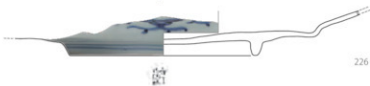


第62図 SD 1出土遺物実測図 磁器皿類 6

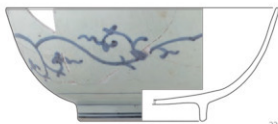
大皿



小鉢

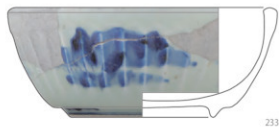


中鉢



第63図 SD1出土遺物実測図 磁器皿類7、磁器鉢類1

中鉢



第64図 S D 1出土遺物実測図 磁器鉢類 2

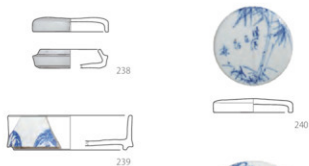
猪口



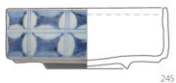
蓋物



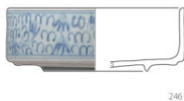
合子



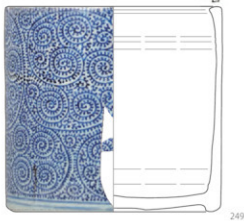
段重



火鉢



甗入



第65図 SD 1 出土遺物実測図 磁器鉢類 3

## 小瓶



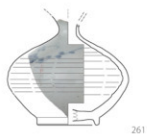
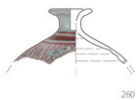
## 中瓶



## 神酒徳利



## 髪油壺



## 燗徳利



第66図 S D 1出土遺物実測図 磁器瓶類 1

燗德利



267



268

仏花瓶



269

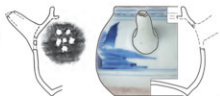
急須



270



271



272



273



274



275



276

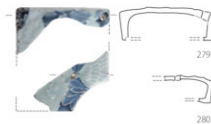


第67回 SD1出土遺物実測図 磁器瓶類2、磁器水注類1

## 水滴



277



280

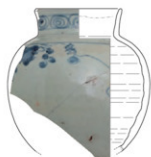


278

## 中壺



278



281

## 戸車

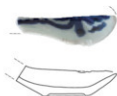


282



283

## 散蓮華



284

## ミニチュア



285

## 近代磁器製品



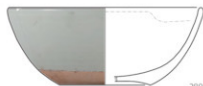
286



287



288



289

0 5 cm  
1 : 3  
(277 ~ 289)

0 10 cm  
5 cm  
1 : 4 (281)  
1 : 2 (285)

第68図 S D 1 出土遺物実測図 磁器水注類2、磁器壺・甕類、磁器土製品、近代磁器製品



小碗

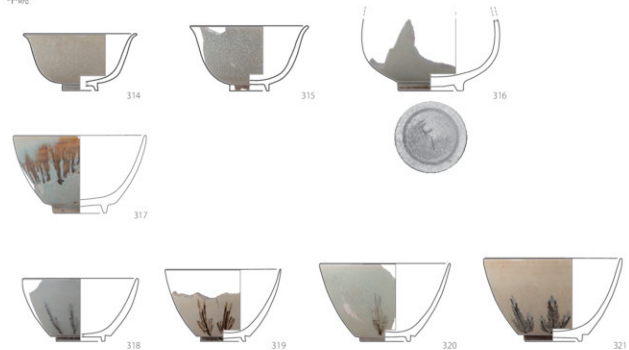


中碗



第69図 S D 1 出土遺物実測図 陶器碗類 1

## 中碗



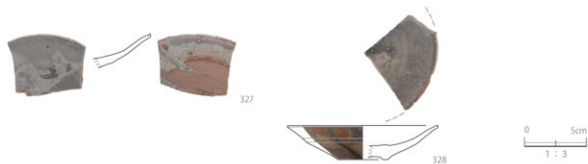
## 大碗



## 仏飯器

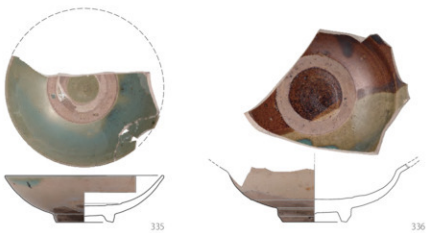
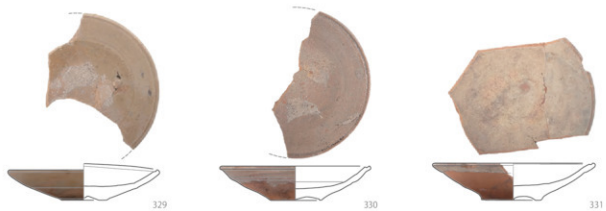


## 小皿



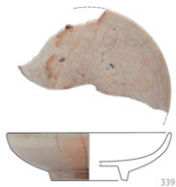
第70図 SD 1 出土遺物実測図 陶器碗類 2、陶器皿類 1

小皿

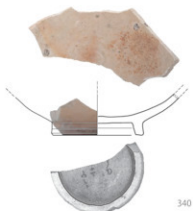


第71図 SD1出土遺物実測図 陶器皿類2

## 小皿



## 中皿

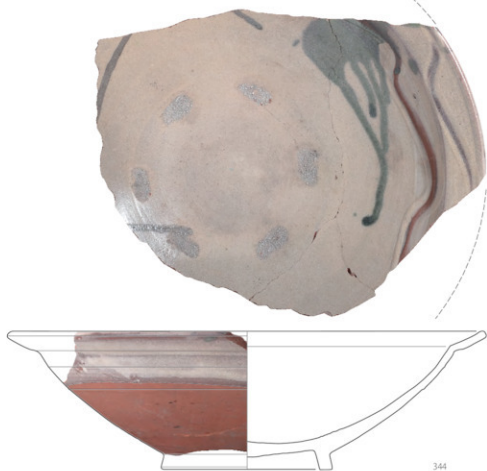


## 大皿



第72図 SD1出土遺物実測図 陶器皿類3

大皿



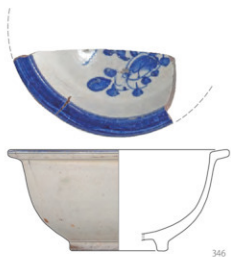
344

第73図 SD 1 出土遺物実測図 陶器皿類 4

中鉢



345



346



347



348

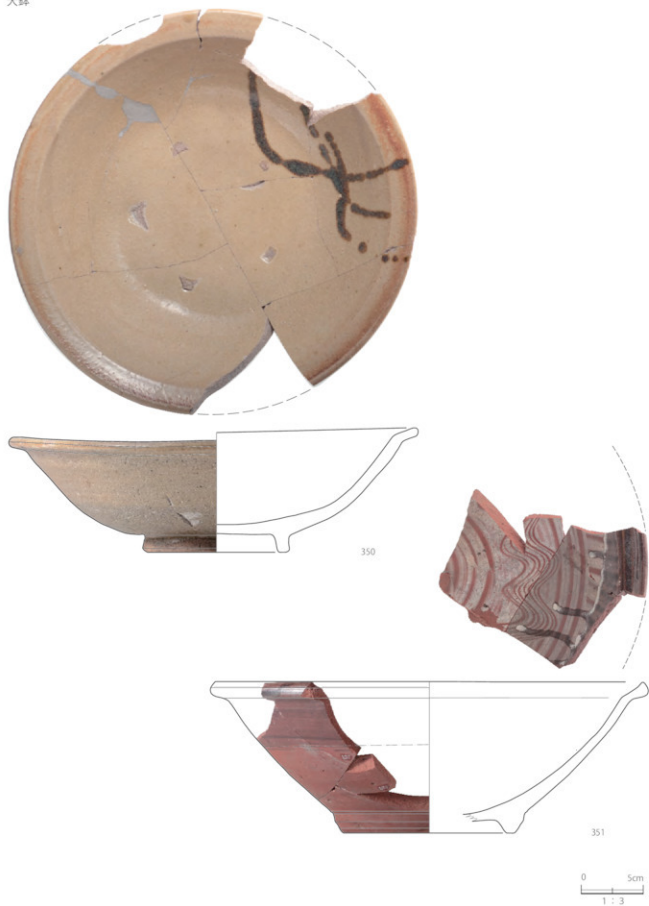


349



第74図 SD1出土遺物実測図 陶器鉢類1

大鉢



第75図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 2

片口



352



353



354



355



356



357



358

捏鉢



359



第76図 SD1出土遺物実測図 陶器鉢類3



合子



360

灰吹



361



362



363

圓猪口



364

火鉢



366



367

香炉



365



桶木鉢



368



369



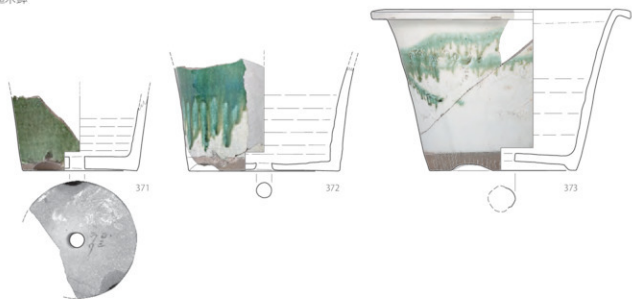
370

0 5 cm  
1 : 3  
(360 ~ 367)

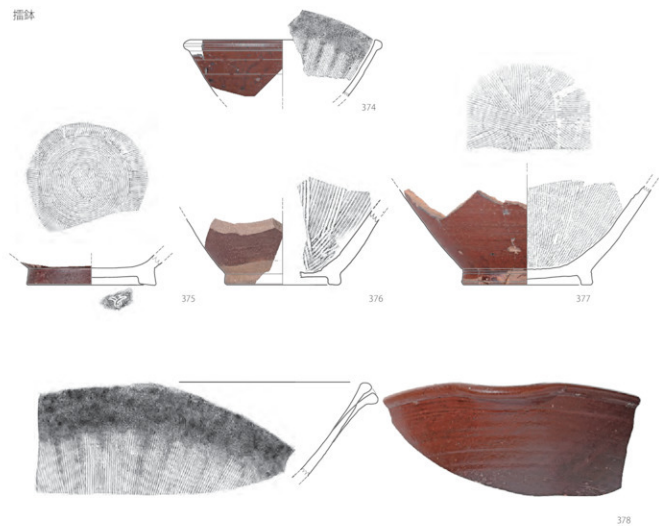
0 10 cm  
1 : 4  
(368 ~ 370)

第77図 S D 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 4

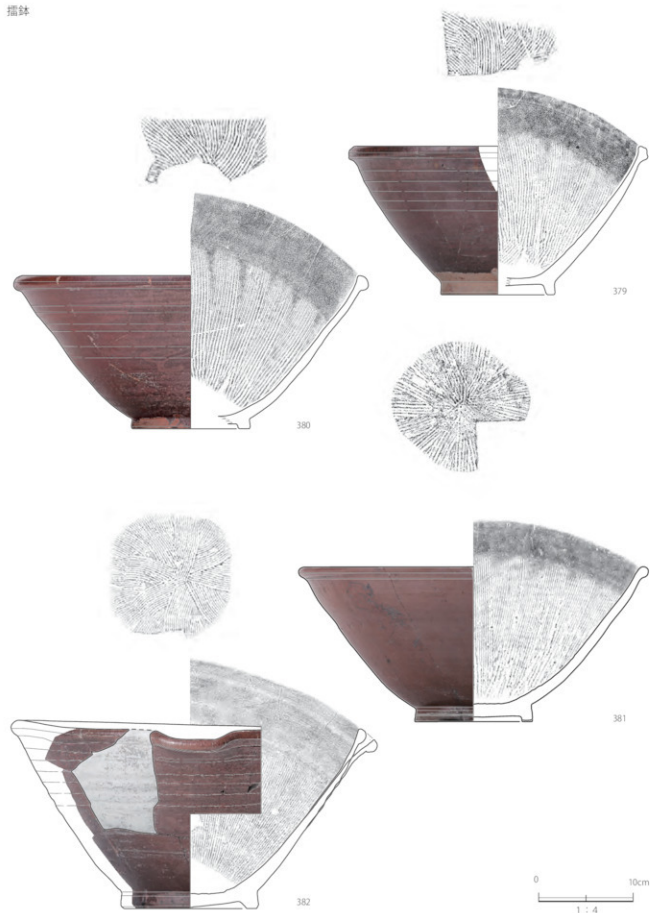
## 桶鉢



## 搦鉢



第78図 S D 1出土遺物実測図 陶器鉢類 5



第79図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 6

中瓶



383

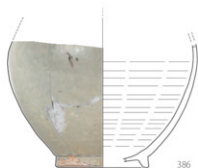
大瓶



384



385



386



387



388



389



第80図 SD1出土遺物実測図 陶器瓶類1

燗德利



390



391

髪油壺



392

仏花瓶



393

インク瓶



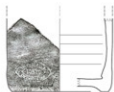
394



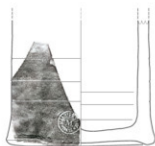
395



396



397

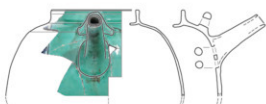


398

土瓶



399

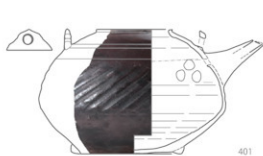


400

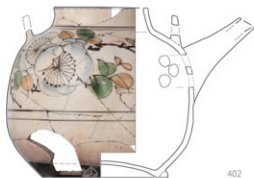


第81回 SD 1出土遺物実測図 陶器瓶類2、陶器水注類1

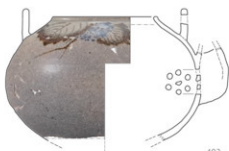
## 土瓶



401



402



403

## 小水注



404



405



406



407



408



409

## 湯通し



410

## 小壺



411

0 5 cm  
1 : 3

(401 ~ 409, 411)

0 10 cm  
1 : 4  
(410)

第82図 SD 1 出土遺物実測図 陶器水注類2、陶器壺・甕類 1

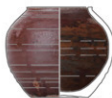
小壺



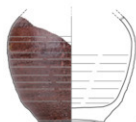
412



413



414



415

中壺



416



417



418

小甕



419



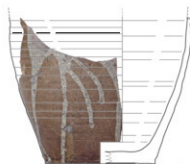
420



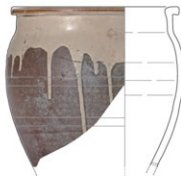
421



422



423



424

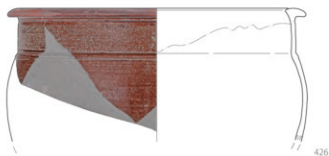


第83図 S D 1 出土遺物実測図 陶器壺・甕類 2

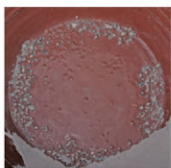
中甕



425



426



427



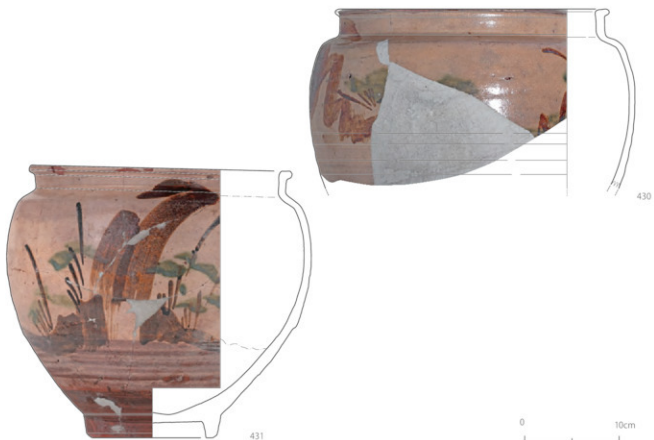
428



第84図 SD1出土遺物実測図 陶器壺・甕類3



中甕



第85図 S D 1 出土物実測図 陶器壺・甕類 4

片口



352



353



354



355



356



357



358

捏鉢



359



第76図 SD1出土遺物実測図 陶器鉢類3

合子



360

灰吹



361



362



363

圓猪口



364

火鉢



366



367

香炉



365



367

桶木鉢



368



369



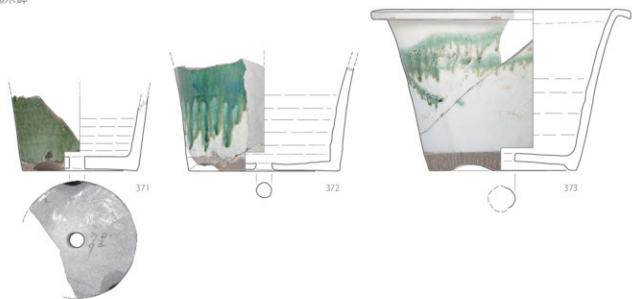
370

0 5 cm  
1 : 3  
(360 ~ 367)

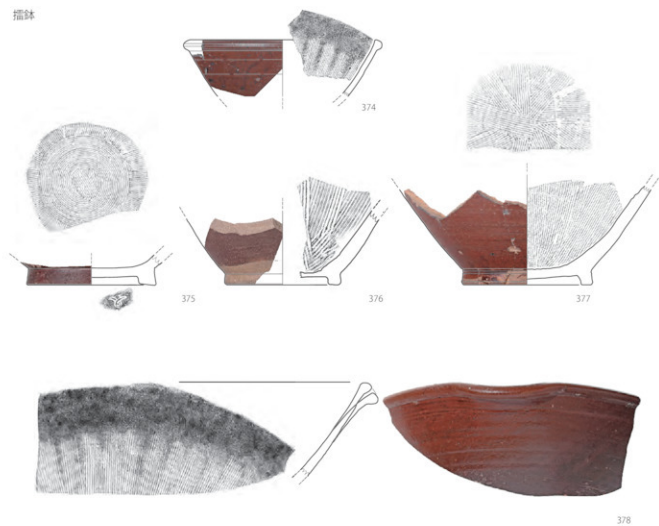
0 10 cm  
1 : 4  
(368 ~ 370)

第77図 S D 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 4

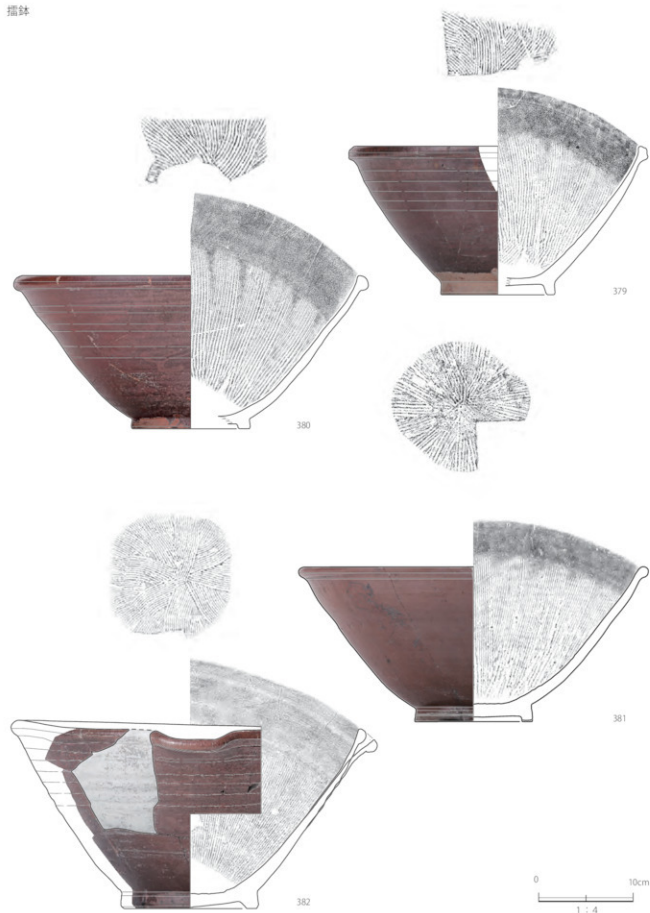
## 桶鉢



## 搦鉢



第78図 S D 1出土遺物実測図 陶器鉢類 S



第79図 SD 1 出土遺物実測図 陶器鉢類 6

中瓶



383

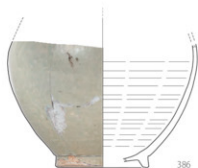
大瓶



384



385



386



387



388



389



第80図 SD1出土遺物実測図 陶器瓶類1

燗德利



390

インク瓶



391

髪油壺



392



394

仏花瓶



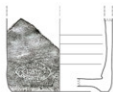
393



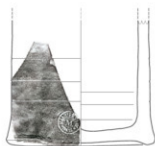
395



396



397



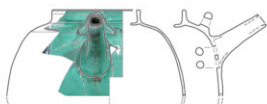
398



土瓶



399

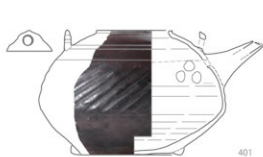


400



第81回 SD1出土遺物実測図 陶器瓶類2、陶器水注類1

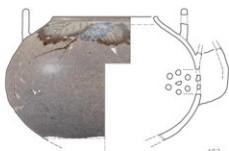
## 土瓶



401



402



403

## 小水注



404



405



406



407



408



409

## 湯通し



410

## 小壺



411

0 5 cm  
1 : 3

(401 ~ 409, 411)

0 10 cm  
1 : 4  
(410)

第82図 SD 1 出土遺物実測図 陶器水注類2、陶器壺・甕類 1



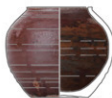
小壺



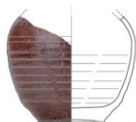
412



413



414



415

中壺



416



417



418

小甕



419



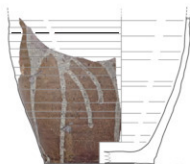
420



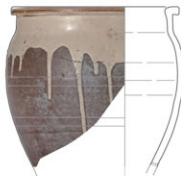
421



422



423



424

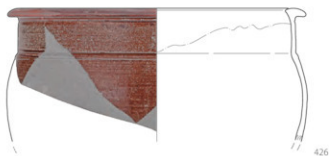


第83図 S D 1 出土遺物実測図 陶器壺・甕類 2

中甕



425



426



427

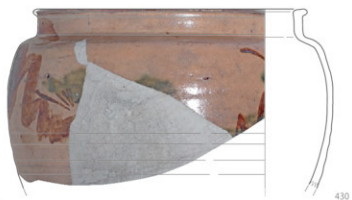
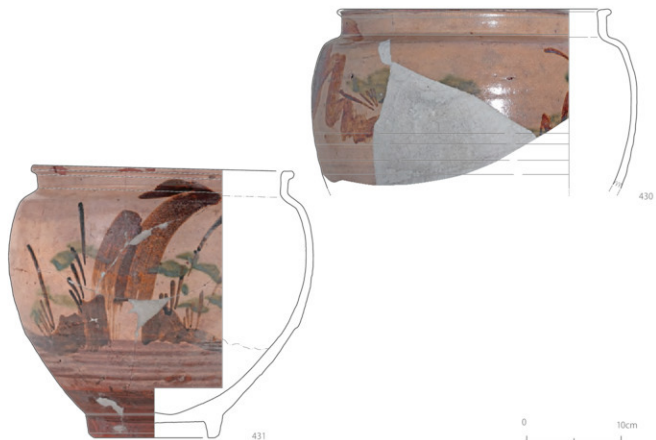


428



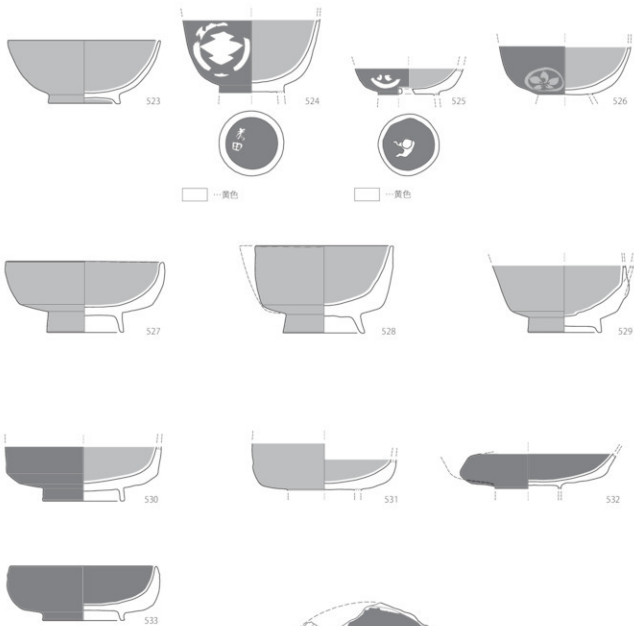
第84図 SD1出土遺物実測図 陶器壺・甕類3

中甕

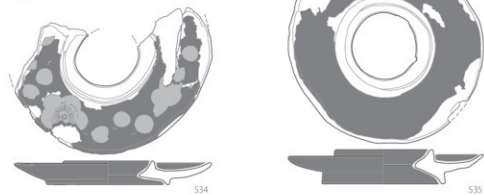


第85図 S D 1 出土物実測図 陶器壺・甕類 4

## 漆器椀

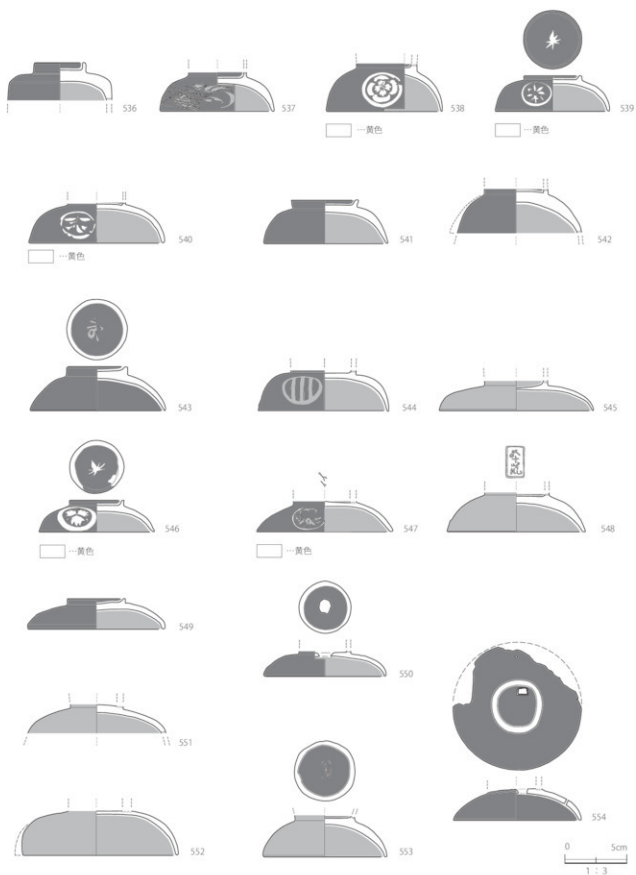


## 天目台

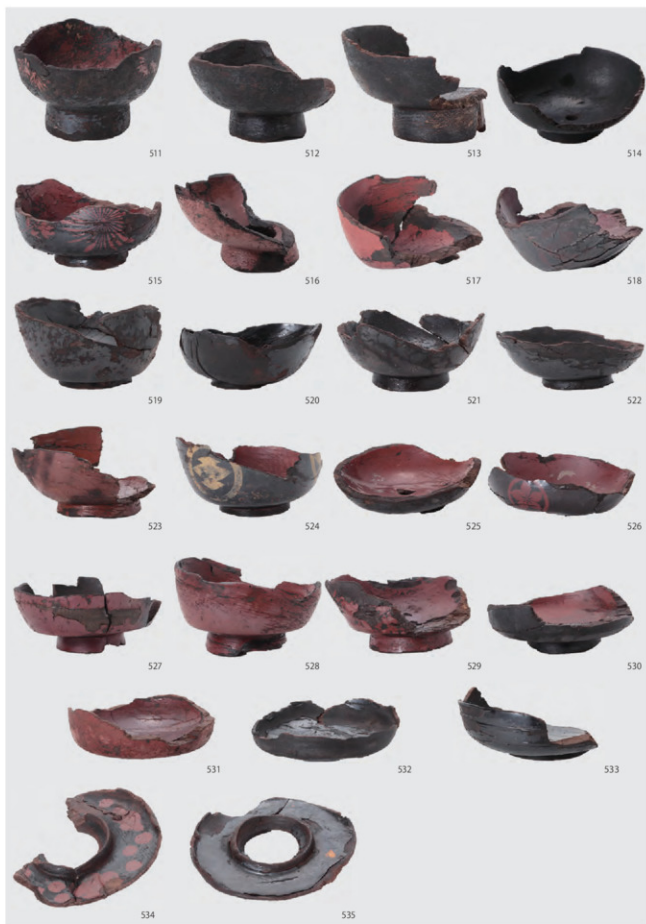


第96図 SD1出土遺物実測図 木製品(漆器2)

漆器蓋



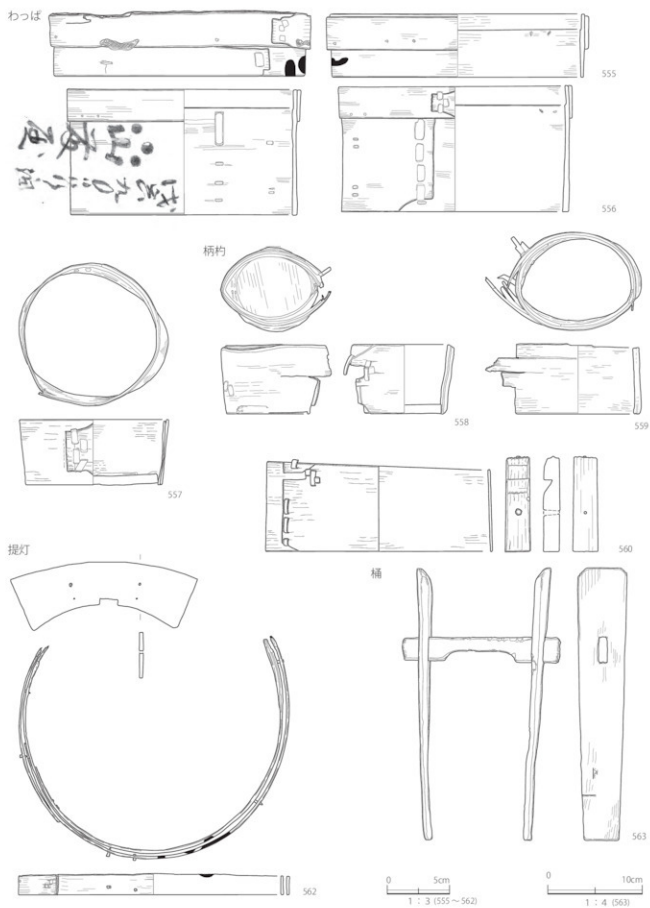
第97図 SD1出土遺物実測図 木製品(漆器3)



第98図 S D 1出土遺物 木製品(漆器1)



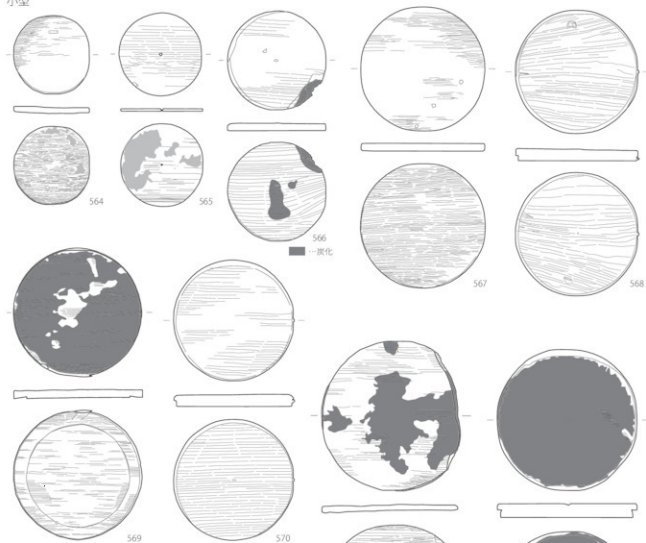
第99図 SD1出土遺物 木製品(漆器2)



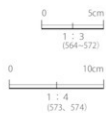
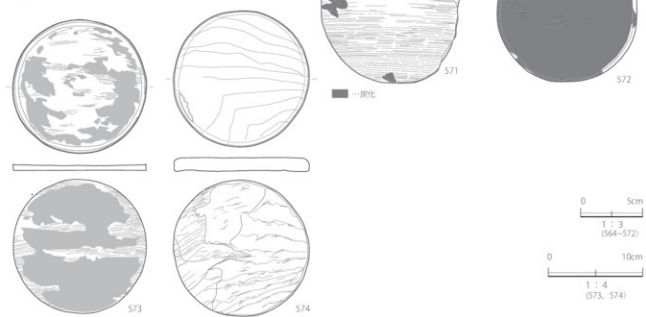
第100図 SD1出土遺物実測図 木製品(曲物類)



小型

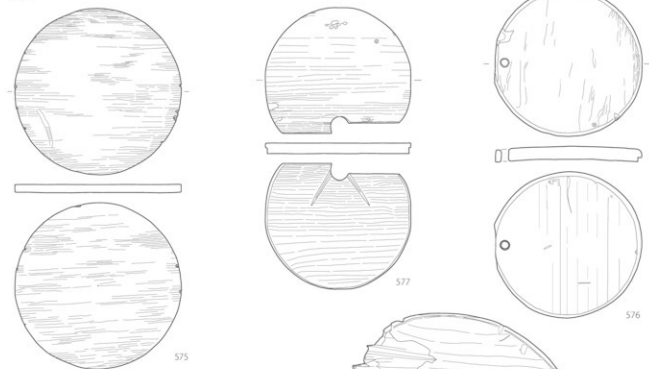


中型

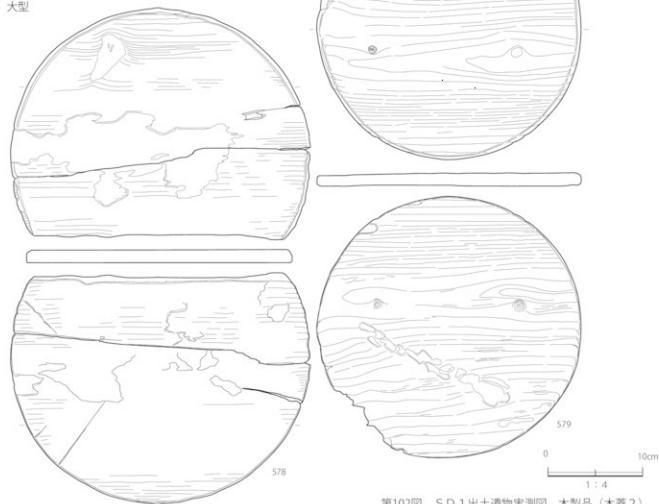


第101図 SD 1出土遺物実測図 木製品(木蓋 1)

中型

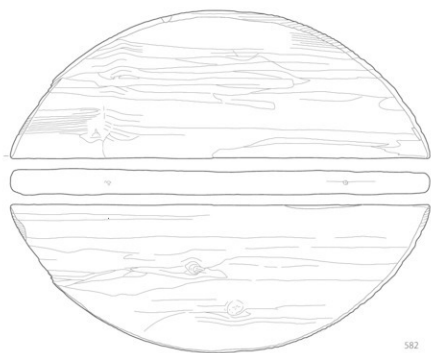
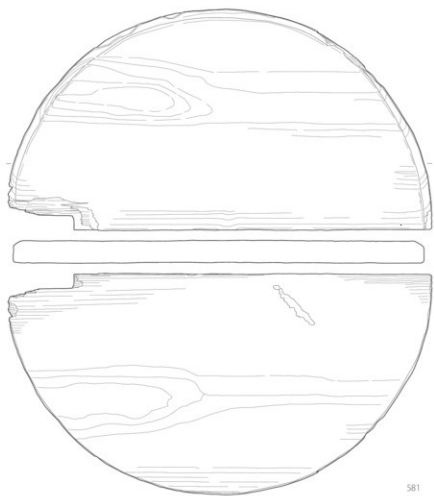


大型



第102図 SD1出土遺物実測図 木製品(木蓋2)

大型

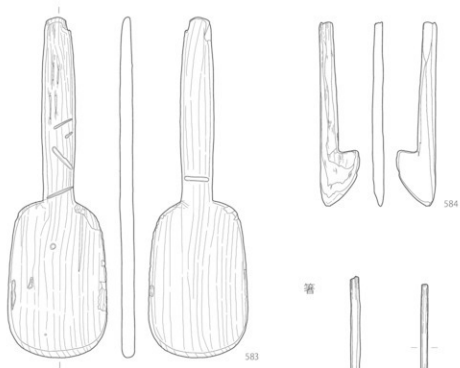


第103図 SD1出土遺物実測図 木製品(木蓋3)

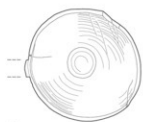


第104図 SD1出土遺物 木製品(曲物類・木蓋)

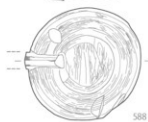
籠



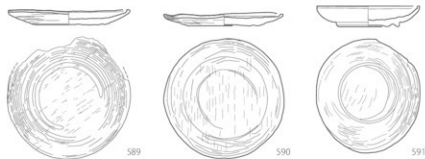
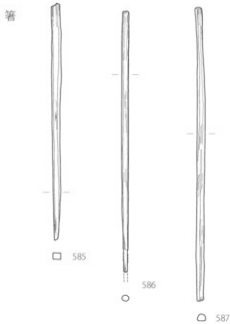
杓子



木皿



588



589

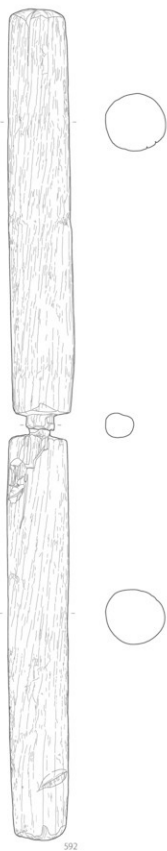
590

591

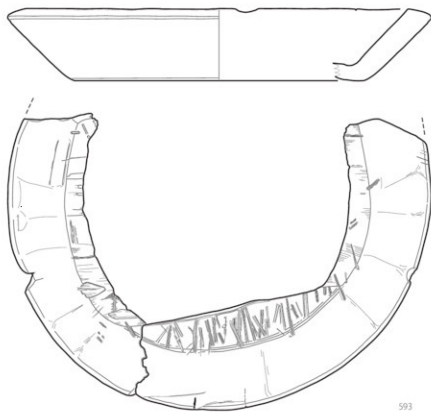


第105図 SD1出土遺物実測図 木製品(台所用具類1)

杵



大鉢



第106図 SD 1 出土遺物実測図 木製品 (台所用具類 2)

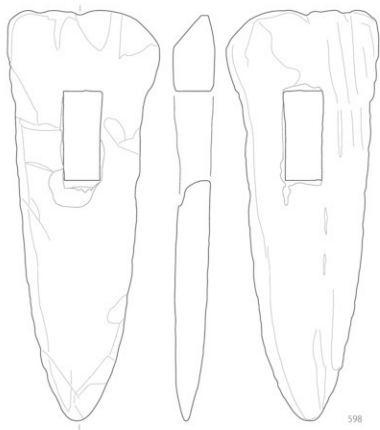
刷毛



横槌



鍬



第107図 SD1出土遺物実測図 木製品(工具類)

箱



599

櫛



600



601

盆



602

折敷



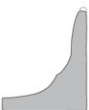
603



604

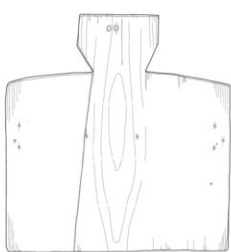
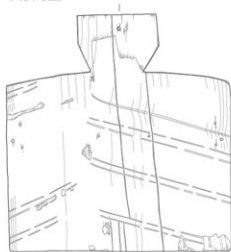


606



605

不明木製品



607



第108図 SD1出土遺物実測図 木製品(調度類)



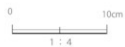
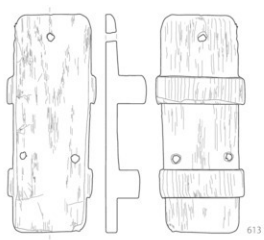
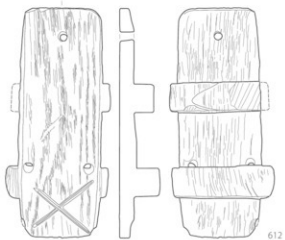
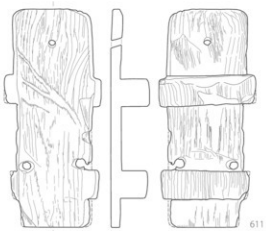
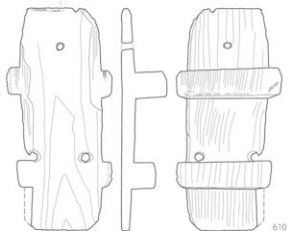
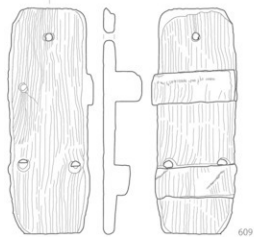
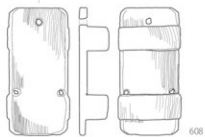


第109回 SD1出土遺物 木製品（調度・台所・工具1）



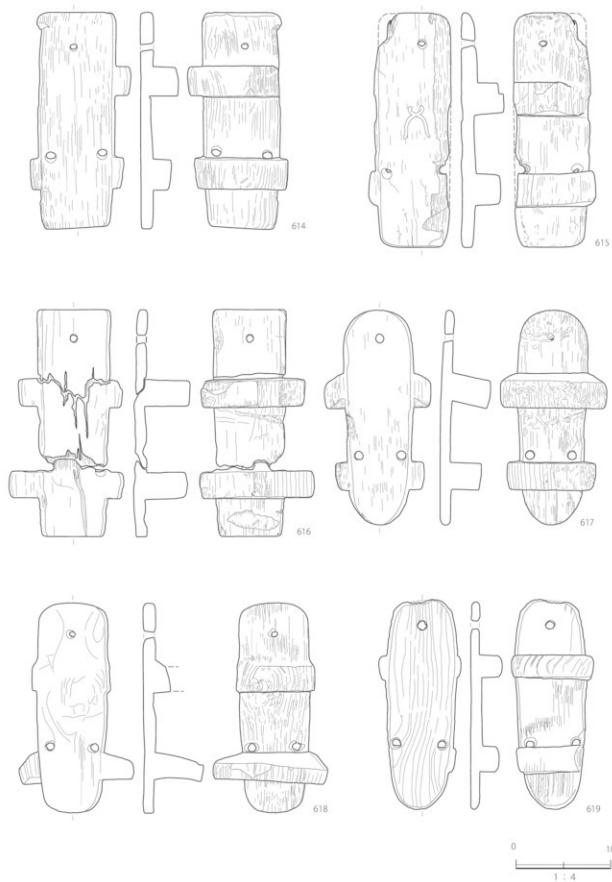
第110図 SD1出土遺物 木製品（調度・台所・工具2）

連歯下駄



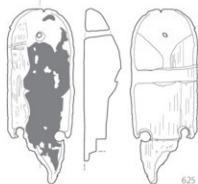
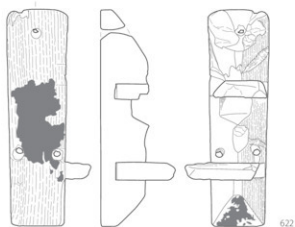
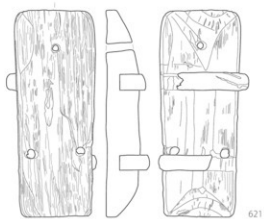
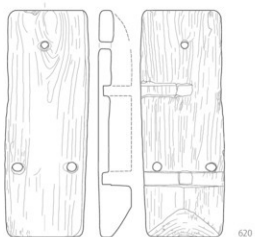
第111図 SD1出土遺物実測図 木製品(下駄1)

## 連齒下駄



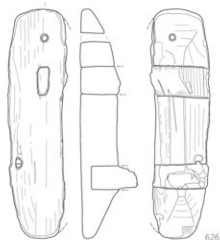
第112図 SD1出土遺物実測図 木製品(下駄2)

差歯下駄

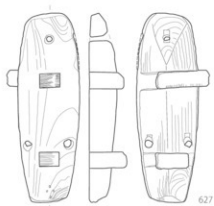


第113図 SD1出土遺物実測図 木製品(下駄3)

差歯下駄



626



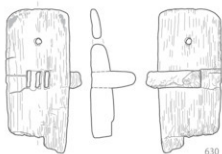
627



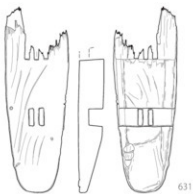
628



629



630



631



第114図 SD1出土遺物実測図 木製品（下駄4）



第115図 SD 1 出土遺物 木製品 (下駄1)

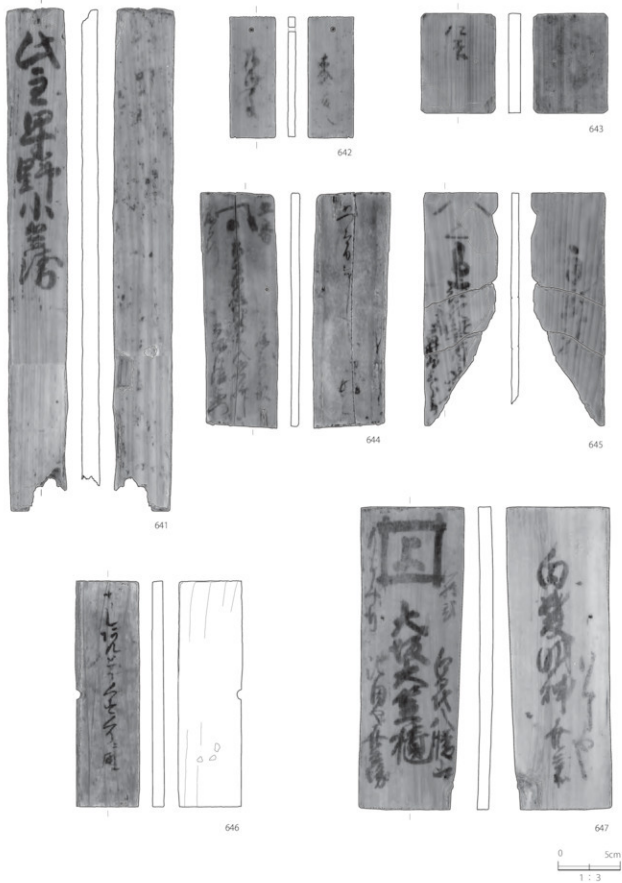


第116図 S D 1出土遺物 木製品（下駄2）

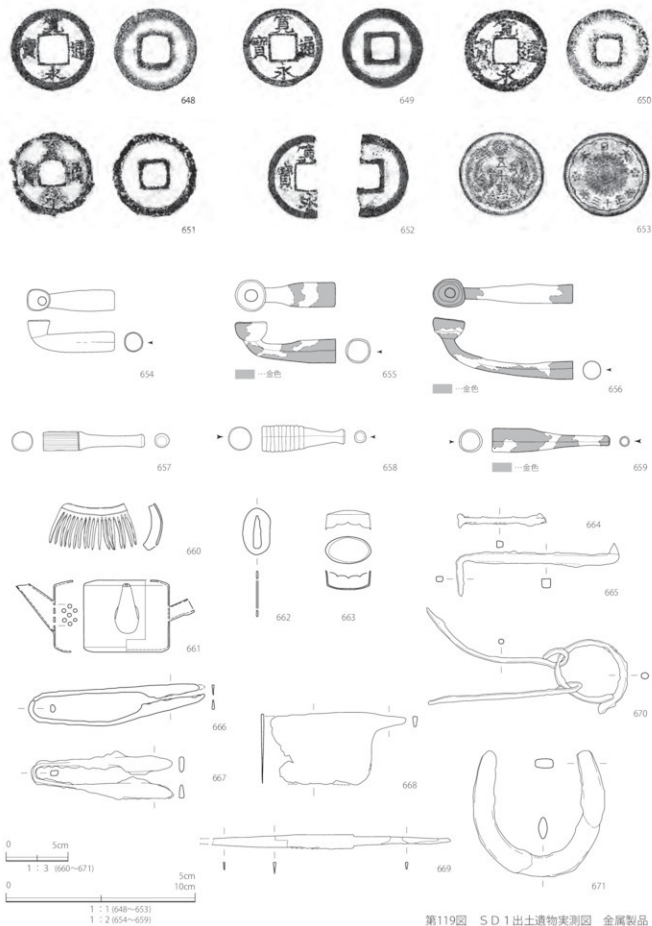




第117図 SD1出土遺物実測図 木製品(墨書木製品1)



第118回 SD1出土遺物実測図 木製品(墨書木製品2)



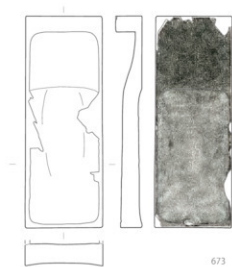


第120回 SD1 出土遺物 金属製品

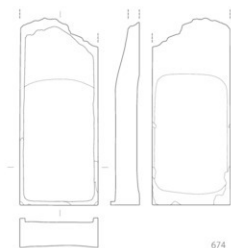
硯



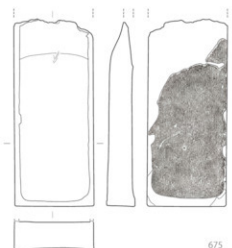
672



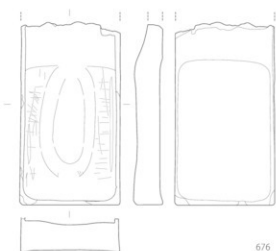
673



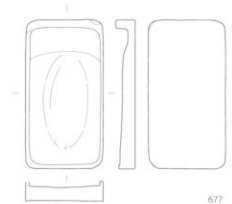
674



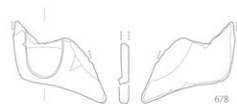
675



676



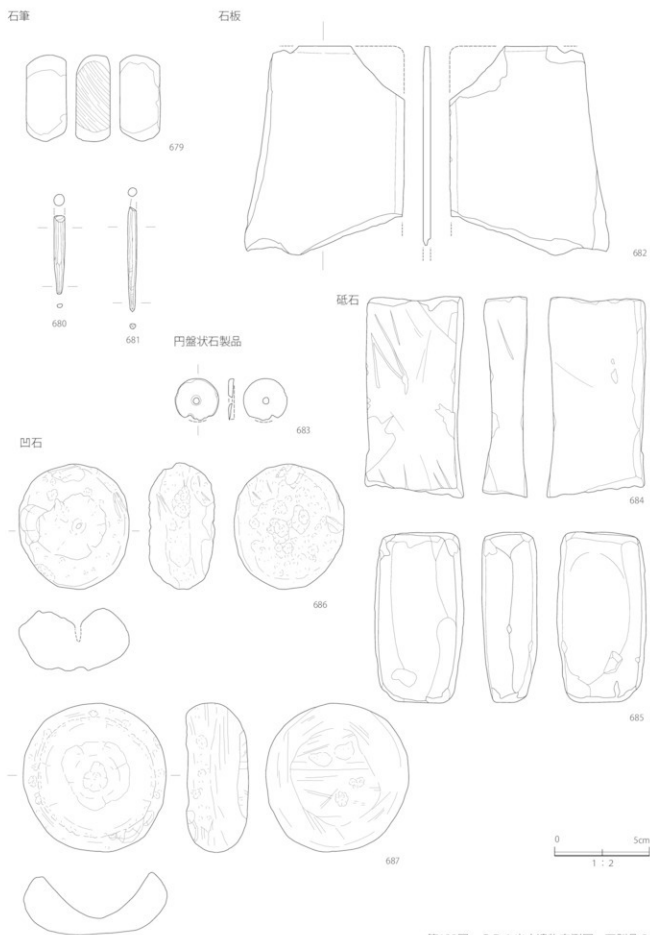
677



678



第121図 SD1出土遺物実測図 石製品1

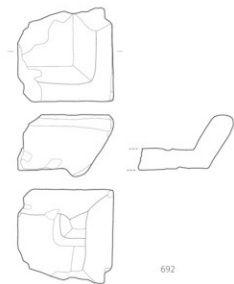


第122図 SD1出土遺物実測図 石製品2

経石



石鉢



688

692

数珠



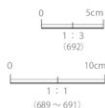
689



690



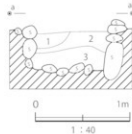
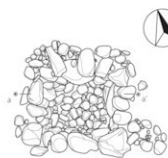
691



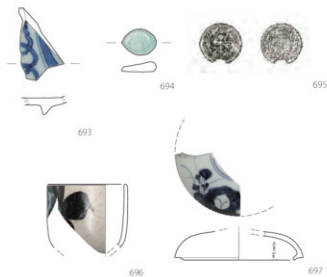
(688, 689 ~ 691) の写真は縮尺任意)

第123図 SD 1出土遺物実測図 石製品 3

SE 2



1. 7.5YR 3/2 黒褐色 しまりあり シルト質粘土 (全体に7.5YR8/2灰白色シルトを斑状に含む)
2. 7.5YR 3/2 黒褐色 しまりあり シルト質粘土 (全体に炭化物を含む)
3. 10YR 1.7/1 黒色 しまりややありシルト質粘土



第124図 SE 2遺構・遺物実測図



第125図 SD1出土遺物 石製品



表1 SD1出土磁器製品 観察表

SD1 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (cm)			成形	形状	胎土色	地薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高								
50	1	小碗	R107	(68)	(30)	36	口方口 附り高台	丸形	灰白色	染付	肥前	肥前系	景口、高台裏面砂付着	
50	2	小碗	c上層	66	25	36	口方口 附り高台	平形	灰白色	染付	肥前系	肥前系	景口、高台裏面砂付着	
50	3	小碗	上層一括	(53)	(22)	34	口方口 附り高台	丸形	白色	染付	外：唐子文 内：見込白文	肥前系	景口	
50	4	小碗	d上層	59	25	41	口方口 附り高台	四角形	白色	染付	肥前系	肥前系	景口、高台裏面砂付着	
50	5	小碗	c中層	79	33	41	口方口 附り高台	丸形	白色	染付	外：山水文 内：見込白文	肥前系	焼跡芝、高台裏面漆着	
50	6	小碗	c中層	89	29	43	口方口 附り高台	丸形	白色	染付	内外：唐子文 内：見込白文	肥前系	景口	
50	7	小碗	d上層	64	25	29	口方口 附り高台	平形	白色	染付	内外：竹文	瀬戸美濃系	景口	
50	8	小碗	a上層	56	34	31	口方口、 底面凹陥、 糸切	楕円形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系	景口、無高台	
50	9	小碗	d上層	60	30	38	口方口 附り高台	腰筒形	白色	透明釉		瀬戸美濃系	底面朱漆着	
50	10	小碗	b下層	62	30	28	口方口 附り高台	平楕形	白色	染付	内：草花文	瀬戸美濃系		
50	11	椰子酒杯	a上層	(60)	(26)	31	口方口 附り高台	平楕形	白色	透明釉	内：「千歳山公願」瀬戸美濃系 19c後～ 内面土粉付、明治6年～千歳山公願使用			
50	12	小碗	c上層	(64)	(26)	46	口方口 附り高台	丸形	白色	透明釉	外：唐子文 内：唐文	瀬戸美濃系	景口、高台裏面漆着	
50	13	小碗	d上層	68	30	47	口方口 附り高台	四角形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系	景口、高台裏面「玩品」銘	
50	14	小碗	c下層	66	31	43	口方口 附り高台	四角形	白色	染付	外：富士山文	瀬戸美濃系	景口	
50	15	小碗	d上層	65	30	44	口方口 附り高台	四角形	白色	染付	外：松竹梅文		景口、焼跡朱漆着	
50	16	小碗	b上層	64	28	46	口方口 附り高台	四角形	白色	染付	外：花鳥文	瀬戸美濃系	景口、高台裏面漆着	
50	17	小碗	d上層	68	33	45	口方口 附り高台	四角形	白色	染付	外：花鳥文	瀬戸美濃系	景口、高台裏面「玩玉」銘	
50	18	小碗	b上層	66	27	32	口方口 附り高台	楕円形	白色	染付	外：梅竹文 内：見込白文	瀬戸美濃系	景口	
50	19	小碗	c上層、d 中層	(62)	(30)	42	口方口 附り高台	楕円形	白色	染付		瀬戸美濃系	景口	
50	20	小碗	c上・中 層	60	32	45	口方口 附り高台	腰筒形	灰白色	染付	外：草花文		景口	
50	21	小碗	c上・中 層	(61)	(26)	47	口方口 附り高台	腰筒形	白色	染付		瀬戸美濃系	景口	
50	22	小碗	d上・下 層	68	31	42	口方口 附り高台	楕円形	白色	染付	外：松文	瀬戸美濃系	景口	
50	23	小碗	d上層	(65)	(24)	46	口方口 附り高台	腰筒形	白色	染付	外：獅子雲文 内：見込「天啓年」瀬戸美濃系 製	瀬戸美濃系	景口、中中国天啓年間1621～1627年 製	
50	24	小碗	c上層	(66)	(31)	45	口方口 附り高台	楕円形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系	景口、高台裏面漆着	
50	25	小碗	表土、c 中層	69	31	43	口方口 附り高台	楕円形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系	景口	
50	26	小碗	b上層	70	35	44	口方口 附り高台	楕円形	白色	染付	外：松文	瀬戸美濃系	景口、高台裏面「二重方形形松」銘	
50	27	小碗	d上層	(67)	(34)	44	口方口 附り高台	楕円形	白色	青磁染付	外：青磁 内：見込白文	瀬戸美濃系	景口、高台裏面「永年」口裏、銘	
50	28	小碗	b上層	68	28	38	口方口、 梨行、附 り高台	楕円形	白色	染付	外：草花文	瀬戸美濃系	景口	
50	29	小碗	表土、d 上層	67	30	40	口方口、 梨行、附 り高台	楕円形	白色	染付	外：山水文	瀬戸美濃系	景口、高台裏面「永年」口裏、銘	
51	30	小碗	c上・中 層	62	26	41	口方口、 梨行、附 り高台	楕円形	白色	染付	外：唐子文	瀬戸美濃系	19c中～ 景口、裏面編年「永年」口裏、銘	
51	31	小碗	c上層	(58)	(32)	46	口方口、 梨行、附 り高台	楕円形	白色	染付	外：竹文		景口	
51	32	小碗	a上層	67	31	43	口方口 附り高台	楕円形	灰白色	染付	外：草花文		景口	

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	寸法 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	径深	器高								
51	33	小碗	c上層	67	25	46	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:草花文			黒口
51	34	小碗	c中層	56	30	55	ロウロ 削り高台	碗反形	灰白色	染付	外:草花文			黒口
51	35	小碗	d上層	70	36	57	ロウロ、 梨子、削り高台	碗反形	白色	染付	外:舟七人御草文 内:四方禪文・見込松竹梅形文	肥前	19c中～	口縁:輪花、高台裏(成)化(年)表、裏、裏大編年Vb～VIIc4期相当
51	36	小碗	d上層	69	29	65	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:草花・渦巻文	瀬戸美濃系		台付黒口
51	37	蓋	RP38	(32)	(84)	19	ロウロ		白色	染付		瀬戸美濃	19c～	
51	38	小碗	RP54	86	34	44	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:唐花文	瀬戸美濃	19c～	
51	39	小碗	b上層	(86)	(30)	43	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	内:見込松竹梅形文	瀬戸美濃系		口縁部:口割
51	40	小碗	b上層、 上層一括	(86)	(29)	46	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:鎌字体文	瀬戸美濃	1850～ 1875	口縁部:口割、瀬戸美濃系第3期第14小期(おもに第1期)、裏大編年集期
51	41	小碗	b上・下 層	86	32	41	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:区画梅二寿文	瀬戸美濃	19c初～	裏大編年集期相当
51	42	小碗	上層一括	(78)	(30)	40	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:漢文 内:見込寿字文	瀬戸美濃	1850～ 1875	瀬戸美濃系第3期第11小期
51	43	小碗	a下層	80	31	42	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	内外:松芝祝寿文	瀬戸美濃	19c～	口縁部:口割
51	44	小碗	a上層	88	32	40	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	内外:松芝祝寿文 内:見込酒器文	瀬戸美濃	19c中～	
51	45	小碗	c中層	(90)	(32)	48	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:区画草花文	瀬戸美濃	19c中～	裏大編年集期相当
51	46	小碗	b上層、 上層一括	(90)	(36)	46	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付		瀬戸美濃	19c～	裏大編年集期相当
51	47	小碗	b下層	(84)	(30)	36	ロウロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外:菊散文	肥前	1810年 前後	九州(肥前)編年V期相当 (小樽2号須崎窯品)
51	48	小碗	a下層	(88)	(37)	49	ロウロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外:桐葉文	肥前	1690～ 18c末	外面文様:コンニャク印判
51	49	小碗	d中層	88	36	49	ロウロ 削り高台	半球形	白色	染付	外:山水文 内:見込草花文?	肥前系		
51	50	小碗	d下層	83	38	53	86 ロウロ 削り高台	半球形	白色	染付	外:花唐草文 内:見込波子鳥文	肥前	1780～	
51	51	小碗	b下層	88	34	53	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:寿字雲文 内:四方舞・火 災雲珠文	肥前		
51	52	小碗	c中・下 層	86	30	54	ロウロ 削り高台	半球形	灰白色	染付	外:雪輪文 内:四方舞文	肥前	1750～ 1720	
51	53	小碗	d中層	82	36	55	ロウロ 削り高台	半球形	白色	染付	外:石目雲文 内:見込文	肥前	1780～ 1810	九州(肥前)編年V期相当 (比嘉92号須崎窯品)
52	54	小碗	d中層	(71)	(38)	56	73 ロウロ 削り高台	半球形	白色	染付	外:山水文 内:四方舞文・ 見込五弁花	肥前		見込:コンニャク印判
52	55	小碗	d下層	72	37	56	73 ロウロ 削り高台	半球形	白色	染付	外:菊散文 内:見込五弁花	肥前	1780～ 1810	九州(肥前)編年V期相当
52	56	小碗	d中層	69	37	58	73 ロウロ 削り高台	半球形	白色	染付	外:松文 内:見込五弁花	肥前	1690～ 18c末	見込:コンニャク印判
52	57	小碗	RP106	78	40	60	86 ロウロ 削り高台	半球形	灰白色	染付	外:格子梵字文 内:見込五弁花	肥前	1780～ 1810	九州(肥前)編年V期相当
52	58	小碗	b上層	78	40	68	86 ロウロ 削り高台	半球形	灰白色	染付	外:菊散文 内:四方舞文・ 五弁花	肥前	1780～ 1810	高台裏:二重彫彫(渦巻)、九州(肥前)編年V期相当
52	59	小碗	a下層	(87)	58	62	ロウロ 削り高台	広垂形	灰白色	染付	外:草花文 内:見込酒器文	肥前	1780～ 1840	九州(肥前)編年V期
52	60	小碗	a上層	(76)	(40)	43	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:区画松竹梅文	瀬戸美濃系	19c末～	外面:桐葉散写
52	61	小碗	a上層	(83)	(44)	43	ロウロ 削り高台	碗反形	白色	染付	外:蓮葉・唐草文	瀬戸美濃系	19c末～	外面:桐葉散写
52	62	小碗	a上層	(78)	(30)	43	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:牡丹唐草文	瀬戸美濃系	19c末～	外面:桐葉散写
52	63	小碗	a上層	(79)	(35)	46	ロウロ 削り高台	碗蓋形	白色	染付	外:蓮散文	瀬戸美濃系	19c末～	黒口、外面:桐葉散写(二色刷り)

表1 SD1出土磁器製品 観察表

SD1 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	寸法 (mm)		口径	底径	器高	最大幅	成形 形状	胎土色	地薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				径	高											
52	64	中碗	RP133	(103)	(41)	63				口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1640～ 1650	初期伊万里、高台貸付砂付番、九州(肥前)編 年Ⅱ之期相当	
52	65	中碗	a下層	(100)	(38)	70				口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1640～ 1650	初期伊万里、九州(肥前)編年Ⅱ之期相当(山辺 山1号須加型品)	
52	66	中碗	d下層	104	38	70				口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台貸付砂付番、漆黒、九州(肥 前)編年Ⅱ之期相当	
52	67	中碗	a下層	104	42	77				口コロ 削り高台	丸形	灰色 染付	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台貸付砂付番、九州(肥前)編 年Ⅱ之期相当	
52	68	中碗	RP126	-	40	(20)	(30)	(30)	(30)	口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台貸付砂付番、九州(肥前)編 年Ⅱ之期相当	
52	69	中碗	d中層	-	42	(30)	(35)	(35)	(35)	口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台貸付砂付番、九州(肥前)編 年Ⅱ之期相当	
52	70	中碗	RP127	-	40	(41)	(34)	(34)	(34)	口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台貸付砂付番、九州(肥前)編 年Ⅱ之期相当	
52	71	中碗	b下層	-	40	(30)	(100)	(100)	(100)	口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台貸付砂付番、九州(肥前)編 年Ⅱ之期相当	
52	72	中碗	RP131	-	40	(34)	(101)	(101)	(101)	口コロ 削り高台	丸形	灰色 染付	肥前	1630～ 1650	初期伊万里、高台貸付砂付番、九州(肥前)編 年Ⅱ之期相当	
52	73	中碗	b中・下 層	(104)	(41)	51				口コロ 削り高台	浅半球形	白色 染付	肥前	1710～ 1750	九州(肥前)編年Ⅳ期相当	
52	74	中碗	c下層	(103)	(41)	50				口コロ 削り高台	浅半球形	白色 染付	肥前	1710～ 1750	九州(肥前)編年Ⅳ期相当	
52	75	中碗	c上・中・ 下層、d 下層	98	38	47				口コロ 削り高台	浅半球形	灰白色 染付	肥前	1710～ 1750	九州(肥前)編年Ⅳ期相当 (志田山1号須加型品)	
52	76	中碗	c下層	(99)	(38)	49				口コロ 削り高台	浅半球形	灰白色 染付	肥前	1810年 前後	九州(肥前)編年Ⅴ期相当	
52	77	中碗	c中層、b・ d下層	(105)	(36)	50				口コロ 削り高台	浅半球形	白色 染付	肥前系			
53	78	中碗	b中層	(100)	(37)	50				口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1680～ 1740	渡見氏系、くらわんか手、九州(渡見氏)編年 Ⅴ-1期相当	
53	79	中碗	b中層	(114)	(45)	60				口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	1820～ 1860	渡見氏系、くらわんか手、見込：コンネク 印刷、九州(渡見氏)編年Ⅴ-4期相当	
53	80	蓋	d上層	104	-	-				口コロ		灰白色 染付	肥前	18c中～	全体に裏焼痕	
53	81	中碗	b上層	(108)	(44)	63				口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前	18c中～		
53	82	蓋	RP94	92	42	29				口コロ		灰白色 青磁染付	肥前	1730～ 1780	見込：コンネク印刷、九州(肥前)編年初期 相当(志田山2号須加型品)	
53	83	中碗	b下層	(109)	(44)	61				口コロ 削り高台	丸形	灰色 青磁染付	肥前	1750～ 1780	見込：コンネク印刷、高台「裏」?、九 州(肥前)編年初期相当、(志田山2号須加型品)	
53	84	中碗	RP97	(100)	(38)	59				口コロ 削り高台	丸形	白色 染付	肥前	1690～ 18c初	外壁：筆墨に等値で両面、 最大幅95×V-a期相当	
53	85	中碗	b下層	102	38	59				口コロ 削り高台	丸形	白色 染付	肥前		高台製(大明年製)	
53	86	中碗	b上層	-	42	(28)	(36)	(36)	(36)	口コロ 削り高台	丸形	白色 染付	肥前系		高台裏土着き(土屋製法)	
53	87	中碗	d中層	105	47	63				口コロ 削り高台	丸形	白色 染付	肥前系		外：釉に亀甲文 内：四方障文・ 見込障文 高台製二重瀬川「渦巻」	
53	88	中碗	c上・下 層	(106)	(37)	56				口コロ 削り高台	丸形	灰白色 染付	肥前		外：草花文? 内：見込赤文 瀬川美濃系	
53	89	中碗	d中層	(106)	(36)	57				口コロ 削り高台	丸形	白色 染付	肥前		外：花唐草文 内：見込火炎文 瀬川美濃系	19c～
53	90	中碗	a上層	98	30	49				口コロ	広底形	灰白色 染付	肥前		外：「い」? 内：見込「い」	体部染付文字読み
53	91	中碗	c中層	98	47	50				口コロ 削り高台	広底形	灰白色 染付	肥前		外：「い」? 内：見込「い」	体部染付文字読み
53	92	蓋	c上・下 層	99	54	28				口コロ		白色 染付	肥前系		外：草花文 内：見込紅文	
53	93	中碗	上層一 区、c下 層	(110)	(60)	64				口コロ 削り高台	広底形	白色 染付	肥前系		外：草花文 内：見込紅文	
53	94	中碗	b下層	-	40	(42)	(30)	(30)	(30)	口コロ 削り高台	広底形	白色 染付	肥前		18c末～外壁：吹墨技法、漆黒、高台裏土着き	
53	95	中碗	c下層	(108)	(36)	60				口コロ 削り高台	広底形	灰白色 染付	肥前		外：山水文 内：見込紅文	1780～

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	寸法 (mm)			成形 形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	埋定地点	年代	備考	
				口径	底径	器高								最大径
53	96	中瓶	d上層	(102)	(38)	55	口夕口 削り高台	広束形	灰白色	染付	外:草花文 内:見込唐文	在地	日跡2個(埋定4個)	
53	97	中瓶	d中層	(115)	(36)	69	口夕口 削り高台	広束形	灰白色	染付	外:草花文 内:見込唐文	肥前	1780~	
53	98	中瓶	跡55	-	51	(37)	(106)	口夕口 削り高台	広束形	白色	染付	外:他芝形唐文	瀬戸美濃	1800~ 1825
53	99	中瓶	d上層	(112)	(30)	69	口夕口 削り高台	広束形	白色	染付	外:他芝形唐文	瀬戸美濃	1800~ 1825	
54	100	中瓶	d中層	(91)	32	46	口夕口 削り高台	平形	灰白色	染付	外:梵字文 内:見込唐文	肥前	1740~ 1770	
54	101	中瓶	c下層	(104)	36	52	口夕口 削り高台	平形	灰白色	染付	外:唐文 内:見込唐文	肥前	1780~	
54	102	中瓶	d下層・ 上層一括	105	34	50	口夕口 削り高台	平形	白色	染付	内:唐文・見 込唐文	瀬戸美濃系		
54	103	中瓶	b上層	108	42	57	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:上ろけ織文 見込・梵字文	肥前系		
54	104	中瓶	跡56・ 上層一括	106	42	60	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:草花文 内:見込唐文	肥前系		
54	105	中瓶	a上層	(108)	(42)	60	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:蘭子文 内:四方唐文・ 見込松竹梅・唐 文	肥前	1820~ 1850	
54	106	中瓶	跡69	(105)	39	61	口夕口 削り高台	碗反形	灰白色	染付	外:唐文	肥前	1850~ 1860	
54	107	中瓶	d上層	93	37	47	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:花唐草文 内:蓮唐文・見 込唐文	瀬戸美濃系		
54	108	中瓶	跡90	99	35	48	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:菊に唐草文 内:見込唐文	瀬戸美濃	19c~	
54	109	中瓶	c中層	98	38	51	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:花唐草文 内:蓮唐文	瀬戸美濃	1800~ 1825	
54	110	中瓶	d上層	96	36	57	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:龜甲松竹梅 文 内:唐文・見 込松竹梅唐文	瀬戸美濃系		
54	111	蓋	c下層	85	33	23	口夕口		白色	染付	内:口縁唐草文	瀬戸美濃系		
54	112	中瓶	d上層	97	35	46	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	内:口縁唐草文	瀬戸美濃系		
54	113	蓋	c中層	96	35	27	口夕口		白色	染付	内:唐草文 内:口縁唐草文	瀬戸美濃系		
54	114	中瓶	c中層	110	40	59	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	内:見込大に梅 松文	瀬戸美濃系		
54	115	中瓶	跡71	102	35	53	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付		瀬戸美濃系		
54	116	中瓶	b上・下 層	(100)	37	55	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付		瀬戸美濃系		
54	117	中瓶	d下層	111	36	54	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:山水文 内:見込唐文	瀬戸美濃系		
54	118	中瓶	b上層	103	36	59	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:上ろけ織文 内:見込唐文	瀬戸美濃系	19c後~	
54	119	中瓶	d上層	102	38	55	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:花唐草文 内:見込唐文	瀬戸美濃	19c~	
54	120	中瓶	d上層	103	37	57	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:牡丹文 内:唐文・見 込唐文	瀬戸美濃	19c~	
54	121	中瓶	表土一括	(102)	(34)	58	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:区画山水文	瀬戸美濃系		
54	122	中瓶	b上層・c 上層	108	42	58	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	外:唐文 内:見込唐文	瀬戸美濃系		
55	123	中瓶	d上層	106	38	54	口夕口 削り高台	碗反形	白色	染付	内:見込唐文	瀬戸美濃系		
55	124	中瓶	c上層	112	37	56	口夕口 削り高台	碗反形	灰白色	染付	外:区画文・松 仁唐草文 内:見込唐文	瀬戸美濃系		
55	125	中瓶	d上層	(110)	(30)	56	口夕口 削り高台	碗反形	灰白色	染付	外:松葉に海 人唐草文 内:四方唐文	瀬戸美濃系		
55	126	蓋	c中層	80	37	28	口夕口		白色	染付	外:草花文 内:見込唐文	瀬戸美濃系		

表1 SD1出土磁器製品 観察表

SD1 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (cm)			成形	形状	胎土色	地楽・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考	
				口径	底径	器高									最大幅
55	127	中碗	R49	106	41	56	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付	外：草花文 内：見込唐文	瀬戸美濃系			
55	128	蓋	d上層	75	38	33	ロケロ		白色	染付	外：幅縁文 内：透徹文・見 込唐文	瀬戸美濃系	高台衝/高		
55	129	中碗	d上層	111	42	60	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付	外：幅縁文 内：透徹文・見 込唐文	瀬戸美濃系			
55	130	中碗	c下層	(104)	(36)	57	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付	見込唐文	在地系			
55	131	中碗	c中層	(104)	(40)	54	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付	外：草花文 内：見込唐文	在地		口縁一部無縁	
55	132	中碗	d上層	108	40	58	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付		在地系	19c～		
55	133	中碗	d上層	(104)	34	56	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付	外：草花文 内：見込唐文	在地		目録4冊	
55	134	中碗	d上層	(108)	(44)	56	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付	外：草花文 内：見込唐文	在地		目録2冊(推定4冊)	
55	135	中碗	c中層	(112)	(42)	56	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付	外：区画幅縁文 内：見込幅縁文	在地		目録4冊	
55	136	中碗	d上層	112	42	59	ロケロ 削り高台	楕円形	白色	染付	外：蝶に唐文 内：見込唐文	在地		目録4冊	
55	137	中碗	a上層	102	37	45	ロケロ 削り高台	浅半球形	白色	染付	外：花唐草文 内：透徹文	瀬戸美濃系	19c末～ 19c末	外面：刷振転写	
55	138	中碗	表土	(102)	(37)	55	ロケロ	楕円形	灰白色	染付	外：菊に紅葉丸 文・透徹文 内：透徹文・見 込松竹梅門形 文	肥前系	19c後～ 19c末	型紙照合	
55	139	蓋	表土一括	86	38	22	ロケロ		灰白色	青磁染付 見込五弁花	外：青磁 内：四方唐文・肥 前	肥前	1750～ 1780	二重欄(高麗)・九州(肥前)編年表期相当	
55	140	蓋	b中層	(98)	(46)	30	ロケロ		灰白色	青磁染付 見込五弁花	外：青磁 内：四方唐文・見 込五弁花	肥前	1750～ 1780	見込：コニヤク印判・九州(肥前)編年表期相当	
55	141	蓋	c中層	(100)	(32)	28	ロケロ		白色	染付 外：鴛子に紅葉 文	肥前	18c前～ 18c中	外面：コニヤク印判		
55	142	蓋	d中層	92	74	27	ロケロ		灰白色	染付 外：唐文 内：見込唐文	肥前	1780～ 1810	九州(肥前)編年表V期相当		
55	143	蓋	b中・下 層	96	40	30	ロケロ		白色	染付 外：花唐草文 内：四方唐文・見 込松竹梅門形 文	肥前	1740～ 1780	九州(肥前)編年表IV期(築の谷窯製型品)		
56	144	蓋	b下層	(100)	(34)	25	ロケロ		白色	染付 外：草花文 内：四方唐文・見 込松竹梅門形 文	肥前	18c中～	(大明成化(年)製)高、透徹筋あり		
56	145	蓋	d上層	98	32	26	ロケロ		白色	染付 内：四方唐文・見 込松竹梅門形 文	瀬戸美濃系				
56	146	蓋	c上層	(88)	34	26	ロケロ		白色	染付		瀬戸美濃系			
56	147	蓋	d上・中 層	92	36	18	ロケロ		白色	染付		瀬戸美濃系		焼成不良による赤み、外面に滑着痕	
56	148	蓋	d上層、c 中層	90	32	26	ロケロ		白色	染付	内：見込唐文	瀬戸美濃系			
56	149	蓋	c中層	92	-	22	ロケロ		白色	染付	外：区画山水文 内：見込唐文	瀬戸美濃	18c～		
56	150	蓋	上層一括	98	38	25	ロケロ		白色	染付	内：唐文	瀬戸美濃系			
56	151	蓋	表土一括	(108)	(44)	20	ロケロ		白色	染付	内：透徹文	瀬戸美濃系	19c後～ 19c末	型紙照合	
56	152	大碗	c上・下 層	(146)	(62)	70	ロケロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：唐・鳥文 内：四方唐文・見 込唐文	肥前			
56	153	大碗	a下層	(148)	(60)	77	ロケロ 削り高台	丸形	白色	染付		肥前系		高台衝(貫)・(貫)・(貫)	
56	154	淨手酒杯	d上層	(52)	(22)	30	ロケロ 陶高台	丸形	白色	透明釉	外：高台衝南文 内：唐文	瀬戸美濃系		内面土粒付、外面染付	
56	155	淨手酒杯	d上層	(50)	(24)	28	ロケロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：高台衝南文 内：唐・鳥文	瀬戸美濃系		内面土粒付、外面染付	
56	156	淨手酒杯	c上層	(50)	(24)	28	ロケロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：高台衝南文	瀬戸美濃系		内面：ノ瀬ノ上、高麗調松田土粒付、外面 染付	

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	寸法 (mm)			成形 形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考	
				口径	口径	器高								
56	157	薄手酒杯	上層一括	(90)	(24)	27	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:高台御文文 内:(和工)	瀬戸文遺系	内面上絵付、外面染付	
56	158	薄手酒杯	c中層 上層一括	(82)	(25)	27	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:高台御文文	瀬戸文遺系	内面:(四角口)上絵付、外面染付	
57	159	薄手酒杯	d上層	(82)	(25)	27	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:高台御文文	瀬戸文遺系	内面上絵付、外面染付	
57	160	薄手酒杯	b下層	(86)	(27)	29	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:高台御文文	瀬戸文遺系	内面:(「明神ハ三輪のふし」)上絵付、外面染付	
57	161	薄手酒杯	c上層、d 上層	(58)	(26)	30	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付		瀬戸文遺系	内面上絵付、外面染付	
57	162	薄手酒杯	c上層	(82)	(25)	29	ロウロ 削り高台	扁球形	白色	透明釉			内面上絵付	
57	163	仏飯器	b下層	-	40	36	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色 淡赤褐色	染付		肥前	17c末~或成不貞により底部淡赤褐色	
57	164	仏飯器	a上層	-	41	36	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付		肥前		
57	165	仏飯器	d上層	-	-	33	ロウロ 削り高台	丸形	白色	透明釉	外:遊草文	瀬戸文遺系	東大福年輪~初期	
57	166	紅蓋口	c上層	69	28	18	型打	菊花形	白色	透明釉		瀬戸文遺系	焼熱面	
57	167	紅蓋口	d下層	51	16	18	型打	菊花形	白色	透明釉		肥前系		
57	168	小皿	群P18	124	47	31	ロウロ 削り高台	丸形	灰色	鉄絵	外:草花文	肥前	1620~ 1640	初期伊万里、高台砂目、九州(肥前)福年輪B-II 期相当
57	169	小皿	b下層	126	45	22	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:草花文	肥前	1620~ 1640	初期伊万里、高台砂目、九州(肥前)福年輪B-II 期相当
57	170	小皿	b中層	120	48	35	ロウロ 削り高台	丸形	灰色	染付	内:草子文	肥前	1740~ 1780	波矢見系、見込絵の目録調査、九州(波矢見) 福年輪B期、東大福年輪B期~相当、波熱面
57	171	小皿	a上層	(132)	(80)	33	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外:遊草文 内:見込五弁花	肥前	1680~ 1780	波矢見系、見込絵の目録調査、くろわんか手、 高台砂目、東大福年輪B期相当
57	172	小皿	a上層	(134)	(72)	41	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外:遊草文 内:見込五弁花	肥前	1680~ 1780	波矢見系、見込絵の目録調査、くろわんか手、 高台砂目、東大福年輪B期相当
57	173	小皿	a下層	(130)	(56)	30	ロウロ 削り高台	丸形	灰色	鉄絵	内:遊草文	肥前	17c中~ 17c後	波矢見系、見込絵の目録調査、くろわんか手、 高台砂目、東大福年輪B期相当
58	174	小皿	d下層	120	72	27	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:遊草文 内:四方障子、 松竹梅文・見込 五弁花	肥前		目録1個(推定4個)、胎土:鉄分を含まずガラス質・光沢 少ない
58	175	小皿	b上層	(114)	(72)	29	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	内:御文	在産		目録1個(推定4個)、胎土:鉄分を含まずガラス質・光沢 少ない
58	176	小皿	b中層	(124)	77	31	ロウロ 削り高台	扁球形	白色	染付	内:御文	在産		目録4個、胎土:鉄分を含まずガラス質・光沢 少ない
58	177	小皿	d上・中 層	122	47	39	ロウロ 削り高台	平形	白色	青磁染付	外:青磁 内:松竹梅文? 見込蝶文	在産		目録4個
58	178	小皿	d上層	(128)	70	36	ロウロ 削り高台	扁球形	灰白色	染付	内:山水文			
58	179	小皿	c中層	(92)	(41)	29	ロウロ 削り高台	扁球形	白色	染付	内:雙關山水文	瀬戸文遺系	17c~	高台御原・朱書き
58	180	小皿	表上 上層一括	118	64	26	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外:遊草文 内:遊草文	瀬戸文遺系		高台御原系あり
58	181	小皿	d上層	120	59	29	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	内:草花文	瀬戸文遺系		焼熱面、高台裏朱書き
58	182	小皿	上層一括	(118)	(60)	22	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	内外:仙芝祝寿 文	瀬戸文遺系	17c後	
58	183	小皿	群P1	(194)	(70)	28	ロウロ 削り高台	型打、龍 の目四 形高台	丸形	灰白色	染付		肥前系	梅花面
58	184	小皿	d上層	95	45	22	ロウロ 削り高台	平形	白色	染付	内:蝶文	瀬戸文遺系		
58	185	小皿	b中層	98	58	26	ロウロ 削り高台	菊花形	白色	染付	内:遊草文 見込竹梅・形 文	瀬戸文遺系	17c中	内面:型押文様(扇切)
59	186	小皿	c上層	(92)	48	21	ロウロ 削り高台	型打、菊 花形高台	白色	染付	内:遊草文・ 見込梅花文	瀬戸文遺系		梅花形手彫面、内面:型押文様(扇切)

表1 SD1出土磁器製品 観察表

SD1 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高								
30	187	小皿	RIV4	92	30	26	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：緞唐草文・ 見込松竹梅内文	瀬戸美濃系		手塩皿、内面：掬付文様(染付)
30	188	小皿	c上・中 層	95	46	22	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：緞唐草文・ 見込松竹梅内文	瀬戸美濃系		輪花形手塩皿、内面：掬付文様(染付)
30	189	小皿	d上層、 c上・中 層	94	46	22	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：緞唐草文・ 見込松竹梅内文			手塩皿、内面：掬付文様(染付)
30	190	小皿	d中層	75	34	23	ロウロ、 掬付、削 り高台	方形	白色	染付	内：見込草文	瀬戸美濃系		手塩皿
30	191	小皿	c上・下 層	85	38	23	ロウロ、 掬付、削 り高台	方形	白色	透明釉		瀬戸美濃	1800~ 1875	手塩皿、瀬戸製陶年第3期(約19~11小皿、東 大編年表)相当
30	192	小皿	d上層	83	36	24	ロウロ、 掬付、削 り高台	方形	明赤灰 色	染付	内：雲文・見込 菊花文			手塩皿
30	193	小皿	b上層	(100)	30	23	掬付、削 り高台	六角形	白色	染付		瀬戸美濃系		手塩皿、内面：掬付文様(染付)
30	194	小皿	d上層	86	44	23	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：山水文?	肥前系		輪花皿
30	195	小皿	c上層	100	56	24	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：舟文	肥前系		輪花皿
30	196	小皿	d上層	96	30	31	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：鳳凰文			輪花皿
30	197	小皿	c中・下 層	107	62	24	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：山水文			輪花皿
30	198	小皿	c下層	94	52	24	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：山水文	肥前	1810~ 1860	輪花皿、口径107、九州(肥前)編年V期相当
30	199	小皿	c上層	102	58	24	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	灰白色	染付	内：山水文	肥前系	19~	輪花皿、口径107
30	200	小皿	c中・下 層	102	64	25	ロウロ、 掬付、削 り高台	菊花形	白色	染付	内：山水文	肥前系	19~	輪花皿、口径107
30	201	小皿	d上・中 層	130	79	29	ロウロ、 掬付、底 の目付形 高台	菊花形	白色	染付	内：山水文	肥前	1810~ 1860	輪花皿、口径107、九州(肥前)編年V期相当
60	202	小皿	d上層	96	52	25	ロウロ 削り高台	丸形	白色	鉄釉	内：鉄釉・刺繍 雲文			内面：土染付
60	203	小皿	a下層	98	48	19	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：獅子文	瀬戸美濃	19~中	内面：掬付文様、口径107
60	204	小皿	d上・中 層、b下 層、c下 層	124	72	25	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：波・雲文	瀬戸美濃	19~中	内面：掬付文様、口径107
60	205	小皿	a上層	131	60	23	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：結城文	瀬戸美濃系	19~末~	調物配布、口径107
60	206	小皿	a上層	112	60	25	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	内：雲文・見込 松竹梅内文	瀬戸美濃系	19~末~	調物配布、口径107
60	207	小皿	表土	(102)	(50)	24	ロウロ 削り高台	丸形	黄灰色	染付	内：唐草文・見 込雲文		19~後~ 19~末	翠瓶脇皿
60	208	小皿	a上層	(116)	(60)	35	ロウロ、 掬付、底 の目付形 高台	菊花形	灰白色	染付	内：唐草文 内：区画草花文・ 見込松竹梅内文	肥前系?	19~後~ 19~末	輪花皿、翠瓶脇皿
60	209	中皿	b下層	(155)	68	31	ロウロ 削り高台	丸形	白色	青花	内：山水文	豊後系		高台留付砂付蓋
60	210	中皿	a上層	(136)	60	30	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：草花文	肥前	17~前~ 17~中	初期伊万里、高台砂付
60	211	中皿	b中層、 b下層	(228)	68	67	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：菊水文・見 込五弁花	肥前	1620~ 1640	初期伊万里、高台砂付、九州(肥前)編年第1 ~2期相当
61	212	中皿	c下層	(138)	(60)	30	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：唐草文	肥前	1740~ 1800	見込：底の目付形、九州(肥前)編年中期、 東大編年V a 期相当
61	213	中皿	d中層	138	74	37	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：見込草花文	肥前	1600~ 1780	見込：口シヤク目付、高台(裏面番号)、九州(肥 前)編年中期~東大編年VII期相当
61	214	中皿	d上・中 層	140	80	36	ロウロ、 掬付、削 り高台	丸形	白色	染付	内：唐草文 内：区画風草 花文・見込五弁 花	肥前		輪花皿、高台黄二重方形砂付調物
61	215	中皿	b下層	196	113	48	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：唐草文 内：宝文	肥前	1680~ 1720	高台黄二重調物、漆瓶、九州(肥前)編年IV期相 当

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	寸法 (mm)			成形 形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考	
				口径	底径	器高								最大幅
61	216	中皿	c中層	(144)	(82)	38	ロウロ、 削り高台	丸形	白色	染付	外：唐草文 内：雲文	肥前	内面：磨練さ、高台裏(大明年間?)、漆黒	
61	217	中皿	c中・下層	-	83	(32)	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：唐草文 内：雲文	肥前	内面：磨練さ、高台裏(大明年間?)	
61	218	中皿	c下層	(128)	(164)	34	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	内：波文	肥前	輪花皿、内面：磨練さ技法、高台裏(付着痕)	
62	219	中皿	c中層、 d下層	(154)	(92)	40	ロウロ、 彫り目四 形高台	菊花形	白色	染付	外：唐草文 内：区画草文、 松竹梅四形文	肥前	18c後～高台裏：二重方形枠(染?)、磨練痕、朱書き	
62	220	中皿	d中層	130	90	34	ロウロ、 彫り目四 形高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文 内：区画草文・ 見込二方刻面 文	肥前	19c中・高台裏：二重方形枠(染?)	
62	221	中皿	c中層	(152)	(76)	30	ロウロ、 型打、削 り高台	五角形	灰白色	青緑	内：草花文			
62	222	中皿	d上層	160	80	39	型打、削 り高台	方形	白色	染付	内：区画草花文 見込松竹梅文	瀬戸美濃系		
62	223	中皿	c上・中 層	140	76	46	ロウロ、 型打、削 り高台	菊花形	白色	染付		在池	輪花皿、目録4個	
62	224	中皿	c上層	146	91	46	ロウロ、 型打、彫 り目四形 高台	菊花形	灰白色	染付	内：山水文	在池	輪花皿、目録4個	
63	225	大皿	d上層	-	-	(50)		楕圓形	白色	白地黒彩	イギリス	19c初～	イギリス教習館蔵、ウェロー・ボタン(鎌文 様)、銅板転写	
63	226	大皿	即社、 c上層	-	150	(35)	ロウロ 削り高台	楕圓形	白色	染付	外：唐草文 内：山水文	肥前系	19c～	高台裏部あり
63	227	小鉢	b上層	118	58	58	ロウロ、 型打	楕圓形	白色	染付	外：武田重頼文 内：見込・白澤 文	肥前	1820～ 1850	外面：朱書き技法、底面朱書き有、九州(肥前) 編年V期以降
63	228	中鉢	a下層、 b下層	202	85	68	ロウロ 削り高台	丸形	白色	染付	外：唐草文 内：区画草花文・肥前 山水文	肥前	18c後～	輪花鉢、高台裏：二重方形枠(染?)、漆黒
63	229	中鉢	d下層、 c上・下 層	(216)	(97)	90	ロウロ 削り高台	丸形	灰白色	染付	外：唐草文 内：唐草文	肥前		口径：口縁、高台裏部(元□□花□□)
64	230	中鉢	d上層、 c上・中 層	150	87	74	ロウロ、 彫り目四 形高台	楕圓形	白色	青緑		肥前系	輪花鉢	
64	231	中鉢	c下層	(181)	(119)	76	ロウロ、 型打、彫 り目四形 高台	楕圓形	灰白色	色絵染付	外：波濤文 内：白緑牡丹唐 草文	肥前	19c?	口縁部輪花・金彩、染部、九州(肥前)編年V 期?
64	232	中鉢	d上・中 層、b下 層	(200)	98	81	ロウロ、 型打、彫 り目四形 高台	楕圓形	白色	染付	外：区画草花文? 内：区画草花文・肥前 見込獅子文	肥前	1820～	型打輪花鉢、磨練さ、外：朱書き、九州(肥前) 編年V期以降
64	233	中鉢	d上・中 層、b下 層、c上 層	(200)	114	87	ロウロ、 型打、削 り高台	丸形	白色	染付	外：山水文 内：山水文・唐 文	肥前系		外面：緑文
64	234	中鉢	a上層	160	80	63	ロウロ、 彫り目四 形高台	丸形	白色	染付	内：区画四方唐 文、見込山水 文	瀬戸美濃系		輪花鉢、高台裏(付着痕)
65	235	蕎麦 椀口	c上層	(78)	(47)	57	ロウロ 瀬輪高台	楕圓形	白色	染付	外：草花文	肥前	1700～ 1780	九州(肥前)編年V期相当
65	236	蕎麦 椀口	c下層	(78)	(54)	54	ロウロ、 彫り目四 形高台	楕圓形	灰白色	染付	外：波濤文 内：四方唐文、 見込火炎唐文	肥前		
65	237	蕎麦 椀口	R90	-	(60)	(25)	ロウロ 削り高台	楕圓形	白色	染付	外：唐文 内：見込五片文	肥前	18c末	見込：コンニャク印判、高台裏(朱書き、磨練 さ)
65	238	合子	a上層、 上層一紙	(上) 47 (F)	(上) 56 (F)	(上) 11 (F)	ロウロ		白色	透明釉	瀬戸美濃系		合子蓋	
65	239	合子	a上層	96	89	27	ロウロ 削り高台		白色	透明釉	瀬戸美濃系	19c末～	銅板転写	
65	240	合子	a上層	61	60	11	ロウロ		白色	染付	外：竹文			
65	241	合子	b下層、c 下層、表 土	92	91	14	ロウロ		白色	染付	外：草花文	在池?	合子蓋	
65	242	蓋物	c上層	(78)	(84)	39	ロウロ		白色	染付	外：磨練文・松 梅文	肥前系		蓋物蓋
65	243	蓋物	b上・下 層	118	65	62	ロウロ 削り高台	半圓形	白色	染付		肥前	1700～ 1800	九州(肥前)編年V～V期相当
65	244	段重	d下層	(120)	(90)	57	ロウロ 削り高台	腰圓無脚 工	白色	染付	外：あじ人唐草 文	肥前	1700～ 1800	九州(肥前)編年V期、本人編年頃相当



表1 S D1出土磁器製品 観察表

SDR 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	地薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考	
				口径	底径	器高									最大幅
65	245	段重	c下層	(126)	(64)	48	130 口ワロ 附り高台	圓筒形中, 有	白色	染付	外:七宝繋ぎ文	肥前	1700~ 1800	九州(肥前)編年IV~V期相当	
66	246	段重	c上層	(140)	(82)	50	142 口ワロ 附り高台	圓筒形中, 有	白色	染付	外:みじ丸唐草 文	肥前	1700~ 1800	九州(肥前)編年V期相当	
65	247	瓶入	a下層	124	33	43			白色	染付	外:鳥に波文	瀬戸美濃系			
65	248	火入	d上層	(78)	(42)	71	口ワロ 附り高台	平底形	灰白色	染付	外:不明	肥前系		高台銀付砂付蓋	
65	249	火鉢	c上層- d上層	152	154	163	口ワロ 附り高台	四角形	白色	染付	外:蛸唐草文・ 口縁波文	肥前系		高台銀ハリ文入(6個)	
66	250	小瓶	a上層- b中層	18	28	79	40 口ワロ, 輪高台	瓶反錐形 形	白色	染付	草花文	肥前	1800~	讃岐形,九州(肥前)編年V期相当	
66	251	小瓶	b下層	19	25	79	38口ワロ	瓶反錐形 形	灰白色	染付	松葉文	在池?		讃岐形,13の同型品,外面化粧土	
66	252	小瓶	c上層	-	40	(72)	61口ワロ	瓶反錐形 形	灰白色	染付	蛸唐草文	肥前	1800~	讃岐形,銀付部割底,九州(肥前)編年V期相当	
66	253	小瓶	c上層	-	37	(60)	52 口ワロ, 輪高台	瓶反錐形 形	灰白色	染付	草花文	肥前	1800~	讃岐形,高台銀付砂付蓋,九州(肥前)編年V期相当	
66	254	小瓶	b上層	-	42	(118)	36口ワロ	瓶反錐形 形	白色	染付	松竹梅文	肥前	1800~	讃岐形,九州(肥前)編年V期相当	
66	255	小瓶	d上層	12	-	(72)	46口ワロ	瓶反錐形 形	白色	染付	蛸唐草文	肥前系		讃岐形	
66	256	小瓶	d上層	-	41	(60)	61口ワロ	瓶反錐形 形	白色	染付	松竹梅文	瀬戸美濃	19c~	讃岐形	
66	257	小瓶	d上・中 層	(17)	37	114	口ワロ 52クワ底高 台	瓶反錐形 形	白色	染付	草花文	瀬戸美濃系		讃岐形	
66	258	中瓶	SD1一括	-	-	(112)	口ワロ	瓶反錐形 形	灰白色	染付	染付文字(志守と 今浪人)	肥前		讃岐形	
66	259	神酒徳利	d上層	-	42	(82)	53 口ワロ, 輪高台	瓶子形	灰白色	染付	蛸唐草文	肥前	1700~ 1800	九州(肥前)編年V期相当	
66	260	焼酎盆	b下層	34	-	(43)	38口ワロ	扁平形	白色	色絵	外:網目に梅花 文	肥前	1600~ 1670	九州(肥前)編年前期相当	
66	261	焼酎盆	b下層	-	48	(86)	96 口ワロ 附り高台	圓丸形	灰白色	染付	梅花文	肥前	18c後~ 19c前	波佐見系,九州(波佐見)編年V-2~3期	
66	262	燗地利	a上層	-	45	(130)	口ワロ, 60型付,割 高台		白色	染付		瀬戸美濃系			
66	263	燗地利	d上層	32	48	136	54口ワロ	瓶反形	白色	染付	数軒伏文	瀬戸美濃	19c~		
66	264	燗地利	d上・中 層	29	54	138	61口ワロ	瓶反形	白色	染付	燗酒輪	瀬戸美濃系	19c~		
66	265	燗地利	c下層	30	(60)	192	(36)口ワロ		白色	染付		瀬戸美濃系	19c~		
66	266	燗地利	c上・中 層	31	(60)	194	68口ワロ		白色	染付	山水文	在池	19c~		
67	267	燗地利	b下層	23	55	196	70口ワロ	筒口形	白色	染付	山水文	肥前系	19c~		
67	268	燗地利	c上・中 層	40	78	240	95口ワロ	筒口形	白色	染付	山水文	瀬戸美濃系	19c~		
67	269	花尾瓶	e中・下 層	88	-	(128)	口ワロ, 胎付 形	瓶子丸耳 形	灰色	青磁					
67	270	急須	d上層	53	56	57	107 口ワロ, クワ底	横手形	白色	染付	草花文	瀬戸美濃系			
67	271	急須	d上層	56	50	61	111 口ワロ, クワ底	横手形	白色	染付色絵	草花文	瀬戸美濃系		外面:上絵付・染付	
67	272	急須	d上層	54	58	71	12口ワロ, クワ底	横手形	白色	染付	山水文	瀬戸美濃系			
67	273	急須	d上層- b中層	60	52	65	106 口ワロ, 高台クワ 底,外面 黒文	横手形	白色	染付	漢詩文	瀬戸美濃系			
67	274	急須	d上層	66	66	71	116 口ワロ, クワ底	横手形	白色	染付	蘭南文・山水文	瀬戸美濃系			
67	275	蓋	c下層	-	66	25	口ワロ		白色	染付	外:草花文	瀬戸美濃系		取手径:15cm,急須蓋	
67	276	蓋	b中層	-	65	29	口ワロ		白色	染付	外:草花文			取手径:14cm,急須蓋	

表1 SD1出土磁器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	重量 (g)	成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考	
		口径	底径	器高	最大幅								
68	277	水筒	d上層、 土層一括	(口輪) 82 (21)	型打	魚形	白色	透明釉		瀬戸美濃系			
68	278	水筒	b上層	(口輪) 94	-	52	型打	鳥形	白色	透明釉		瀬戸美濃系	
68	279	水筒	c中層	(口輪) (脚輪) 74 (38)	26	型打	豆腐形	白色	染付	上部：型打菊花文		瀬戸美濃系	
68	280	水筒	c中層	(口輪) (脚輪) 60 (48)	22	型打	豆腐形	白色	染付	上部：型打菊花文		279と同一個体か?	
68	281	中皿	b下層	(90)	-	(150) (151) (27) クロ	梨丸形	灰白色	染付	外：熊野御香文・ 体部冠草文	肥前	17c前	初期伊万里
68	282	戸草	c下層	(最大径) 12	8	ロクロ	車形	白色	透明釉		瀬戸美濃系 19c-	中央穿孔	
68	283	戸草	b上層	(最大径) 14	8	ロクロ	車形	白色	透明釉		瀬戸美濃系 19c-	中央穿孔	
68	284	散蓮華	a上層	(口輪) (脚輪) 80 (48)	25	型打		白色	染付	寿字文?		瀬戸美濃 19c-	把手部欠損、最大幅年輪a-区別
68	285	三ノ子 ア卓	d上層	(口径) (底径) 10 22	37	ロクロ、 30度傾斜(底 取付)		白色	染付	雲文?		産地不明	
68	286	梅皿	a上層	(最大径) 128	-	11	型打		白色	透明釉		瀬戸美濃 20c前	西沢(与実(瀬戸市)出土品同型品)
68	287	筆洗	a上層	(最大径) 97	-	28	型打		白色	透明釉		瀬戸美濃系 20c前	底面閉書「高等一年本様きん、金ゴキキン、キンキんきん」
68	288	乳鉢	d中層	(口径) (底径) 30 14	51	ロクロ		白色	透明釉			全体に焼熱痕	
68	289	乳鉢	d上層	(152) (72)	61	ロクロ、 クワ底高付		灰白色	透明釉				

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	重量 (g)	成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考			
		口径	底径	器高	最大幅									
69	290	小碗	b上層	(53)	28	27	35	ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(淡緑)	大塚相馬系	小杯、高台裏無釉	
69	291	小碗	a上層	(90)	28	27		ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(白)	大塚相馬系	小杯、高台裏無釉	
69	292	小碗	b下層	(62)	28	36		ロクロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(淡緑)	大塚相馬系	高台裏無釉	
69	293	小碗	RP108	40	21	38		ロクロ 削り高台	半球形	灰色	外：灰釉(透明)、貫入、 草花文		小杯、外面草花文；貫入、 灰釉、漆喰、高 台裏無釉	
69	294	小碗	c下層	75	28	43		ロクロ 削り高台	丸形	浅黄色	灰釉(黄緑)、貫入	京・信楽系?	高台裏無釉	
69	295	小碗	b上層	(47)	29	36		ロクロ 型打	腰筒形	灰色	灰釉(淡緑)		頸口、高台裏無釉	
69	296	小碗	c上層、 d上層	61	27	34		手付ね 高台高付	腰筒形	褐色	外：無釉、土粒花草 内：長石釉		頸口	
69	297	小碗	b上層	62	32	38		ロクロ 削り高台	腰筒形	灰白色	灰釉(淡緑)		頸口、高台裏無釉	
69	298	小碗	土層一括	(64)	29	45		ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	灰釉(透明) 外：掛子文		外面掛子文；土粒付け	
69	299	小碗	a上層	(72)	39	53		ロクロ	筒形	浅黄色	灰釉(黄緑)、緑釉焼し		基部底	
69	300	小碗	c上層	68	-	45		ロクロ	碗形	灰白色	灰釉		ろつば、全体に焼熱痕	
69	301	小碗	c中層	(82) (34)	53			ロクロ 削り高台	碗形	茶褐色	外：白色粘土、透明釉、 鉄粒 内：白色粘土		在地系?	
69	302	小碗	b下層	(68)	-	49		ロクロ	鉢形	灰白色	灰釉(白)、鉄粒		内外面；掛子付	
69	303	小碗	b下層	(84)	36	59		ロクロ 削り高台	丸形	灰白色	灰釉、鉄粒	瀬戸美濃 系?	高台裏無釉	
69	304	中碗	d上層	(80) (35)	65			ロクロ 削り高台	丸形	白色	灰釉(白)	大塚相馬	18c末- 19c前	高台裏無釉

表2 S D 1出土陶器製品 観察表

記録番号	遺物番号	器種	出土層位	寸法 (mm)			成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	産定産地	年代	備考
				口径	口径	最大幅							
01	305	中碗	d下層、 d層下層	-	-	(80)	ロケロ	碗反形	白色	外：緑釉?			蓋然
02	306	中碗	b下層	(116)	48	79	ロケロ 削り高台	碗器形	黄白色	灰釉(黄)	肥前	1650~1690	呉器手製。高台砂目。九州(肥前)編年早期。東大編年Ⅲa~Ⅴa期
03	307	中碗	a下層	(98)	39	30	ロケロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(緑)	大船相馬	17c末~18c初	高台装無釉
04	308	中碗	b下層	(96)	42	54	ロケロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(緑)	大船相馬	17c末~18c初	高台装無釉
05	309	中碗	a下層	(94)	35	36	ロケロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(緑)	大船相馬	17c末~18c初	高台装無釉
06	310	中碗	d下層	(102)	39	61	ロケロ 削り高台	丸形	灰色	灰釉(緑)	大船相馬	17c末~18c初	高台装無釉
07	311	中碗	RP92	(103)	39	33	ロケロ 削り高台	丸形	黄白色	灰釉(白)	大船相馬	18c後~18c末	高台装無釉
08	312	中碗	a下層	(94)	-	(40)	98)ロケロ	丸形	灰白色	梨殻文上部灰釉(黄緑灰色)、 裾部緑釉	大船相馬	18c後	腰筒状。外面：掛け分け
09	313	中碗	c下層	(92)	41	33	ロケロ 削り高台	腰筒形	黄白色	灰釉(緑)	大船相馬	18c後~18c末	
10	314	中碗	d上・下層	(90)	(28)	45	ロケロ 削り高台	碗反形	灰色	灰釉(緑)、貫入	京・信楽系	1750~1860	高台装無釉。大船相馬での産出の可能性有。東大編年Ⅴb~Ⅵ期
11	315	中碗	d下層	(94)	(31)	34	ロケロ 削り高台	碗反形	白色	灰釉(緑)、貫入	京・信楽系	1750~1860	高台装無釉。大船相馬での産出の可能性有。東大編年Ⅴb~Ⅵ期
12	316	中碗	RP45	-	50	(57)	(100)	ロケロ 削り高台	半球形	灰色	灰釉(黄)	瀬戸美濃系	打割3段。高台装「モノノ」。
13	317	中碗	b下層	(106)	41	62	ロケロ 削り高台	杉形	灰色	灰釉(黄青)、 貫入			高台装無釉
14	318	中碗	c中層	(92)	(40)	50	ロケロ	杉形	灰白色	外：灰釉(乳白)、若松文	京・信楽系	18c中~	高台部内外無釉。外面若松文：呉器・鉄絵
15	319	中碗	c中層	(92)	36	37	ロケロ 削り高台	杉形	白色	灰釉(白)、若松文	京・信楽系	18c中~	小杉絵。高台部内外無釉。外面若松文：鉄絵。東大編年Ⅴa期以降
16	320	中碗	b下層	(104)	40	62	ロケロ 削り高台	杉形	白色	灰釉(黄緑)、若松文	京・信楽系	18c中~	小杉絵。高台部内外無釉。外面若松文：呉器・鉄絵。大船相馬での産出の可能性有
17	321	中碗	RP90、 RP91、 b下層	(110)	44	66	ロケロ 削り高台	杉形	白色	灰釉(白)、若松文	京・信楽系	18c中~	小杉絵。高台部内外無釉。外面若松文：呉器・鉄絵。東大編年Ⅴ~Ⅵ期
18	322	大碗	RP121	(150)	57	67	ロケロ 削り高台	天目形	褐色	内外：白緑部白化粧土	肥前(唐津)	17c前	口縁部緑毛目技法。高台露筋。九州編年早期相当
19	323	大碗	c上・中・ 下層	(170)	(91)	69	ロケロ 削り高台	丸形	灰白色	外：緑釉			蓋然
20	324	仏飯器	b上層	64	36	54	ロケロ、 底面回転 成形		白色	灰釉(白)			蓋然。底面漆書「天口」
21	325	仏飯器	b上層	70	47	60	ロケロ、 底面回転 成形		灰白色	灰釉(透明)・緑釉(黄緑)	会津本郷?		砕石手?
22	326	仏飯器	b上層	68	42	58	ロケロ、 底面回転 成形		灰色	灰釉(透明)・緑釉(黄緑)	会津本郷?		砕石手?
23	327	小皿	RP134	-	-	(27)	ロケロ水 4引釜	半球	灰褐色	灰釉(黄灰)	肥前(唐津)	17c初	灰釉黄緑部。砂目積み。高台露筋。九州編年早期相当
24	328	小皿	b下・d層 下層	(120)	(40)	27	ロケロ水 引釜	半球	暗灰色	灰釉(黄灰)	肥前(唐津)	17c初	灰釉黄緑部。砂目積み。高台露筋。九州編年早期相当
25	329	小皿	b下層	(120)	(36)	29	ロケロ水 引釜	半球	灰白色	灰釉(黄緑)	肥前(唐津)	17c初	灰釉黄緑部。砂目積み。高台露筋。宛中削り取り。九州編年早期相当
26	330	小皿	b下層	(120)	(42)	27	ロケロ水 引釜	半球	赤褐色	灰釉(黄)	肥前(唐津)	17c初	灰釉黄緑部。砂目積み。高台露筋。九州編年早期相当
27	331	小皿	c下層	129	47	26	ロケロ 削り高台	半球	赤褐色	灰釉(黄)	肥前(唐津)	17c初	蓋然。灰釉黄緑部。砂目積み。高台露筋。九州編年早期相当
28	332	小皿	b層下層	上(118) 下(121)	下44	上(14) 下42	ロケロ水 引釜	半球	灰白色	灰釉(黄緑)	肥前(唐津)	17c初	灰釉黄緑部。砂目積み。2枚出。九州編年早期相当
29	333	小皿	b中層	(132)	42	33	ロケロ 削り高台	碗形	灰褐色	灰釉(黄)	肥前(唐津)	17c前	灰釉黄緑部。九州編年Ⅱ~Ⅲ期。東大編年Ⅰb~Ⅱa期相当
30	334	小皿	c上層	-	(66)	(26)	ロケロ 削り高台	丸形	黄白色	内外：灰釉(白) 内裏・乳濁釉	大船相馬系		内面：打割2割(産定5割)。漆喰
31	335	小皿	d層下層	(126)	(45)	37	ロケロ 削り高台	丸形	白色	外：透明釉 内：緑釉	肥前(唐津)	1650~1690	内外面：輪廊掛け分け。見込：蛇の目輪廊並・砂目。九州編年早期。東大編年Ⅲa~Ⅴa期相当

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	寸法 (mm)			形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考	
				口径	底径	器高							最大幅
71	306	小皿	c下層	-	51	(66)	口ノコ 削り高台	折縁形	白色	外：透明釉 内：鉄釉・緑釉	肥前(唐津)	1600~ 1700	内面：輪葉形けり、見込：蛇の目輪筋、 九州編年表初期
67	337	小皿	c上層	(115)	(50)	32	口ノコ 削り高台	丸形	灰色	内外：透明釉 内：鉄釉	在地		蒸熟飯
72	338	小皿	a上・下 層	(128)	(58)	31	口ノコ 削り高台	丸形	灰白色	内外：透明釉	在地		内面：目録4個(推定5個)
72	339	小皿	a上層	(129)	(60)	37	口ノコ 削り高台	丸形	灰白色	灰釉(白)	大塚相馬系	18c末~ 19c初	内面：目録2個(推定5個)
72	340	中皿	d下層	-	71	(35)~(36)	口ノコ 削り高台	丸形	白色	灰釉(白)	大塚相馬系		高台装束器
72	341	中皿	d上層	137	69	26	口ノコ 削り高台	楕圓形	暗灰色	内外：長石釉・色絵(草花 文)			横溝窯、高台割りがかなり甚
72	342	大皿	a下層	(300)	112	83	口ノコ 削り高台	浅丸形	灰色	内外：灰釉に鉄釉或し赤 絵			胎土目録1(目録5個)
73	343	大皿	c中層、 b中層	206	92	72	口ノコ 削り高台	丸形	赤褐色	外：透明釉 内：白化粧土	在地		目録4個(推定5個)、胎土に長石微細砂を含む
73	344	大皿	RP119	(310)	(138)	109	口ノコ 削り高台	浅丸形	赤褐色	内：白化粧土・鉄・銅緑 釉	肥前(唐津)	1600 1600	唐津二把手、砂目積み、九州編年表初期相当、 肥前内野台(京)
74	345	中鉢	RP120	-	79	86	口ノコ 削り高台	丸形	赤褐色	灰釉(暗灰)	肥前(唐津)	1598~ 1630	胎土目録6(目録4個)、九州編年1-2期相当
74	346	中鉢	上層一括	(176)	(74)	80	口ノコ 削り高台	折縁形	赤褐色	陶粉染付	在地	19c後~ 20c初	陶粉染付鉢
74	347	中鉢	d下層、 b中・下 層	139	79	67	口ノコ 削り高台	楕圓形	黄白色	灰釉(茶緑) 内：見込山水文			梅花鉢、見込：鉄・呉須、相馬系か
74	348	中鉢	d上・中 層	(187)	(70)	79	口ノコ、 口縁貼 付、削り 高台	折縁形	白色	灰釉(黄白)口縁緑釉			目録5個
74	349	中鉢	b上・中 層	(186)	(74)	91	口ノコ 削り高台	折縁形	赤褐色	外：鉄絵(橘文) 内：灰釉(乳白)			梅花鉢、目録2個(推定5個)
75	350	大鉢	a下層、c 上層、d 上・中層	325	110	98	口ノコ 削り高台	浅丸形	淡褐色	灰釉(黄白)・鉄絵			胎土：長石微細砂を全体に含む、目録5個、内 面：鉄絵染付流し
75	351	大鉢	a下層	(340)	(136)	120	口ノコ 削り高台	浅丸形	赤褐色	内：刷毛目或は文	肥前(唐津)	1600~ 1700	九州(肥前)編年表初期、東大編年表初期相当
76	352	片口鉢	上層一括	(112)	(44)	62	口縁切 込江 口、丸 形	口ノコ 削り高台	灰白色	透明釉	在地		高台装束鉢、
76	353	片口鉢	d上層	160	60	74	口縁切 込江 口、丸 形	口ノコ 削り高台	灰白色	灰釉(明緑灰色)	在地		高台装束鉢、目録2個(推定5個)
76	354	片口鉢	c上・中 層	126	52	61	口縁切 込江 口、丸 形	口ノコ 削り高台	灰白色	灰釉(明緑灰色)	在地		高台装束鉢、目録4個(推定5個)
76	355	片口鉢	d上・中 層	(183)	(82)	93	口縁切 込江 口、丸 形	口ノコ 削り高台	灰白色	透明釉	在地		高台装束鉢、目録2個(推定5個)
76	356	片口鉢	b中層、 c中層	198	87	100	口縁切 込江 口、丸 形	口ノコ 削り高台	灰白色	灰釉(明緑灰色)	在地		高台装束鉢、目録4個(推定5個)
76	357	片口鉢	c上層	(164)	(68)	84	口ノコ 削り高台		明褐色	透明釉	在地		高台装束鉢、目録4個(推定5個)、底或下皿小
76	358	片口鉢	a上・中・ 下層、 b上・中・ 下層	(200)	(92)	95	口縁切 込江 口、丸 形	口ノコ 削り高台	灰色	灰釉(浅黄或し緑釉或し 赤)	在地		目録2個(推定5個)
76	359	智鉢	d上層	226	97	125	口ノコ 削り高台		白色	灰釉(薄紫)	大塚相馬系		
77	360	蓋	RP7	90	-	14	111	口ノコ	白色	灰釉(黄白色)			
77	361	灰吹	b中・下 層	30	48	63	63	口ノコ 削り高台	筒3形	灰色	青緑釉		大塚相馬系
77	362	灰吹	c下層	(41)	46	77	(52)	口ノコ 削り高台	筒形	赤褐色	外：白化粧土・緑釉或し 赤 内：鉄釉		口縁部貼付痕
77	363	灰吹	b下層	(43)	49	95	69	口ノコ 削り高台	筒2形	白色	灰釉(淡緑)		大塚相馬系
77	364	甕縁口	b下層	40	30	31	54	口ノコ、 底面貼 付切	灰色	長石釉			蒸熟飯、底面装束(南)

表2 SD1出土陶器製品 観察表

記録番号	遺物番号	器種	出土層位	法量 (ml)			成形	形状	胎土色	裝飾・施薬	産定産地	年代	備考	
				口径	口径	最大幅								
77	365	香炉	b中層	76	49	82	ロケロ 輪高台	有二三 平高台	黄白色	灰胎(白、内外:貫入(水・京・信楽系 製文)				
77	366	大鉢	b上層	-	-	76	(原形)ロケロ、 17葉付		灰色	鉄胎、 外:獅子文			体部胎付文のみ残存、器厚は最大厚	
77	367	飯鉢	c中層、 b下層	-	170	150	190	ロケロ 削り高台	灰褐色	外:緑釉・紫文、 内:鉄胎	瀬戸美濃	1800 1825	底部:紫文印花技法、底部穿孔、瀬戸窯編年 第三段階(小高台)・登米焼陶、口縁部割体(水 滲)の可能性有	
77	368	積木鉢	d上層	72	34	46	ロケロ 底面(帆 糸付)	筒形 輪高台	黄灰色	外:鉄胎			底部有孔(径7mm)	
77	369	積木鉢	a上層	120	60	71	ロケロ	筒形 輪高台	黄灰色	外:刷割鉄胎			底部有孔	
77	370	積木鉢	d上・下 層	172	76	108	ロケロ	筒形 輪高台	黄灰色	外:刷割鉄胎			底部有孔(径20mm)	
78	371	積木鉢	b上層	-	120	70	140	ロケロ 底面(帆 糸付)	黄灰色	外:緑釉			底部有孔(径16mm)、底部磨滑	
78	372	積木鉢	a上層	-	160	100	190	ロケロ	黄灰色	外:白化粗土に緑釉部分 流し			底部有孔(径16mm)	
78	373	積木鉢	RP9b、d 上・中・ 下層	275	154	170	ロケロ 削り高台	筒形 輪高台	灰色	外:白化粗土に緑釉部分 流し・紫文			外面:紫文刷割、底部有孔	
78	374	飯鉢	a下層、 b下層	290	-	60	ロケロ	口縁玉 輪高台	黄灰色	内外:鉄胎 跡目日本/美			在地系	
78	375	飯鉢	d下層	-	136	240	150	ロケロ 削り高台	褐色	内外:鉄胎	在地系		高台痕付付着、高台裏面有	
78	376	飯鉢	RP33	-	118	70	200	ロケロ 削り高台	黄褐色	内外:鉄胎	在地系		内面鉄跡付着	
78	377	飯鉢	c中層	-	136	101	261	ロケロ 削り高台	褐色	内外:鉄胎 跡目日本/美	在地系			
78	378	飯鉢	b中層	379	-	90	390	口縁玉 輪・ 直口形	赤褐色	内外:鉄胎 跡目日本/美	在地系		胎土:石灰質細砂を含む	
78	379	飯鉢	RP4、 b上層	302	118	157	ロケロ 削り高台	口縁玉 削形	黄灰色	内外:鉄胎 跡目日本/美	在地系		胎土:石灰質細砂を含む	
78	380	飯鉢	d上・下 層	355	124	162	ロケロ 削り高台	口縁玉 削形	赤褐色	内外:鉄胎 跡目日本/美	在地系		胎土:石灰質細砂を含む	
78	381	飯鉢	RP9b、 RP9d、 d上・中・ 下層	370	124	163	ロケロ 削り高台	口縁玉 削形	灰色	内外:鉄胎	在地系			
78	382	飯鉢	c中・下 層	367	140	109	309	口縁玉 輪・ 直口形	赤褐色	内外:鉄胎	在地系			
80	383	中瓶	b上層	-	-	90	107	ロケロ 削り高台	筒形 輪高台	灰色	鉄胎	瀬戸美濃	1780	ペコカノ徳利
80	384	大瓶	c下層、 d下層	-	383	284	176	ロケロ 削り高台	瓶首逆 輪形	灰色	灰胎、 鉄胎			長頸球胴形
80	385	大瓶	表土	-	86	190	160	ロケロ 削り高台	瓶首逆 輪形	に高い 褐色	陶胎(染付(紫文))	在地系 (平清水?)	18c中～ 28c初	長頸球胴形、磨胎徳利、流石見製品模倣、高 台裏鉄胎
80	386	大瓶	d上・下 層	-	71	110	154	ロケロ 削り高台	瓶首逆 輪形	灰色	灰胎(磨胎)			長頸球胴形
80	387	大瓶	RP77	-	-	190	154	ロケロ	瓶首逆 輪形	に高い 褐色	陶胎(染付(紫文))	18c中～ 28c初	長頸球胴形、磨胎徳利、流石見製品模倣	
80	388	大瓶	RP77	-	-	190	190	ロケロ	瓶首逆 輪形	に高い 褐色	陶胎(染付(紫文))	18c中～ 28c初	長頸球胴形、磨胎徳利、流石見製品模倣	
80	389	大瓶	RP77、 上層一括	41	75	202	157	ロケロ 削り高台	瓶首逆 輪形	に高い 褐色	陶胎(染付(紫文))	18c中 28c初	長頸球胴形、磨胎徳利、流石見製品模倣	
81	390	磨胎利	a上層、 b上層	25	-	130	74	ロケロ	口縁無 輪形	黄灰色	鉄胎、白泥流し掛け			
81	391	磨胎利	c上・下 層	32	54	155	52	ロケロ	直口形	灰色				
81	392	燈油缶	b上層	-	-	40	52	ロケロ		白色	磨胎	大塚相馬系	18c後～ 加来子、亀裂釉・梅花皮技法	
81	393	瓢箪	c中層	67	-	97	ロケロ、 扇付	瓶子丸 耳形	白色	透明釉・鉄胎部分	会津本郷		砕石手	
81	394	インク瓶	b上層	41	-	57	80	ロケロ	筒形 輪高台	黄灰色	内外:鉄胎	平清水	28c初- 中	
81	395	インク瓶	b上層	46	-	50	87	ロケロ	筒形 輪高台	黄灰色	内外:鉄胎	平清水	28c初- 中	

表2 SD1出土陶器製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	寸法 (mm)				成形	形状	胎土色	装飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	口径	器高	最大幅							
81	306	インク瓶 c上層	-	-	(50)	ロクロ	ロクロ	暗灰色	内外：鉄軸		平清水	20c前 中	体部底に「CINE」	
81	307	インク瓶 表土	-	(84)	(58)	ロクロ	ロクロ	暗灰色	内外：鉄軸		平清水	20c前 中	体部底「SHINOZAKI'S CHAMPAIN INK TOKYO」印時インク製造株式会社インク瓶(筆記用)。26or (印付)部分	
81	308	インク瓶 c中層	-	(118)	(100)	ロクロ	ロクロ	暗灰色	内外：鉄軸		平清水	20c前 中	体部底「MARUZENS INK TOKYO」シ、丸蓋株式会社インク瓶。26or (印付)部分	
81	309	土瓶 d上層 c下層	(85)	-	(84)	ロクロ	丸形、 鉄軸口	灰色	青緑釉		大塚相馬系	19c中～ 六4期	東大塚年埴土～D期	
81	400	土瓶 d上層 c中層	(60)	-	(65)	(120)	ロクロ	茶室形 鉄軸口	暗灰色	青緑釉			六2期	
82	408	土瓶 b上層	(60)	60	98	(170)	ロクロ	筒型五 形、 鉄軸口	灰色	鉄軸		瀬戸美濃系	19c後	底部焼熟痕、穴3個。群筒底、三足
82	402	土瓶 RP17、 a上層	74	92	135	107	ロクロ、 梨付	楕形	褐色	二彩(白化粧土、鉄軸)、 梅花文		大塚相馬系	19c～	二彩土瓶、群筒底、二足
82	403	土瓶 c下層	84	-	(95)	177	ロクロ、 梨付	丸形、 梨口	灰白色	鉄軸(灰)、鉄・瓦筒粘(黄 菊文)				穴7個
82	404	蓋 b上層	8	24	19	30	ロクロ	山蓋	灰黄褐色	外：鉄軸流し掛け				水注類蓋
82	405	小水注 a上層	(63)	(37)	40	90	ロクロ、 梨付	半月口 形	灰色	鉄軸		瀬戸美濃系		
82	406	蓋 RP53	54	-	26		型打		灰黄色	外：鉄軸・白泥				水注類(四角土瓶)蓋、外底：象形技法
82	407	蓋 d中層	24	46	19		ロクロ、 梨付		灰色	外：青緑釉				水注類蓋、右孔
82	408	蓋 b下層	8	62	15		ロクロ	流し 蓋	白色	外：鉄軸?				水注類蓋、右孔(未成)、全体に焼熟痕
82	409	蓋 a上層 b下層	62	30	22		ロクロ 梨付	流し 蓋	暗褐色	外：白化粧土、瓦筒粘				水注類蓋、右孔、大型把手
82	410	甕 d上・中 下層	300	106	156		ロクロ	灰色	底輪に 口縁白 泥			在地		高瀬土、底部右孔(13個確認)
82	411	甕 RP135	-	-	(44)	(70)	ロクロ	灰色	内外：鉄軸		瀬戸美濃系			
83	412	壺 c上層	44	29	42	58	ロクロ	梨丸形	灰色	鉄軸(流注)		瀬戸美濃系		
83	413	小甕 b中層 c下層	72	77	84	104	ロクロ 底部鉄 軸切	暗灰色	鉄軸					
83	414	小甕 d上・中 層	(70)	(60)	95	(114)	ロクロ 底部鉄 軸切	暗灰色	鉄軸					底部準蓋
83	415	小甕 b下層	-	70	(112)	(136)	ロクロ 底部鉄 軸切	暗灰色	外：鉄軸に白泥流し掛け					
83	416	壺 b中層	(63)	(70)	112	122	ロクロ	梨丸形	黄灰色	外：山本文				陶器梨付
83	417	壺 上層一括	-	-	(51)	(70)	ロクロ	梨丸形	赤褐色	白化粧土、瓦筒粘		平清水	19c末～ 20c前	陶器梨付
83	418	小甕 c下層	102	96	174	138	ロクロ 底部鉄 軸切	暗灰色	黄緑釉					
83	419	小甕 d上・中 層	(119)	62	125	(120)	ロクロ 底部鉄 軸切	淡褐色	外：鉄軸(黄) 内：鉄軸					体部右孔
83	420	小甕 d下層	119	96	167	130	ロクロ 底部鉄 軸切	黒褐色	鉄軸					
83	421	小甕 d上層	(150)	101	166	(160)	ロクロ 底部鉄 軸切	褐色	鉄軸					
83	422	小甕 上層一括	-	(92)	(172)	(194)	ロクロ 梨丸高 台付	暗灰色	鉄軸					内面：炭化物付着
83	423	小甕 b下層	-	116	(115)	(192)	ロクロ 底部鉄 軸切	暗灰色	外：鉄軸(緑)に白泥流し 掛け			肥前(調子 系)		
83	424	小甕 b上層 c上層	176	-	(170)	188	ロクロ	梨形赤 釉	底輪に口縁白泥					
84	425	中甕 a上層 d上・中 層	(207)	(91)	(280)	(256)	ロクロ		赤褐色	内外：鉄軸				
84	426	中甕 d上・下 層	(310)	-	(141)	320	ロクロ		赤褐色	内外：鉄軸				

表2 SD1出土陶器製品 観察表

記録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (ml)			成形	形状	胎土色	裝飾・施薬	産定産地	年代	備考	
				口径	口径	最大幅								
84	427	中甕	d上層- c下層	(362)	-	(221)	(366)	口ケ口	灰白色	内外：鉄軸			口縁文字形	
84	428	中甕	RP90	309	160	378	330	口ケ口	灰色	鉄軸			内面耳込・高台裏・砂利付背	
85	429	中甕	a下層- b下層	330	149	347	370	口ケ口	灰白色	内外：鉄軸				
85	430	中甕	a下層- b下層	(290)	-	(190)	(344)	口ケ口	赤褐色	外：白化粧土・松葉文 内：鉄軸	肥前(唐津) 17c~ 18c		唐津二彩手、外面松葉文・鉄・銅緑軸	
85	431	中甕	d上・中 層	278	128	288	323	口ケ口 削り高台	赤褐色	外：白化粧土・松葉文・ 刷毛目 内：鉄軸	肥前(唐津) 17c~ 18c		唐津二彩手、外面松葉文・鉄・銅緑軸	
86	432	蓋	d上層	154	45	43	口ケ口	碗反形	灰色	外：鉄軸・押絵(白配) 内：鉄軸			土銅類蓋	
86	433	蓋	RP92、 上層一括	(210)	(82)	32	口ケ口	口ケ口	灰色	外：刷毛鉄軸 内：鉄軸(灰)			土銅類蓋、目録3個(測定5個)	
86	434	土鍋	d上層	150	57	69	165	口ケ口 梨付	丸形三 足、 碗状双 耳形	褐色	鉄軸?		在地系	
86	435	土鍋	c上層- d上層	(204)	54	67	(210)	口ケ口 梨付	丸形無 足、 碗状双 耳形	灰色	鉄軸?		在地系	
86	436	土鍋	b上層	(207)	63	64	(215)	口ケ口 梨付	丸形無 足、 碗状双 耳形	灰色	鉄軸?		在地系	
86	437	土鍋	b上層- c中層	(290)	(98)	119	-	口ケ口	丸形無 足、 碗状双 耳形	褐色	鉄軸(流経)		在地系	内外保飯、把手残存せず
86	438	土鍋	d上層	(185)	-	98	(210)	口ケ口 梨付	碗状双 耳形	灰色	鉄軸(流経)			
86	439	土鍋	d下層	(188)	83	(96)	(207)	口ケ口 梨付	丸形三 足、 碗状双 耳形	灰白色	鉄軸			内外保飯、脚欠損
87	440	土鍋	c中層	(150)	(60)	72	(164)	口ケ口 梨付	碗状双 耳形	暗灰色	鉄軸			底部保飯
87	441	土鍋	b上・下 層	(240)	(88)	129	(272)	口ケ口 梨付	丸形三 足、 碗状双 耳形	暗灰色	鉄軸(流)			
87	442	土鍋	RP75、 c上層	(148)	76	45	-	口ケ口、 削り	暗灰色	外：鉄軸・焼酎技法 内：鉄軸				
87	443	土鍋	c上層- b上・中 層	209	90	103	220	口ケ口 梨付	丸形三 足、 碗状双 耳形	灰赤色	鉄軸			内外保飯
87	444	行平鍋	b上層	148	60	67	口ケ口	口ケ口	丸形無 足	暗灰色	外：焼酎技法 内：鉄軸	1790-		把手・注口部欠損
87	445	行平鍋	b上層	-	-	(140) 72	(161) 79	(161) 手押ね	明褐色	鉄軸・人物文(印花)				行平鍋把手部分のみ残存
87	446	行平鍋	b下層	-	-	(140) 73	(161) 33	(161) 手押ね	灰色	鉄軸・草花文(印花)				行平鍋把手部分のみ残存

表3 SD1出土陶器集塊 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	流量 (ml)				成形	胎土色	成形	裝飾 施業	推定 産地	備考
				口径	器径	器高	最大幅						
87	447	美焼	c上・中 層	42	29	31	47	16んころ 形	灰色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	
87	448	美焼	上層一括	51	29	27	54	15んころ 形	灰色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	
87	449	美焼	c上層	45	29	34	49	13んころ 形	暗灰色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	
87	450	美焼	d上層	60	37	35	65	23んころ 形	暗灰色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸(全面)	在地	底部回転車切無調整
87	451	美焼	d上層	43	37	43	45	付けた 17んころ 形	暗灰色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	底部輪孔(径6mm)
87	452	美焼	c下層	(43)	(40)	48	48	付けた 17んころ 形	灰黄色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	底部輪孔(径4mm)
87	453	美焼	RP58	(60)	47	39	(70)	付けた 15んころ 形	灰色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	底部輪孔(径5mm)
87	454	美焼	c中層	80	62	64	82	付けた 28んころ 形	褐色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	底部輪孔(径6mm)
87	455	美焼	c下層	(80)	37	36	53	付けた 12んころ 形	灰白色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	底部輪孔(径10mm)
87	456	美焼	c下層	46	42	36	35	付けた 15んころ 形	灰白色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	底部輪孔(径17mm)
87	457	美焼	a下層	(49)	40	38	38	付けた 8んころ 形	灰色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	底部輪孔(径4mm)
87	458	美焼	RP55	(49)	49	63	63	付けた 18んころ 形	灰色	ロクロ、 底部回転車切、 輪胎付	鉄軸	在地	底部輪孔(径6mm)

表4 SD1出土土器・灰器製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	流量 (ml)				成形	形状	胎土色	裝飾・施業	推定産地	年代	備考	
				口径	器径	器高	最大幅								
88	439	小瓶	d上層	(80)	-	(26)		ロクロ	楕圓形	灰色	外：印花技法 内：透甲焼			灰器質	
88	440	小瓶	c上・下 層	87	52	13		ロクロ、 型打、無 高台	赤褐色	内：格子・木の葉文				灰器質、輪花煎	
88	441	土師質 方ツケ	d中層	55	20	13		手捏ね	褐色	素焼き				在地系	
88	442	土師質 大鉢7	c中・下 層	(228)	-	(80)		ロクロ	褐色	素焼き 外：印花文				在地系	
88	443	瓦質大鉢	d下層	-	(182)	(76)	(201)	ロクロロ 明志	底部有 脚	黒色	外：甲き煎			在地系	
88	444	土師質 瓶が	d上層	-	86	41	(106)	ロクロロ 型付	底部有 脚	白色	素焼き			体部(乾)土(押印)、底部黒書	
88	445	土師質 五徳	a上層	(300)	(270)	63		ロクロ	灰色	素焼き				在地系	
88	446	磁鉢	d下層	-	-	(30)	(80)9	ロクロ	口縁外 部二 段、口 縁内白 帯小形	赤褐色	内外：無飾 脚打10本/条			磁器	
88	447	磁鉢	a上層	-	(82)	(54)	(171)	ロクロ、 底部回転 車切、無 高台	暗灰色	口縁：鉄軸 脚打10本/条			肥前	1630~ 1690	灰器、脚打：鉄軸状、九州編年Ⅱ-Ⅲ期
89	448	急須	b上層 RP56	(88)	52	69	(92)	ロクロロ 口付成	楕圓形	暗灰色	無飾、長石釉流し掛け			灰器質、注口部欠削	
89	449	急須	c中・下 層	60	-	(30)	95	ロクロ	楕圓形	灰褐色	無飾			灰器質、注口部欠削	
89	470	急須	b上層	(取柄 74)	(取柄 31)	(取柄 40)	24	手捏ね	褐色					取手のみ焼成、(口)蓋押印	
89	471	蓋	a上層	13	44	19		ロクロ	暗灰色					灰器質、急須蓋、有孔	
89	472	蓋	d上層	19	58	15		ロクロ	暗灰色					灰器質、急須蓋、有孔	



表4 SD1出土土器・炆器製品 観察表

図面 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	裝飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	器径	器高							
89	473	蓋	b上層	(110)	64	15		ロケロ	暗灰色				炆器片、急須蓋、有孔
89	474	燗瓶?	上層一括	49	32	19		手捏ね	灰黄褐色	無釉	在地系		芯立て幅5mm、内面保線
89	475	土人形	b上層 (原層) 43	-	(300) 20	(原厚) 9		手捏ね	褐色	無釉	在地系		首部のみ
89	476	不明土製 品	c中層	55	43	(原厚) 9		手捏ね	褐色	無釉	在地系		外面に筆書
89	477	ミニチュ ア土器	上層一括	24	-	10		手捏ね	茶褐色 部	透明釉	在地系		胎土器
89	478	ミニチュ ア土器	c上層	(50)	(30)	18		ロケロ、 底部(底) 糸切	緑形 褐色	透明釉	在地系		最大径(63)mm
89	479	ミニチュ ア土器	a上層	(36)	(36)	45		ロケロ、 底部糸切	茶褐色 部	鉄釉	在地系		最大径(78)mm
89	480	土鉢	c下層	45	14	(原厚) 3		手捏ね	褐色	無釉	在地系		
89	481	不明土製 品	上層一括	59	43	54		手捏ね	暗灰色	自然釉	在地系		
89	482	瓦貫形 土器	a上・中・ 下層	(296)	(220)	48		ロケロ	底平形 褐色	素焼き	在地系		体部有孔
90	483	土師瓦 式消器	a下層、 b下層	(236)	-	(207) (280)		ロケロ ナデ	褐色	素焼き	在地系		
90	484	蓋	a上層	-	-	-		ロケロ	褐色	内外:鉄釉 外:青花文	陶器		
90	485	甕	b上・下 層、c上 層、d上 層	(666)	(296)	(113) (83) (47)		ロケロ	白色	外:鉄釉	陶器		

表5 SD1出土土器焼台 観察表

図面 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			成形	形状	胎土色	裝飾・釉薬	推定産地	年代	備考
				口径	器径	器高							
91	486	焼焼台	c上層	11	46			ロケロ、 削り、削 糸切	5足 灰色	素焼き	在地		器間18(削り(削計削り)
91	487	焼焼台	c下層	13	46			ロケロ、 削り、削 糸切	5足 白色	素焼き	在地		器間29(削り、台上下部筆書記号あり)
91	488	焼焼台	d上層	14	51			ロケロ、 削り、削 糸切	5足 灰白色	素焼き	在地		器間18(削り(削計削り)、刻書)
91	489	焼焼台	b中層	15	63			ロケロ、 削り、削 糸切	5足 暗灰色	素焼き	在地		器間18(削り(削計削り)
91	490	焼焼台	b中層	11	68			ロケロ、 削り、削 糸切	5足(1 足×B)	灰色	素焼き	在地	器間18(削り(削計削り)
91	491	焼焼台	上層一括	17	73			ロケロ、 削り、削 糸切	5足 暗褐色	素焼き	在地		器間18(削り(削計削り)、刻書)
91	492	焼焼台	b下層	18	78			ロケロ、 削り、削 糸切	5足 褐色	素焼き	在地		器間18(削り(削計削り)、刻書)
91	493	焼焼台	c上層	17	82			ロケロ、 削り、削 糸切	5足(1 足×B)	白色	素焼き	在地	器間18(削り(削計削り)
91	494	焼焼台	a下層	23	90			ロケロ、 削り、削 糸切	5足 褐色	素焼き	在地		器間18(削り(削計削り)
91	495	焼焼台	a下層、 c中層	20	113			ロケロ、 削り、削 糸切	5足(2 足×B)	褐色	素焼き	在地	器間18(削り(削計削り)、刻書)
91	496	焼焼台	上層一括	30	117			ロケロ、 削り、削 糸切	5足 暗灰色	素焼き	在地		器間18(削り(削計削り)、中央穿孔、器部先端に縦線浮着)
92	497	焼台	c上層	8	45			型打 削り	方形、 4足 灰色	素焼き	在地		台部布目瓦蓋、器部先端に縦線浮着
92	498	焼台	上層一括	15	57			型打 削り	方形、 4足 白色 部白色	素焼き	在地		台部布目瓦蓋、器部先端に縦線浮着

表5 SD1出土土器焼台 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (m)			成形	形状	胎土色	裝飾・施薬	推定産地	年代	備考
				口径	器径	器高							
92	498	焼台	c中層	13	57		型打 貼付	丸形、 4足	台部陶 色、脚 部灰白 色	素焼き	在地		台部布目瓦葺、脚部先端に縦筋付着
92	500	焼台	c上層	13	56		型打 貼付	丸形、 4足	台部陶 色、脚 部灰白 色	素焼き	在地		台部布目瓦葺、脚部先端に縦筋付着
92	504	焼台	b中層	12	63		型打 貼付	丸形、 4足	台部陶 褐色、 脚部白 色	素焼き	在地		台部布目瓦葺、脚部先端に縦筋付着
92	502	焼台	c下層	14	66		型打 貼付	丸形、 4足	台部陶 褐色、 脚部白 色	素焼き	在地		台部布目瓦葺、脚部先端に縦筋付着
92	503	焼台	a上層	15	68		型打 貼付	丸形、 4足	台部陶 褐色、 脚部灰 白色	素焼き	在地		台部布目瓦葺、胎土：長石含む

表6 SD1出土瓦 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (m)				成形	形状	胎土色	裝飾・施薬	推定産地	年代	備考
				口径	器径	器高	最大幅							
92	504	瓦	a上層	<40	-	49	204	軒平瓦	褐色	鉄粉・唐草文	在地系		飯焼瓦	
92	505	瓦	c中層	<95	-	38	341	軒平瓦	暗褐色	唐草文	在地系		黒瓦	
92	506	瓦	RP104	<90	75	-	280	軒瓦瓦	暗褐色 黒褐色	蓮珠・三巴文	在地系		飯焼瓦	
92	507	瓦	RP105	<25	135	-	287	軒瓦瓦	灰白色	蓮珠・三巴文	在地系		黒瓦	
92	508	瓦	上層一區	<147	142	-	1344	軒瓦瓦	明褐色	蓮珠・三巴文	在地系	18前～赤瓦		

表7 SD1出土陶器・土器・炆器製品（その他）観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (m)			成形	形状	胎土色	裝飾・施薬	推定産地	年代	備考
				長軸	短軸	厚高							
93	509	瓦葺?	RP113	125	86	78	720						写真のみ スヤ入りの土に塗けた施薬
93	510	スラグ	b下層、 d上・下層	106	84	40	420			破型薄			写真のみ 3点、大きさは一差大きいもの、 重さは合計。

表8 SD1出土瓦 集計表

分類	破片点数			重量 (g)
	裏瓦	表瓦	飯焼瓦	
軒瓦瓦	1			297
		1		1,344
軒瓦瓦			1	280
			1	204
軒平瓦	1			341
	63			13,852
丸瓦		12		3,711
	209			25,009
平瓦 (根瓦)		58		5,516
			237	10,453
合計	274	71	239	60,997

## ※ 墨書遺物 釈文の凡例

- 欠損文字のうち、字数が確定できるもの。  
 [ ] 欠損文字のうち、字数が確定できないもの。  
 ××× 前後に文字が続くことから内容上推定されるが、折損などで文字が失われているもの。  
 「 」 木簡の上端・下端が原形を留めていることを示す。

## ※ 墨書の判読は、山形大学人文学部准教授 三上喜孝氏にご教示いただいた。

表9 SD1出土木製品 漆器検 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)		裝飾技法			漆部文様	備考	
				口径	器径	器高	最大幅	外面塗リ			内面塗リ
95	511	漆器検	d 最下層	(128)	84	(73)	黒	赤	赤	草花文	圓丸桶 (三重桶)、高台裏路：二重格子
95	512	漆器検	a 下層	(112)	62	(60)	黒	黒			圓丸桶 (三重桶)
95	513	漆器検	RW130	(132)	64	(72)	黒	黒			圓丸桶 (三重桶)
95	514	漆器検	a 下層	114	51	52	黒	黒			圓丸桶 (三重桶)、底部有孔 (径 8 mm)
95	515	漆器検	c 下層	-	56	(50)	(123) 黒	赤	赤	草花文	圓丸桶 (三重桶)
95	516	漆器検	d 下層	(118)	61	(60)	赤	赤			圓丸桶 (三重桶)、底部有孔 (径 31×21 mm)
95	517	漆器検	d 最下層	(118)	(54)	(62)	赤	赤			圓丸桶 (四重桶)、高台裏路有
95	518	漆器検	b 下層	(111)	55	73	(115) 黒	赤	赤	丸に宝文?	圓丸桶 (四重桶)
95	519	漆器検	d 中層	(118)	58	70	黒	黒			圓丸桶 (四重桶)
95	520	漆器検	RW36	(124)	55	56	黒	黒			圓丸桶 (四重桶)
95	521	漆器検	a 下層	-	53	(54)	(112) 黒	黒			圓丸桶 (四重桶)、高台裏路「分」
95	522	漆器検	RW111	-	56	(43)	(126) 黒	黒			圓丸桶 (四重桶)、高台裏路有
95	523	漆器検	b 下層	(120)	57	50	赤・黒	赤			高台裏路透
95	524	漆器検	b 下層	-	(52)	(50)	(100) 黒	赤	黄	丸に松皮菱	圓丸桶 (四重桶)、高台裏「花田?」
95	525	漆器検	b 下層	-	(40)	(21)	(86) 黒	赤	黄	?	圓丸桶 (四重桶)、底部有孔 (径 8 mm)
95	526	漆器検	d 下層	-	(43)	(80)	(104) 黒	赤	赤	丸に結文	圓丸桶 (四重桶)
95	527	漆器検	a 下層	(125)	(61)	56	赤	赤			一文字圓桶、内面漆喰粉と刺繍
95	528	漆器検	a 下層	(109)	64	60	赤	赤			一文字圓桶
95	529	漆器検	a 下層	-	57	(53)	(112) 赤	赤			一文字圓桶、高台裏路「三」に原?」
95	530	漆器検	d 下層	-	63	(43)	(114) 黒	赤			平桶小古桶
95	531	漆器検	d 中層	-	(52)	(25)	(104) 赤	赤			平桶小古桶
95	532	漆器検	RW136	-	(52)	(22)	(147) 黒	黒			平桶小古桶
95	533	漆器検	b 下層	(116)	(65)	43	(121) 黒	黒			平桶小古桶
95	534	漆器 大目付	c 下層	70	98	19	158) 黒	黒	赤	梅花、丸文	(孔径 50 mm)
95	535	漆器 大目付	RW142	51	98	27	155) 黒	黒			(孔径 51 mm)
97	536	漆器蓋	d 下層	-	39	(80)	(82) 黒	赤			
97	537	漆器蓋	b 中層	90	(41)	(80)	黒	赤	赤		
97	538	漆器蓋	c 中層	(91)	(48)	(80)	黒	赤	黄	丸に木瓜	
97	539	漆器蓋	a 下層	90	46	28	黒	赤	黄	?	
97	540	漆器蓋	d 下層	106	(46)	(82)	黒	赤	黄	丸に草花文	
97	541	漆器蓋	d 中層	98	52	34	黒	赤			
97	542	漆器蓋	a 下層	-	(50)	35	(105) 黒	赤			縦割桶

表9 SD1出土木製品 漆器椀 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (m)		装飾技法			体部文様	備考	
				口徑	器径	器高	最大幅	外面塗り			内面塗り
97	543	漆器蓋	b中層	107	47	35	黒	黒		高台裏路有	
97	544	漆器蓋	d下層	(52)	(104)	(32)	黒	赤	赤	三引向文	高台裏路有
97	545	漆器蓋	b下層	122	30	(24)	赤	赤			
97	546	漆器蓋	a下層	91	43	25	黒	赤	黄	丸に植物文	高台裏文様有
97	547	漆器蓋	d下層	107	(50)	(24)	黒	赤	赤・黄		
97	548	漆器蓋	b下層	(100)	(51)	(31)	赤	赤		高台裏路「五十嵐」	
97	549	漆器蓋	b中層	(107)	46	24	黒	赤			
97	530	漆器蓋	c下層	96	(41)	(20)	黒	赤		底部有孔(径11mm)	
97	551	漆器蓋	b下層	-	(42)	(23)	(110)赤	赤			
97	552	漆器蓋	a下層	(120)	30	(35)	赤	赤			
97	553	漆器蓋	d中層	92	(40)	33	赤	赤		高台裏路有	
97	554	漆器蓋	b下層	(102)	(44)	(25)	黒	黒		底部方形孔(7×5mm)	

表10 SD1出土木製品 曲物 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (m)			形状	備考
				口徑	器径	器高 最大幅		
100	555	曲物	c中層	200	208	52		わっぱ蓋
100	556	曲物	c中層	186	180	100		わっぱ、外側黒漆「戌寅九月廿八日(撰力) 山藤屋」
100	557	曲物	d中層	108	118	52		底板分層(法量:最大径108mm・器厚7mm)
100	558	曲物	d下層	66	80	55		
100	559	曲物	SD1一括	100	100	56		
100	560	曲物	RW39	(176)	(180)	72		付属品あり(法量:長軸76mm・短軸20mm・器厚12mm)
104	561	柄杓	a下層	(長軸) 76	(短軸) 70	(器厚) 22		写真のみ、柄の当て具
100	562	曲物	a下層	-	215	17		覆付底部
100	563	柄	c中層	(長軸) 298	(短軸) 52	-		柄の子持ち部のみ残存

表11 SD1出土木製品 木蓋 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (m)		形状	区分	備考
				直径	器厚			
101	564	木蓋	a下層	62	5	丸形	小型	
101	565	木蓋	下層一括	65	2	丸形	小型	黒色付着物、両面中央部にくぼみ
101	566	木蓋	a中層	78	6	丸形	小型	腐蝕、一部燃焼による欠損と炭化
101	567	木蓋	b下層	98	6	丸形	小型	
101	568	木蓋	a下層	98	9	丸形	小型	

表 11 SD1 出土木製品 木蓋 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)		形状	区分	備考
				直径	器厚			
101	569	木蓋	d 下層	102	6	丸形	小型	表面黒漆塗り
101	570	木蓋	c 下層	96	5	丸形	小型	
101	571	木蓋	c 下層	118	6	丸形	中型	一部灰化および灰化物付着
101	572	木蓋	a 中層	112	11	丸形	中型	表面黒漆塗り
101	573	木蓋	RW35	141	6	丸形	中型	表面赤漆塗り
101	574	木蓋	b 下層	144	14	丸形	中型	
102	575	木蓋	b 下層	176	9	丸形	中型	
102	576	木蓋	b 中層	155	13	丸形	中型	右側穿孔有 (径 8 mm)
102	577	木蓋	d 中層	154	11	丸形	中型	穿孔有 (径 18 mm)
102	578	木蓋	RW117	317	14	丸形	中型	
102	579	木蓋	RW34	280	14	丸形	大型	
104	580	木蓋	d 中層	271	10	丸形	大型	写真のみ、割れたものを打釘で補修
103	581	木蓋	b 中層	448	24	丸形	大型	
103	582	木蓋	RP92	(472)	28	丸形	大型	

表 12 SD1 出土木製品 台所用品 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			断面形状	備考
				長軸	短軸	高 / 厚		
105	583	朽文字	b 下層	270	79	10		
105	584	蓋	b 下層	146	32	9		
105	585	蓋	b 下層	188	-	7	角形	片口型
105	586	蓋	a 下層	(207)	-	6	丸形	内壁、表面赤漆塗り
105	587	蓋	b 下層	232	-	6	丸形	寸割型
105	588	刀子	d 中層	92	89	26		残物、柄が欠損
105	589	木皿	c 下層	(口径) 94	(底径) 58	(器高) 12		
105	590	木皿	c 下層	(口径) 95	(底径) 56	(器高) 11		
105	591	木皿	a 下層	(口径) 82	(底径) 48	(器高) 17		
106	592	杵?	b 下層	1095	87	-		
106	593	大鉢	RW125	(口径) 500	(底径) 384	362		

表 13 SD1 出土木製品 工具 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			形状	備考
				長軸 (主軸)	短軸	高/厚		
107	504	刷毛	d 中期	153	116	14		柄上部有孔 (径 5 mm)
107	505	刷毛	a 上期	222	84	15		柄上部有孔 (径 6 mm)
107	506	刷毛	a 下期	118	144	5		柄中央部有孔 (径 7 mm)
107	507	横釘	b 下期	(最大 長) (304)	(最大 径) 122	(取手 径) 32		
107	508	鏃	d 下期	326	121	33		上部に方孔 (71×31 mm)

表 14 SD1 出土木製品 調度品 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			形状	備考
				長軸	短軸	高/厚		
108	600	箱?	d 中期	51	(27)	3		釘跡
108	601	箱	c 下期	(80)	60	5		漆工品、黒漆に赤漆刷文様
108	604	箱	c 下期	(73)	36	8		
108	602	盆	a 下期	(口径) (330)	(底径) (248)	35		漆工品、内面赤漆・外面黒漆
108	603	皿?	c 下期	(上部 径) 16	(底部 径) 72	(器高) (36)		脚部・赤漆、裏・黒漆
108	604	皿	RW99	146	38	5		折敷部、表裏・赤黒漆
108	605	皿	a 中期	79	62	5		折敷部、表裏・赤黒漆
108	606	皿	b 下期	105(119)		5		折敷部、表・赤漆、裏・黒漆
108	607	不明木製 品	SD1—括 (土輪)	297	314	11		

表 15 SD1 出土木製品 下駄 観察表

図版 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			形状	備考	
				長軸	短軸	高さ			
111	608	漆塗 下駄	d 下期	135	66	31	角形	後側前方	子供用
111	609	漆塗 下駄	RW101	230	91	41	角形	後側前方	
111	610	漆塗 下駄	a 下期	235	111	48	角形	後側前方	
111	611	漆塗 下駄	a 下期	231	104	41	角形	後側前方	
111	612	漆塗 下駄	RW102	234	109	43	角形	後側前方	台表面に十字削り痕
111	613	漆塗 下駄	c 中期	231	94	43	角形	後側前方	
112	614	漆塗 下駄	RW114	228	107	40	角形	後側前方	
112	615	漆塗 下駄	b 下期	248	84	45	角形	後側前方	台表面に鉄形刻印
112	616	漆塗 下駄	RW115	240	121	60	角形	後側前方	
112	617	漆塗 下駄	c 中期	227	113	53	丸形	後側前方	
112	618	漆塗 下駄	RW103	222	122	64	丸形	後側前方	

表 15 SD1 出土木製品 下駄 観察表

図録 番号	遺物 番号	西種	出土 層位	法量 (mm)			形状	備考
				長軸	短軸	高さ		
112	619	漆面 下駄	d 中層	222	87	33	丸形	後面前方
113	620	漆面 下駄	d 中層	240	87	(35)	角形	陰印型 後面前方
113	621	漆面 下駄	b 下層	219	84	(40)	角形	陰印型 後面前方
113	622	漆面 下駄	b 下層	229	90	79	角形	陰印型 後面前方 表面黒漆塗り
113	623	漆面 下駄	a 下層	198	71	(32)	丸形	陰印型 後面前方
113	624	漆面 下駄	a 中層	225	74	(40)	丸形	陰印型 後面前方 表面黒漆塗り
113	625	漆面 下駄	a 下層	(185)	71	39	丸形	陰印型 後面前方 表面黒漆塗り
114	626	漆面 下駄	b 下層	243	59	(60)	丸形	露印型 後面前方
114	627	漆面 下駄	c 最下層	200	78	40	丸形	露印型 後面前方
114	628	漆面 下駄	d 下層	162	56	(20)	丸形	露印型 後面後方 表面赤漆塗り
114	629	漆面 下駄	a 下層	(172)	58	(25)	角形	露印型 後面後方 表面赤漆塗り
114	630	漆面 下駄	b 下層	(152)	80	(40)	角形	露印型 表面赤漆塗り
114	631	漆面 下駄	a 下層	(193)	68	(26)	丸形	露印型 鼻緒孔無し

表 16 SD1 出土木製品 墨書木製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	西種	出土 層位	法量 (mm)			形状	備考
				長軸	短軸	厚さ		
117	632	木蓋	SD1 一括	130	-	6	丸形	表:「□□ 上々加□」
117	633	木蓋	c 下層	52	-	4	丸形	上部墨書「大神宮 御洗米」
117	634	札?	b 中層	42	38	9	角形	表裏:墨書記号
117	635	加工木片	SD1 一括	126	39	7	角形	下部墨書「イ」
117	636	加工木片	d 下層	117	28	2		表:「× 五十まい」 裏:「× 十四日」
117	637	加工木片	d 下層	148	40	7		表:「□□ □□」 裏:「上 □□□□ □□□□ □□□□」
117	638	札	c 下層	187	60	6	角形	表:「丁比久 (尾号) 四十四 宮六幡山 御洗米三箇人 山形□ 西川保七」裏:「□□□□」
117	639	札	d 中層	123	64	3	角形	裏:「日光山 (後穴) 裏:「尾号」
117	640	部材	b 下層	130	75	81		左側面:給方、表:「明和九年 きり大 壬辰六月」、右側面:「□上 □□□ 最上(尾号十) 早 春□□」
118	641	加工木片	b 下層	399	48	14	角形	表:「此上早野小兵衛」
118	642	札	b 下層	96	36	5	角形	上部穿孔、表:「□□□」 裏:「△□□」
118	643	札	c 中層	79	61	9	角形	表裏・側面墨付着、表:「仁吉」
118	644	札	b 下層	185	61	7	角形	表:右「尾号 □□□□」、中「□ □□□□□□□人御□□」、左「□ □ □□□(尾号門)、裏:「□□□□□ □」
118	645	札	a 下層	185	58	5	角形	表:「□ (尾号) 最上(尾号)□□□× 高□□□部兵衛」、裏:「□ □□□×」
118	646	札	c 中層	179	51	9	角形	表:「しあんとくすくり二階分」
118	647	札	SD1 一括	240	83	11	角形	表:「井に上 (尾号) 七拾式 宮代(幡山) 大坂大宮権 □□□行 御洗米(尾号)」 裏:「仁三少 白髪明徳 善兵衛」

表 17 SD1 金属製品 銭貨 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)		材質	初録年	備考
				直径	厚さ 重量 (g)			
119	648	銭	RM57	23	8 2.33	青銅	1697	賈木通宝 (新費水)
119	649	銭	RM53	22	6 2.06	青銅	1697	賈木通宝 (新費水)
119	650	銭	c下層	23	6 1.88	青銅	1697	賈木通宝 (新費水)
119	651	銭	c下層	23	7 2.37	青銅	1697	賈木通宝 (新費水)
119	652	銭	上層一括	23	- 1.65	青銅	1697	賈木通宝 (新費水)
119	653	銭貨	b上層	21	- 4.69	銀	1922	大日本明治五十年硬貨 (大正11年改正補助銀貨)、大正13年(製造 期間 1922 ~ 1938)

表 18 SD1 出土金属製品 煙管 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)				形状	材質	備考	
				火盤径	筒軸	筒高	小口径				口付径
119	654	煙管 (磨石)	c上層	12	41	17	9	鼓形	石州石	鉄	
119	655	煙管 (磨石)	b中層	16	53	22	13	河骨形	如信形	真鍮	表面金色
119	656	煙管 (磨石)	b下層	16	74	33	10	河骨形	如信形	真鍮	表面金色
119	657	煙管 (磨石)	b下層	-	54	-	10	5	如信形	真鍮	
119	658	煙管 (磨石)	上層一括	-	43	-	13	6	石州形?	真鍮	
119	659	煙管 (磨石)	RM61	-	62	-	11	4	如信形	真鍮	表面金色

表 19 SD1 出土金属製品 その他 観察表

図録 番号	遺物 番号	器種	出土 層位	法量 (mm)			材質	備考
				筒軸	別軸	高/厚		
119	660	鏝	SD1一括	69	(37)	-	鉄	
119	661	鏝頭	c中層	(口径) 38	(底径) 54	83 (器高) 57	鉄	
119	662	刀器具 (切刃)	c上層	37	22	1	鉄	
119	663	刀器具 (石突)	b中層	36	22	15	銅	
119	664	和釘	b上層	(71)	11	-	鉄	
119	665	手造鋸	b上層	130	34	11	鉄	
119	666	鉄	b最下層	140	33	4	鉄	
119	667	鉄	SD1一括	112	38	4	鉄	
119	668	釘丁	SD1一括	(106)	58	4	鉄	先端部欠損により形態不明
119	669	刀子	b下層	(190)	11	2	鉄	先端部欠損
119	670	器具 (磨)	SD1一括	139	-	5	鉄	
119	671	器具 (磨鉄)	上層一括	104	100	7	鉄	



表 20 SD1 出土石製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	西種	出土 層位	法量 (mm)			重量 (g)	石質	色調	推定産地	備考
				長軸	短軸	高/厚					
121	672	硯	c 下層	169	62	21	262.1	粘板岩	黒色		裏面切印「昭和五年 十日町 福山○○」
121	673	硯	d 中層	168	61	21	362.5	粘板岩	黒色	高嶋?	裏面切印「上々高嶋石」
121	674	硯	RP30	<147>	62	23	352	粘板岩	黒色		
121	675	硯	a 下層	<148>	63	23	435.3	粘板岩	黒色		裏面切印・判読不能
121	676	硯	d 上層	<145>	39	24	491	凝灰岩	明褐色		
121	677	硯	c 下層	119	62	16	203.3	粘板岩	黒色		
121	678	硯?	b 上層	<74>	<65>	6	38.2	粘板岩	黒色		
122	679	石筆	土層一括	41	21	18	80	滑石	灰色		
122	680	石筆	a 上層	<41>	-	5	2.3		灰色		
122	681	石筆	a 上層	<55>	-	4	2.1		灰色		
122	682	石板	土層一括(110)	<80>		4	64.1	粘板岩	黒色		
122	683	円筒状 石製品	c 最下層	23 <sup>(厚径)</sup>	3 <sup>(孔径)</sup>	3 <sup>(高)</sup>	1.5	安山岩	灰色		
122	684	碱石	b 下層	<107>	52	24	179.9	凝灰岩	白色		
122	685	碱石	b 上層	91	47	29	229.5	緑色凝灰岩	淡緑色		
122	686	凹内石	b 下層	63	53	35	117.4	軟質凝灰岩	白色		
122	687	凹内石	c 最下層	79	36	33	213.4	軟質凝灰岩	白色		
123	688	硯石	c 下層	45	-	30	36.7		灰白色		写真のみ。右表面に感無量寿経の一部：「八分四寸 画真如 印文一一 画有八 方四寸一一色。」
123	689	珠子	a 上層	(長径) 10	(短径) 9	(孔径) 3	1.6	石英質	透明色		
123	690	珠子	c 上層	(長径) 13	(短径) 9	(孔径) 4	0.9	琥珀	褐色		
123	691	珠子	c 上層	(長径) 14	(短径) 9	(孔径) 5	2.9	青ガラス	青色		
123	692	石鉢	c 下層	75	75	49	182.2	安山岩	暗灰色		

表 21 SE2 出土遺物 観察表

図録 番号	遺物 番号	西種	出土 層位	法量 (mm)				成形	形状	胎土色	釉薬・ 装飾	文様	推定産地	年代	備考
				口径	底径	器高	最大幅								
124	693	小皿		39	30	10		口ウロ、 削り高台	丸形	白色	青灰	内：点文	徳島産		高台製付砂付煎
124	694	ガラス玉		(直径) 18	(短径) 14	(最大径) 5				水色					
124	695	古銭		21	-	-		鑄造						1916 ~	大日本帝国発行一銭青銅貨。大正5年(1916年)制定
124	696	碗		62	-	<52>		口ウロ	筒丸形	褐色	白化粧土	外：草花文			産地不明
124	697	蓋		-	<87>	-	<102>	口ウロ		灰白色	染付	外：草花文			肥前系 裏面朱書き

## IV 調査のまとめ

今回の調査によって、三の丸堀跡のSD1を長さ30m、幅12mにわたって検出した。壁面立ち上がりは西側のみ検出となるものの、調査区全面にわたって堀底面まで調査が達しており、市街地に立地する山形城の調査で、これだけの規模を調査できたことは、大きな成果といえるだろう。出土遺物は17世紀前半から近現代まで大量に出土している。まとまりを見せるのは、17世紀前半の肥前産磁器、18世紀中～19世紀中頃の一群、19世紀中・後半の陶磁器であり、当該期の物流を解明する上で、重要な資料となろう。

### 1 出土磁器碗の法量分布

磁器碗指数グラフは観察表記載の磁器小・中碗の法量から器高と口径の計測値を使用して生産地別・時期別に作成した(第126・127図)。グラフには観察表記載の磁器小・中碗で、生産地が明確に判別でき、欠損していないものを落としてある。なお、時期別のグラフでは、年代の判別できないものは除外した。

当調査区出土磁器碗の傾向として、形状によらず器高が高くなるにつれ口径が大きくなる特徴がある。よって生産地別・時期別の法量傾向をつかむために器高と口径の計測値を選択して使用した。グラフは両軸から離れた点であるほど大ぶりの碗となる。

#### A 生産地別傾向

**肥前産磁器** グラフ全体に分布する傾向にあるが、これは出土した肥前産磁器碗の多様な形状によるものである。形状別で見ると、54～58の筒形碗と、64～67の肥前産丸碗(初期伊万里)は比較的集合している。グラフ上に数字をふっていない点は、浅半球形を含む丸碗である。95の肥前産広東碗も丸碗の集中するところにある。78・79の波佐見産丸碗(くらわんか手)も肥前産と同じ集合に入る。

**瀬戸美濃産磁器** 出土した瀬戸美濃産磁器碗は、肥前産磁器碗に比べて、やや小ぶりなものが多く、99の広東形碗は、肥前産の模倣製品であるため、法量としては大

ぶりの肥前産磁器碗に近い。

在地産磁器碗 在地産磁器碗は、特に見込みみ4つの目跡のある端反碗が比定される。釉薬色はやや水色を呈し、胎土は光沢のあるガラス質である。106も見込みみ目跡を持つ端反碗であるが、胎土および、目跡が3つであることから、V期の肥前産磁器碗として扱った。これら在地産磁器碗は、肥前産磁器碗の丸碗とほぼ同じ位置に集合している。瀬戸美濃産磁器碗よりやや大ぶりである。

#### B 時期別傾向

17世紀中～末葉 いわゆる初期伊万里の出現期であるが、本調査区出土の肥前産磁器は全体のなかで口径が大きいものが多い。特に65～67は口径・器高ともに大ぶりである。78の波佐見産丸碗は出現期が17世紀末以降で前者よりやや遅く産地も異なる。

18世紀中葉 肥前産丸碗と浅半球碗が主体である。口径の広さに対して、器高が低い傾向がある。17世紀中葉に出現する初期伊万里と比べ、小ぶりになっている。

18世紀末葉 本調査区においては、18世紀末葉の磁器碗では筒形碗の出土が多い。体部から口縁部まで円筒形に立ち上がるため、器高に対して口径は小さい。これは形状特有の傾向でもあるため、18世紀末葉前後の本調査区における時期別の傾向としては言いづらい。

19世紀以降 19世紀には、瀬戸・美濃地方で磁器生産が開始されている。瀬戸美濃産の小ぶりな端反碗が本調査区にも出現しているが、肥前産の広東碗、瀬戸美濃産の広東碗等大ぶりの碗も本調査区から依然として出土しており、法量分布で見ると、多様な大きさの碗があったことがわかる。

調査区出土磁器碗全体の時期別傾向として、17世紀中葉では大ぶりの碗が主体を占めたのに対し、19世紀以降では瀬戸美濃産の小ぶりの碗が出現し、肥前産の瀬戸美濃産と比べて大ぶりな磁器碗と併せて多様な磁器碗が存在していたことがわかる。

## C 在産磁器碗

本調査区出土の在産磁器碗は、現在その具体的な出現期が不詳である。しかし、この分量分布から見ると、生産地別グラフでは肥前産磁器碗の集合の中に存在し、瀬戸美濃産磁器碗よりやや大ぶりである。また、時期別グラフより、18世紀中葉以降の集合域にその点が集中していることがわかる。

## 2 三の丸堀の発掘調査事例の比較

今回の調査によって、山形城三の丸堀について多くの知見を得ることができたが、山形市の中心市街地に位置する三の丸は、これまでも複数回の発掘調査が実施されている。ここでは、これまでの調査で得られている堀跡の情報と、今回検出した堀跡SD1は、どのように整合するのかを検討したい。

三の丸堀跡の調査事例をみると、第10次を含めて6カ所で調査が実施されている。三の丸南側では双葉町遺跡で堀と土塁のトレンチ調査を実施し、西側では三の丸第5次調査で堀をSD601、土塁をSF613として調査している。北側では城北遺跡でSD28として調査した。本調査区と同じ城東では、第6次調査でSD202、本調査区に最も近い第一小学校敷地内の調査では、SD1として調査されている。なお、これまでの調査範囲は第4図にまとめているので参照されたい。

調査範囲内では、堀の底面は、すべて平坦で箱堀形。今回の調査でみられた底面に川原石が転がるような状況は、他の調査区では見られない。堀の深さを比較すると、堀底の標高は第10次の東堀底面で138m、第5次の西堀のもので121mと17mの標高差がある。山形城の立地は東から西へと下る扇状地に立地しており、地表面の標高差を見るときはほぼ同等のものとなるため、巨視的には自然地形と同等の勾配で掘られているといえよう。ただし、確認面からの深さは、2m程度のものから4mを超えるものまであり、総じて東側が深くなる傾向があることをつけ加えておく。

壁面の傾斜角は、全体でみると30～40°に収まる。壁面に石組などが見られる事例もあるが、石垣のように全面に施工されるものではなく、護岸のため部分的に補強、修繕したものと考えられる。今回の調査では、壁面

上部に木杭列が見られたが、これも部分的な護岸と思われる。他の調査区では確認されていない。また、ほとんどの調査区で両壁面を検出できていないため、堀幅の推定は困難である。今回の調査区では、西壁のみの検出となったが、上端で12m、下端までの検出幅で8mに及ぶものの、東壁の立ち上がりは確認できない。周辺の地割やそこに残る段差を堀の痕跡と考えるなら、堀幅は15mを超えるものと推測される。対して、第6次調査は堀の両壁面を調査した唯一の事例であるが、ここでの堀幅8.5mほどである。三の丸堀は場所によってこの程度の幅の差をもって構築されているといえよう。

土層をみると、上から黒褐色のシルト層、続いて砂層、底面に粘土層という堆積状況は、各調査事例で共通する事が多いものの、各層の混入物や層厚の事例は異なる。例えば、本調査区で中層とした2～4層の砂層は、最大80cm程度の層厚で、底面から2m以上の高さに堆積している。一方、城北遺跡や6次調査では、最大1.5mほどの層厚があり、底面から数十cmの高さに堆積している。馬見ヶ崎川の氾濫に由来すると考えられるこの砂層は、河川に近い城の北域ほど厚く堆積したと判断できよう。三の丸の規模を考えれば当然のことだが、堀跡の埋没過程は、城内各地域によって大きく異なることがうかがえる。本調査区に近い第一小学校敷地内の調査区をみると、いくつか近似した土層を確認できる。14層とされた褐灰色砂を帯状に含む粘土層は、本調査区における9層に、その上の砂層の13層は、堆積している標高が141m付近と本調査区における2～4層のものに近く、それぞれ同定できるかもしれない。

出土遺物は調査した面積や掘削土量も考慮せねばならないが、調査区ごとに出土量の差が激しい。同じ東側堀の調査と比較しても、本調査区や第6次調査区では何十箱もの出土遺物を得ているのに対し、第一小学校敷地内の調査区では、出土遺物は1箱に留まる。

## 3 SD1の埋没過程について

今回の調査で検出した山形城三の丸東堀であるSD1に関して、堆積状況と出土遺物から、この堀が、いつ、どのように埋没していったかを検討しよう。

堀の底面について、今回の調査では最下層下部に面的に広がる川原石の上面をもって底面とした。この川原石

を含む10層が三の丸堀構築時のものと考えられる。しかし、この層からの出土遺物は411の陶器胴部片一点のみの出土にとどまり、他には出土しなかったため、遺物から構築年代を限定することはできない。

最下層とした9層は、黒色粘土層に灰褐色の粘土が水平に重なり、縮模様を呈するもので、調査区全体に1m強の層厚をもって堆積している。これは滞水と枯涸が繰り返されたことによりつくられたものと考えられよう。この縮模様が崩れずに調査区全面に確認できることから、自然堆積によりゆっくりと埋没して行き、途中で溝洫などの修繕はなされていないことがわかる。この層から出土した遺物は多くはないが、初期伊万里の磁器の丸碗や皿、唐津の溝線皿などがまとまっており、ほぼ同一の標高から、磁器中碗64、小皿168、陶器大碗321、小皿326、大皿343、中鉢344、漆器碗513、鉄666、刀子669などが出土している。これらの出土品の時期は16世紀末～17世紀後半のものである。

下層とした5～8層は、炭化材や日用什器の大量出土から、火事による一括廃棄層と考えられる。出土遺物を見ると、磁器製品は肥前産のものが大勢を占め、客体的に瀬戸美濃系のもが含まれる。碗の器形は丸碗や半筒碗、半球碗、広東碗などと様々である。陶器は大堀相馬の丸碗や京・信楽の杉形碗、唐津の皿などが出土しており、木製品は漆器碗や下駄など、大半がこの層からのものである。遺物の時期は18世紀後半から19世紀前半のものも多く出土している。

その上に堆積する2～4層までの中層は、馬見ヶ崎川の氾濫によるものと考えられ、粘土層や砂層が互層状に堆積する。出土遺物量は下層に比べて多くはないが、陶磁器の内容は、下層に比べ、瀬戸美濃産が増え、在地産のものも含まれるようになる。遺物の時期は18世紀後半から19世紀中頃のものが多い。

下層と中層は、それぞれ火事と洪水に起因し、短期的に堆積した層といえる。これらの時期を特定するため、市内を襲った災害として、火事後、洪水が起きた事例を探る必要がある。より時代を限定するため、出土遺物を見ると、下層出土の硯672に「明和五年戊子四月」と刻まれ、同じく下層出土の建築部材と思われる640には「明和九年壬辰6月」とあることから、明和年間(1764～72年)が下層の火事の上限を示す紀年銘資料

である。ただし、下層の出土品には瀬戸美濃系の磁器が含まれることから、瀬戸での磁器生産の開始にあたる19世紀まで上限を下げられる。

19世紀以降の火事や水害の文献記録は、『古今夢物語』、『事林日記』などに多数残されている。大きな火事としては、1819(文政2)年に起きた「和右衛門火事」で、七日町から出火し、市内北部を中心に1000軒余を焼く大火になったと記される。調査区周辺の横町でも30軒の被害が出たという。この火事による瓦礫を堀に廃棄し下層が形成され、これに続く中層の形成要因たる洪水として、5年後の1824(文政7)年の「申洪水」と呼ばれる大洪水がある。8月の大風雨で馬見ヶ崎川が氾濫し、現山形市内北部を中心に多数の家屋が流失したと伝えられる。調査区周辺は浸水区域より20m以上高い標高にあるが、堀を伝って調査区周辺まで土砂が流れ込んだことは、十分に想定されるだろう。

これらの火事と洪水は、ともに山形城史上、最大規模の災害である。ただし、この火事によるものとするならば、権威の象徴たる城の堀に瓦礫を廃棄したということになる。当時、秋元久朝の藩政において、山形城は象徴としての機能を失っていたためか、あるいは前代未聞の大火事のためか、といった条件を考えなければならない。

城が機能を停止した明治以降の火災記録を探すと、調査区付近では1894(明治27)年の「市南の大火」の他には残されていない。洪水の記録としては、1890(明治23)年の大洪水で、堤防流失1660間、浸水戸数1200を超えたとされる。しかし、これでは洪水が先で火事が後であり、調査区の層序とは逆になってしまう。

更に時間を下らせると、1911(明治44)年に十日町から出火し、89軒を焼失した火事があり、翌1912(大正2)年に大洪水が起き、三の丸北東で水深8尺に達したという記録が残る。ただし、これだとするなら地表から下層まで3mを超える堀が明治末まで残っていたという前提が必要となる。また、下層からの出土遺物に聖紙摺絵や銅版転写の磁器製品が多数含まれていてしかるべきであろうが、それらはいずれも上層からの出土である。

火事による廃棄層は、他の調査区では確認されていないため、記録には残されていない小規模な火災によるものという可能性もあるだろう。馬見ヶ崎川氾濫の記録は、毎年のように残されているものの、標高140mを超え

る調査区周辺まで及ぶ大洪水を想定するとすると、そう多くはない。あるいは河川に近い堀の北側が埋まったことで南側まで土砂が流れこむようになったのだろうか。

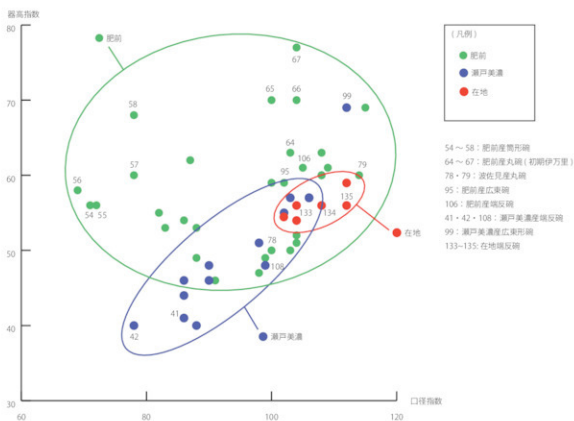
上層からは大量の遺物が出土している。出土遺物の時期は、18世紀後半～19世紀後半のものが多い。磁器碗は瀬戸美濃系の端反碗が大部分を占めるようになり、同型品も多い。他にも薄手酒盃や燗徳川、急須などが多く出土する。陶器は大堀相馬の三彩土瓶や断面T字形になる中衷、387～389の笹絵徳利は同じ場所から同型品が3個体まとまって出土している。大量の遺物は、不要品の意識的な廃棄によるものと考えられ、三の丸堀の埋戻しに伴うものと判断できよう。遺物にはインク瓶など20世紀以降の遺物も少なからず出土している。埋立て造成後の土地利用により紛れ込んだものとも解釈できようが、相当量混在していることから、地表面まで一気に埋め戻されたものではないのかもしれない。

最後に各層位の年代をまとめると、最下層は三の丸の構築期から火事による廃棄層が形成される19世紀まで長い年月をかけてゆっくり埋まっていったことがわかる。下層と中層は19世紀以降の火事と洪水によって短期間に形成されたものであるが、その火事と洪水の特定は、今後の調査事例の増加に委ねよう。今回の調査結果からは、19世紀前～後半のものと時間幅を持たせておく。それに後続する上層は、三の丸堀の埋戻しによる堆積であり、19世紀後半～20世紀前半にかけて、不用品を廃棄しながら埋め立てられたと判断する。

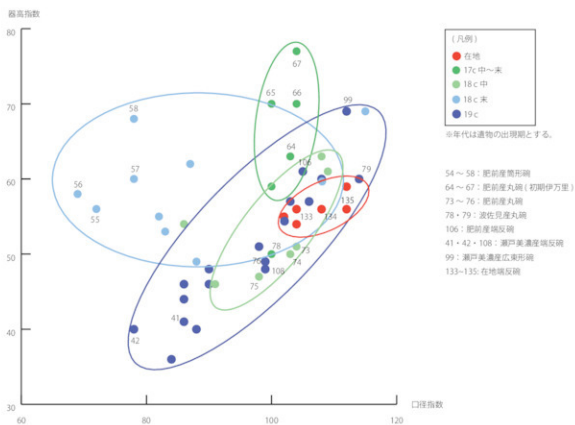
近・現代遺跡は、各地で調査事例が増し、蓄積が進むにつれ、歴史資料としての価値が高まっている。山形城三の丸跡は、近世城郭としてだけでなく、山形の近代化を語る上で欠かすことのできない重要な資料である。今後の調査成果に期待したい。

#### 参考文献

- 大橋康二 1993『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社  
 大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社  
 大橋康二・西田宏子 1995『別冊陶磁 古伊万里』平凡社  
 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の百年 九州近世陶磁学会10周年記念』愛知淑園  
 瀬戸市歴史民俗資料館 2002『大正二年のせともの屋』財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2008『東京・小田原出土の「近代陶磁」―瀬戸・美濃窯の近代2―』財団法人瀬戸市文化振興財団 2011『瀬戸・美濃窯の近代2―生産と流通―』江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学事典』柏書房  
 江戸遺跡研究会 1990『江戸の陶磁器（発表要旨）』江戸遺跡研究会第3回大会  
 江戸遺跡研究会 1993『遺跡にみる幕末から明治（発表要旨）』江戸遺跡研究会第6回大会  
 江戸遺跡研究会 1999『江戸の物流―陶磁器・漆器・瓦から―（発表要旨）』江戸遺跡研究会第12回大会  
 江戸遺跡研究会 2001『食器にみる江戸の食生活（発表要旨）』江戸遺跡研究会第14回大会  
 東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査班 1992『東京都新宿区 内藤町遺跡-放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』警視庁・新宿区南山伏町遺跡調査班 1997『東京都新宿区 南山伏町遺跡-警視庁宇込警察署改築に伴う緊急発掘調査報告書』東京都埋蔵文化財センター 2004『千代田区 外神田西丁日遺跡-秋葉原駅付近土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第147集  
 東京都埋蔵文化財センター 2006『汐留遺跡Ⅳ-旧汐留貨物駅跡地内の調査-』東京都埋蔵文化財センター調査報告第189集  
 豊島区遺跡調査会 2010『雑司が谷』  
 大日本印刷株式会社・新宿区大日本印刷遺跡調査班 1998『東京都新宿区 市ヶ谷左内町遺跡1』  
 東京大学埋蔵文化財調査室 1996『東京大学構内遺跡調査研究年報1 1996年度』  
 東京大学埋蔵文化財調査室 1997『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1) 1997年度』  
 東京大学埋蔵文化財調査室 2011『東京大学構内遺跡調査研究年報7 2007・2008年度』  
 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学本郷構内の遺跡 工學部14号地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7  
 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997『東北大学埋蔵文化財調査年報8 仙台城二の丸第9地区の調査』  
 市立山形商業学校産業調査部 1939『山形商店史』  
 山形市市史編さん委員会 1971『事林日記下』『山形市史 史料編3』山形市  
 山形市市史編さん委員会 1989『山形 古今夢物語』『山形市史資料』第70号  
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2005『山形城三の丸跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第69集  
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2009『中山城跡 第1・2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第178集  
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010『山形城三の丸跡 第4・5次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第190集  
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012『山形城三の丸跡 第5・7・8次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第202集  
 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012『増尾敬道跡第2次 下屋敷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター報告書第203集  
 山形市教育委員会 2003『山形城三の丸跡（山形市立第一小学校敷地内）発掘調査報告書』山形市埋蔵文化財調査報告書第15集  
 山形市教育委員会 2006『双葉町遺跡 城南町遺跡（山形城三の丸跡）発掘調査報告書』山形市埋蔵文化財調査報告書第25集  
 山形市教育委員会 2009『山形城三の丸跡（城北遺跡）発掘調査報告書』山形市埋蔵文化財調査報告書第30集



第126図 磁器碗指数グラフ(生産地別)



第127図 磁器碗指数グラフ(時期別)



上層出土陶磁器集合



下層出土陶磁器集合



最下層出土陶磁器集合



85, 49, 87 同型品



93 同型品



132 同型品



43 同型品



136 同型品



88, 129, 114 同型品



10, 23, 123, 9 同型品



199, 203, 204 同型品



191, 184, 183 同型品

第129回 SD1 出土遺物 同型品集成





213



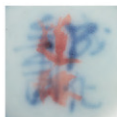
216



217



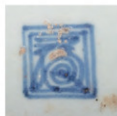
35



109



171



174



220



87



215



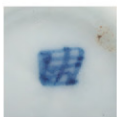
27



153



219



157



79



155



26



14



12



158



16



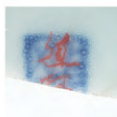
15



156



159



179



226



227



13

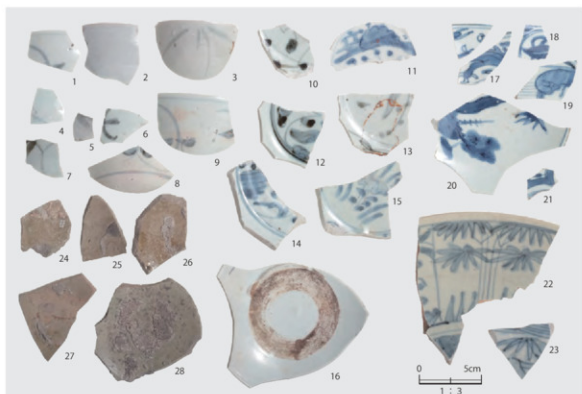


17



63

第130回 SD 1 出土遺物 高台裏銘款



第131図 S D 1実測外遺物

表22 実測外遺物観察表

No.	種別	器種	装飾・施薬	部位	出土層位	産地	年代	備考
1	磁器	碗	染付	口縁	b下層	肥前	1630～1650	唐草文、九州(肥前)編年Ⅱ-2期
2	磁器	碗	染付	口縁	d下層	肥前		
3	磁器	碗	染付	口縁	a下層	肥前	1630～1650	唐文、九州(肥前)編年Ⅱ-2期
4	磁器	碗	染付	体	b下層	肥前		
5	磁器	碗	染付	体	a下層	肥前		
6	磁器	碗	染付	体	b下層	肥前		
7	磁器	碗	染付	体	b上層	肥前		
8	磁器	碗	染付	体	c下層	肥前	1630～1650	唐草文、九州(肥前)編年Ⅱ-2期
9	磁器	碗	染付	口縁	d最下層	肥前	1630～1650	九州(肥前)編年Ⅱ-2期
10	磁器	皿	染付	底	c下層	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
11	磁器	皿	染付	底	b上層	肥前	1620～1640	高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
12	磁器	皿	染付	底	a下層	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
13	磁器	皿	染付	底	d下層	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
14	磁器	皿	染付	底	d下層	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
15	磁器	皿	染付	底	表土一括	肥前	1620～1640	見込：草花文、高台砂目、九州(肥前)編年Ⅱ-1・2期
16	磁器	皿	白磁(透明釉)	底	d下層	肥前	1610～1630	見込：蛇の目輪郭文、九州(肥前)編年Ⅱ-1期
17	磁器	皿	青花	口縁	b中・下層	中国(景德鎮)		内：唐文
18	磁器	皿	青花	口縁	d下層	中国(景德鎮)		梅花瓶、宝文、芙蓉千手
19	磁器	皿	青花	底	b下層	中国(景德鎮)		内：唐文
20	陶器	皿	青花(緑)			中国(景德鎮)		磁器皿60に記載
21	磁器	皿	青花	底	上層一括	中国(景德鎮)		内：宝文、高台砂目
22	磁器	鉢	青花	口縁	a下層、b中・下層	中国(漳州窯系)		区画草花文
23	磁器	皿	青花	底	b中層	中国(漳州窯系)		区画草花文、高台砂目
24	陶器	皿	灰釉(緑)	底	a上層	肥前(唐津)	17c初	灰釉緑線部、砂目精み、高台露筋、九州編年Ⅲ期相当
25	陶器	皿	灰釉(緑)	底	b下層	肥前(唐津)	17c初	灰釉緑線部、砂目精み、高台露筋、九州編年Ⅲ期相当
26	陶器	皿	灰釉(緑)	底	d上層	肥前(唐津)	17c初	灰釉緑線部、砂目精み、高台露筋、九州編年Ⅲ期相当
27	陶器	皿	灰釉(緑)	底	c下層	肥前(唐津)	17c初	灰釉緑線部、砂目精み、高台露筋、九州編年Ⅲ期相当
28	陶器	皿	灰釉(緑)	底	a上層	肥前(唐津)	17c初	灰釉緑線部、砂目精み、高台露筋、九州編年Ⅲ期相当

## 報告書抄録

ふりがな	やまがたじょうさんのまるあとだい10じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	山形城三の丸跡第10次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第206集							
編著者名	天本昌希 齋藤和機							
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3246 山形県上市市中山字壁屋敷5608番地 TEL 023-672-5301							
発行年月日	2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまがたじょう 山形城 さんのまるあと 三の丸跡 第10次	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 とがねまち 十日町 いちつちようめ 一丁目	6201	中世城館 遺跡番号 201-002	38° 14' 54"	140° 20' 6"	20120514 } 20120727	816	山形県保健福祉センター東棟(仮称)新築工事事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山形城 三の丸跡 (第10次)	城館跡	近世 近代	堀跡 1 井戸跡 1		近世陶磁器 木製品 金属製品 石製品		(文化財認定箱数: 70)	
要 約	<p>今回の調査区は、山形城三の丸東堀と土塁の所在地にあたる。土塁はすでに整地されており、その下から遺構は検出されず、堀跡と、それに重複する井戸跡の2遺構のみを検出した。堀跡は調査区30mを縦断し、東側の壁面は確認できなかったものの、検出幅は12mにわたる。堀の深さは地表面から5mを超え、19世紀代の火事による火災廃棄層や、それに続く洪水による堆積層を検出した。</p> <p>多くの遺物が出土しており、17世紀代の肥前陶磁器や、18世紀後半以降の陶磁器、漆器椀や下駄などの木製品が充実している。墨書木材も多く、荷札に城下商人の屋号や人名などが記されている。</p>							

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第206集

## 山形城三の丸跡第10次発掘調査報告書

2013年3月31日発行

発行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷5608番地  
電話 023-672-5301

印刷 中央印刷株式会社  
〒990-0051 山形県山形市御町1-1-5  
電話 023-631-5533